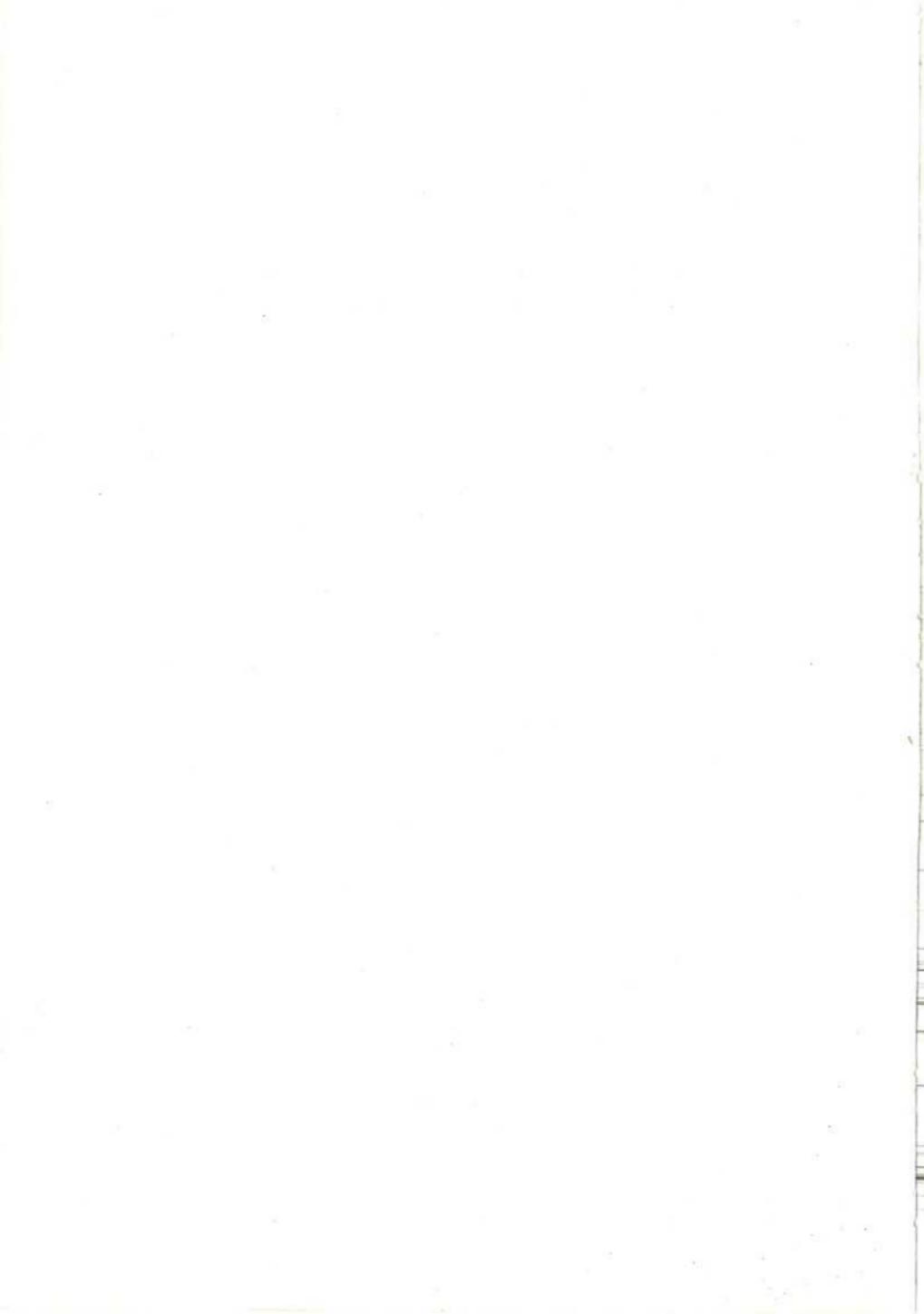


茨城県結城市

# 峯崎遺跡

1996

結 城 市



卷頭カラーページ  
峯崎遺跡掘立柱建物群





撮影 堀越知道

## 序

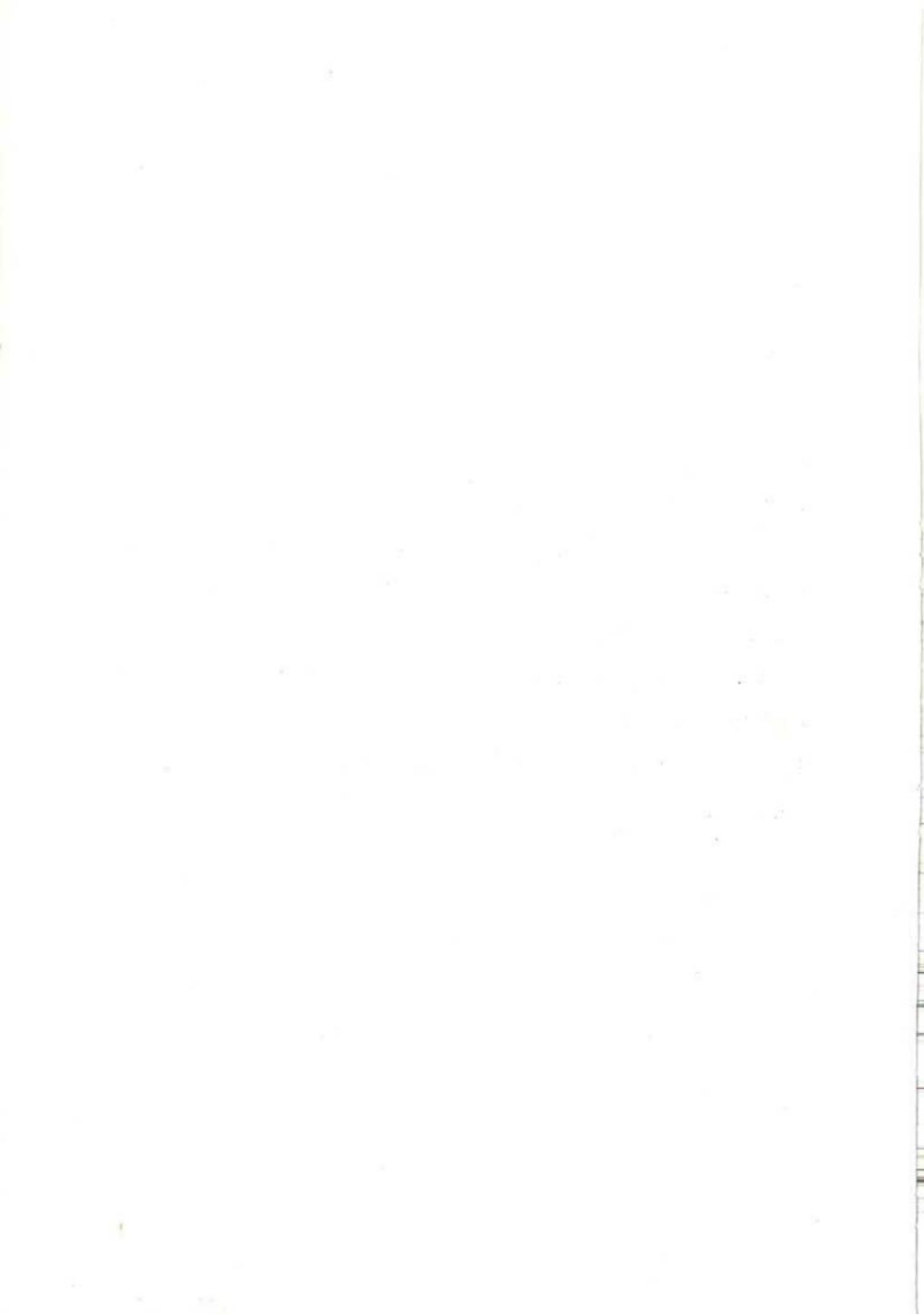
結城市は、豊かな緑ときれいな水などの自然に恵まれ、人の温もりを織り込んだ結城  
袖や古くからの城下町の町並みなど、数多くの歴史的遺産を今に伝える輝かしい伝統を  
誇る街であります。また、それと同時に、先人たちの残した知恵や教訓を、将来のまち  
づくりに生かしていくことは、私たちの大切な責務といえるでしょう。

今回、鹿塗運動公園の整備に関連して、峯崎遺跡の発掘調査が実施されました。峯崎  
遺跡からは、縄文時代から平安時代にかけての百軒を超える竪穴式住居跡や、奈良時代  
から平安時代にかけての掘立柱建物跡など、貴重な遺構や遺物が数多く検出され、大  
きな成果を得ることができました。こうした成果は、本市の古代史を紐解くうえで、重要  
な手掛かりを与えてくれるものであり、なおかつ、調査報告書としてまとめられ発刊さ  
れますことは、誠に意義深いことであります。

最後に、今回の発掘調査にあたり、様々なご指導を賜わった茨城県教育委員会をはじめ、  
調査にご協力をいただいた地元の皆様を始めとする多くの方々、そして、発掘調査  
を担当し、その成果をまとめていただいた山武考古学研究所に心から感謝を申し上げて、  
ご挨拶いたします。

平成8年3月

結城市長 荒井秀吉



## 例　　言

1. 本書は、結城市鹿躍運動公園建設工事に伴い、事前調査された結城市大字結城字峯崎6683番地他に所在する峯崎遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、結城市都市計画課の委託を受け、結城市教育委員会の指導で、結城市長と直接山武考古学研究所が委託契約を結び、実施したものである。
3. 発掘調査に先立ち、遺構分布を掌握するため確認調査に物理探査法の地中レーダー探査が採用された。発掘及び整理調査は、茨城県教育委員会・結城市教育委員会の指導で山武考古学研究所が実施した。
4. 確認調査及び次期ごとの調査期間・面積及び調査担当者は、下記のとおりである。

確認調査期間 平成元年3月13日～ 同年3月31日

発掘調査期間 平成2年1月21日～平成6年2月3日

第1次	平成2年1月21日～平成3年4月30日	桐谷 優・小村正之	2,671.00m <sup>2</sup>
第2次	平成3年5月23日～平成3年9月10日	長井正欣	3,091.00m <sup>2</sup>
第3次	平成4年8月20日～平成5年4月30日	長谷川一郎	6,490.00m <sup>2</sup>
第4次	平成5年12月2日～平成6年2月3日	長谷川一郎	2,112.00m <sup>2</sup>
合　　計			14,364.00m <sup>2</sup>

整理調査期間 平成7年4月1日～平成7年9月30日 整理担当者 長谷川一郎・松田政基

5. 発掘調査に於て、試掘はレーダー探査を桜小路電機有限会社・測量は開成測量株式会社・航空写真は有限会社青高館、写真測量を株式会社こうそくにそれぞれ委託した。
6. 本書の作成にあたり、出土品及び図面の整理には、伊藤順子・黒田宣子・片岡美和子・坂本秀美・磯前綾子・栄やす枝・杉村和子の協力を得た。
7. 本書の編集及び執筆は、結城市教育委員会の指導の元に山武考古学研究所で行なった。執筆の分担は以下の通りである。

また、考古地磁気測定を富山大学教授廣岡公夫氏、墨書き器については国立歴史民俗博物館教授平川南氏、施釉陶器は同博物館助手高橋照彦氏の手をわざらわせた。

第1章 第1節 齋藤伸明（結城市教育委員会）

第2章 第1・2節 長谷川一郎

第3章 第2節 小村正之

第4章 その他 松田政基

8. 本遺跡の記録類（図面・写真）・出土遺物は報告書刊行後、結城市教育委員会が保管している。

9. 発掘調査の実施及び報告書刊行まで下記の各機関・各諸氏のご協力・ご教示を賜りました。記して感謝の意を表します。（敬省略）

茨城県教育委員会・茨城県教育財団・結城市教育委員会・結城市都市計画課・新成田総合社・開成測量株式会社・有限会社青高館・株式会社こうそく・桜小路電機有限会社・阿久津久・黒澤彰哉・川井正一・鶴見貞雄・齊藤伸明・齊藤広道・佐々木義則・赤井博之・土生朗治

## 抄 錄

フリガナ	ミネサキイセキ							
書名	峯崎遺跡							
副書名	結城市文化財発掘調査報告							
卷次	第7集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	松田政基・齊藤伸明・広岡公夫・黒原秀夫							
編集機関	山武考古学研究所 / T286 千葉県成田市並木町221番地 ☎0476(24)0536(代)							
発行機関	結城市 / T307 茨城県結城市大字結城1447番地 ☎0296(32)1111(代)							
発行年月日	西暦1996年3月15日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
峯崎遺跡	茨城県結城市大字結城 6683番地	082074 39	36° 16' 40"	139° 52' 55"	19900121 ~ 19940203	14,364m <sup>2</sup>	鹿庭運動公園建設 に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
峯崎遺跡	集落跡	绳文後期 古墳中期 奈良平安	住居跡 掘立柱建築物跡34棟 井戸跡 土塁 溝跡 配石	136軒 18基 329基 21条 2基	绳文後期掘りこみ式深鉢、 古墳中期と泉式小形埴 奈良・平安時代土師器 (壺A・壺B・皿A・ 皿B・高杯・甕・瓶・ 筋縫車)・蝶瓦・須恵 器(壺A・壺B・环B・ 蓋・皿A・皿B・高杯・ 甕・瓶・円面鏡)・灰釉 (碗・皿・瓶)・綠釉陶 器(蓋)・三彩陶器(小 壺・瓶)・白磁碗・铁 斧・铁鍬・刀子・铁紋 具・長年大實・墨書き 器「中公人」「公人」 「西中」「中後七」「太」 朱書「中」「中」「中」 平瓦線刻「□巣」「寺」 「佛申」など	遺跡の南端部は奈良・平安 時代の集落跡が展開し、一 部には小鐵冶もみられる。調 査区の北端には3×2間を 主体とする掘立柱建築物群 (閣柱式)が配列され、純柱 式(3×2間)1棟を含め て34棟検出されている。掘 り方は律令的な方形を呈し、 柱底は30cmが大半を占める。 掘立柱建築物は掘り方より 三彩陶器が出土するなど、 從米の集落跡とは異なる面 が多い。遺構は官衙的な様 相の濃いものとなっている が、官衙を示唆する文字資料 は得られていない。遺物 はむしろ寺院的な様相が強 い。建築群は北側に広がる 様相を呈しており、今後の 調査が待たれる所である。		

# 目 次

序  
例 言  
抄 錄  
目 次

## 本 文 目 次

第1章 調査に至る経過.....	1	第2節 繩文時代.....	15
第2章 遺跡の位置と環境.....	1	第3節 古墳時代.....	17
第1節 遺跡の位置と地理的環境.....	1	第4節 奈良・平安時代.....	17
第2節 歴史的環境.....	1	第1項 土器分類.....	17
第3章 調査の方法と経過.....	6	第2項 遺構.....	27
第1節 調査の方法.....	6	奈良時代（住居跡）.....	28
第2節 調査の経過.....	7	平安時代（住居跡）.....	36
第3節 基本層序.....	9	（掘立柱建物）.....	92
第4章 検出された遺構と遺物.....	15	第5章 まとめ .....	104
第1節 遺跡の概観 .....	15	付 編 化学分析 鋳冶炉の考古地磁気測定	112

## 図 版 目 次

第1図 峯崎遺跡と周辺の遺跡.....	5	第19図 3号住居跡・出土遺物.....	36
第2図 地中レーダー探査変化網羅図.....	6	第20図 5号住居跡・出土遺物.....	37
第3図 基本層序.....	9	第21図 6号住居跡（1）.....	37
第4図 峯崎遺跡全体図（年次調査範囲図）	10	第22図 6号住居跡出土遺物（2）.....	38
第5図 第1次調査（A区）遺構配置図.....	11	第23図 6号住居跡出土遺物（3）.....	39
第6図 第2次調査（B区）遺構配置図.....	12	第24図 8号住居跡・出土遺物.....	40
第7図 第3次調査（C区）遺構配置図.....	13	第25図 9号住居跡出土遺物.....	41
第8図 第4次調査（D区）遺構配置図.....	14	第26図 10号住居跡・出土遺物.....	41
第9図 54号住居跡・出土遺物.....	28	第27図 12号住居跡・出土遺物.....	42
第10図 55号住居跡（1）.....	28	第28図 13号住居跡出土遺物（1）.....	42
第11図 55号住居跡出土遺物（2）.....	29	第29図 13号住居跡出土遺物（2）.....	43
第12図 64号住居跡・出土遺物（1）.....	30	第30図 14号住居跡.....	43
第13図 64号住居跡出土遺物（2）.....	31	第31図 16・17号住居跡・出土遺物.....	44
第14図 102号住居跡・出土遺物 .....	32	第32図 19号住居跡・出土遺物.....	45
第15図 103・104号住居跡・出土遺物.....	33	第33図 18・20号住居跡・出土遺物.....	45
第16図 114号住居跡・出土遺物 .....	34	第34図 27号住居跡.....	46
第17図 2号住居跡（1）.....	35	第35図 30号住居跡出土遺物.....	46
第18図 2号住居跡出土遺物（2）.....	36	第36図 31号住居跡・出土遺物.....	47

第37図	32号住居跡（1）	47	第75図	110号住居跡出土遺物	74
第38図	32号住居跡出土遺物（2）	48	第76図	113号住居跡出土遺物	74
第39図	33号住居跡（1）	48	第77図	117号住居跡出土遺物	75
第40図	33号住居跡出土遺物（2）	49	第78図	119号住居跡出土遺物	75
第41図	36号住居跡・出土遺物	50	第79図	123号住居跡出土遺物	76
第42図	38号住居跡・出土遺物	51	第80図	127号住居跡出土遺物	76
第43図	42号住居跡・出土遺物（8はスケール1/1）	52	第81図	墨書き土器出土分布図	77
第44図	43号住居跡・出土遺物	53	第82図	墨書き土器集成図（1）	78
第45図	45号住居跡・出土遺物（1）	53	第83図	墨書き土器集成図（2）	80
第46図	45号住居跡出土遺物（2）	54	第84図	墨書き土器集成図（3）	81
第47図	51号住居跡出土遺物	54	第85図	墨書き土器集成図（4）	82
第48図	52号住居跡出土遺物	55	第86図	墨書き土器集成図（5）	83
第49図	58号住居跡・出土遺物	55	第87図	墨書き土器集成図（6）	84
第50図	60号住居跡出土遺物	56	第88図	墨書き土器集成図（7）	85
第51図	63号住居跡・出土遺物	56	第89図	墨書き土器集成図（8）	86
第52図	66号住居跡・出土遺物	57	第90図	施釉陶磁器出土分布図	87
第53図	67号住居跡・出土遺物	58	第91図	施釉陶磁器集成図（1）	88
第54図	68号住居跡・出土遺物（17はスケール1/1）	59	第92図	施釉陶磁器集成図（2）	89
第55図	69・70号住居跡・出土遺物	60	第93図	鉄器集成図（1）	91
第56図	71号住居跡・出土遺物（1）	61	第94図	鉄器集成図（2）	92
第57図	71号住居跡出土遺物（2）	62	第95図	掘立柱建物配置模式図	92
第58図	73号住居跡・出土遺物（1）	63	第96図	SB03a b	93
第59図	73号住居跡出土遺物（2）	64	第97図	SB04・09	93
第60図	73号住居跡出土遺物（3）	65	第98図	SB05・19	93
第61図	74号住居跡・出土遺物（1）	66	第99図	SB05・07・12	94
第62図	74号住居跡出土遺物（2）	67	第100図	SB14・16a	95
第63図	75号住居跡	67	第101図	SB08・14	95
第64図	77号住居跡・出土遺物	68	第102図	SB15・16	95
第65図	79号住居跡出土遺物	68	第103図	SB38	98
第66図	83号住居跡出土遺物	69	第104図	建物跡実測図（SB01・02・20・ 24・25・32）	99
第67図	84号住居跡（1）	69	第105図	建物跡実測図（SB03・25）	100
第68図	84号住居跡出土遺物（2）	70	第106図	建物跡実測図（SB04～06・09～12・ 17・18・20・23・26・29）	101
第69図	93号住居跡出土遺物	70	第107図	建物跡実測図（SB07・08・1416・ 19・20・27・28・31）	102
第70図	99号住居跡・出土遺物（1）	71	第108図	建物跡実測図（SB33・34・38）	103
第71図	99号住居跡出土遺物（2）	72	第109図	建物跡の方向別分布図	107
第72図	100号住居跡・出土遺物	72			
第73図	101号住居跡出土遺物（2はスケール1/1）	73			
第74図	109号住居跡出土遺物	73			

## 写真図版目次

- 卷頭カラー 1
- 卷頭カラー 2
1. 空撮（1）  
1. 峰崎遺跡より結城市街地を望む(南より)
2. 第1次調査区（A区）完掘状況空撮
2. 空撮（2）  
1. 第2次調査区（B区）完掘状況空撮
2. 第3次調査区（C区）完掘状況空撮
3. 空撮（3）  
1. 第3次調査区（C区）掘立柱建築物群空撮
2. 調査区（C区）の南側を望む  
手前の付近より低地帯となる
4. 繩文時代遺構  
1. 23号住居跡遺物出土状況（北より）
2. 同遺物出土状況（北より）
3. 47号住居跡完掘状況（南より）
4. 48・49号住居跡遺物出土状況（西より）
5. 29号住居跡遺物出土状況（西より）
6. 49号住居跡遺物出土状況（南より）
7. 同遺物出土状況（西より）
8. 196号土塙遺物出土状況（西より）
5. 繩文・古墳・奈良時代遺構  
1. 216号土塙遺物出土状況（西より）
2. 229号土塙遺物出土状況（北西より）
3. 44号住居跡完掘状況（東より）
4. 200号土塙遺物出土状況（南西より）
5. 54号住居跡完掘状況（南より）
6. 55号住居跡遺物出土状況（南より）
7. 64号住居跡遺物出土状況（南より）
8. 65号住居跡完掘状況（南より）
6. 平安時代遺構（1）  
1. 2号住居跡（小鍛冶）完掘状況(南西より)
2. 同遺物出土状況（南より）
3. 同床面状況（南西より）
4. 同鍛冶炉（南より）
5. 同土塙鉄滓充填状況（南より）
7. 平安時代遺構（2）  
1. 5号住居跡遺物出土状況（南より）
2. 6・9号住居跡遺物出土状況（西より）
3. 7・22号住居跡遺物出土状況（南より）
4. 8号住居跡遺物出土状況（南より）
5. 10号住居跡遺物出土状況（南より）
6. 12号住居跡完掘状況（南より）
7. 13号住居跡遺物出土状況（南より）
8. 14・21号住居跡完掘状況（南より）
8. 平安時代遺構（3）  
1. 19号住居跡完掘状況（南より）
2. 27号住居跡遺物出土状況（南より）
3. 30号住居跡完掘状況（南より）
4. 31号住居跡遺物出土状況（南より）
5. 32号住居跡完掘状況（南より）
6. 33号住居跡完掘状況（南より）
7. 36号住居跡遺物出土状況（南より）
8. 38号住居跡完掘状況（南より）
9. 平安時代遺構（4）  
1. 42号住居跡遺物出土状況（南より）
2. 43号住居跡完掘状況（西より）
3. 45号住居跡完掘状況（南より）
4. 52号住居跡遺物出土状況（南より）
5. 53号住居跡遺物出土状況（南より）
6. 58号住居跡完掘状況（南より）
7. 63号住居跡遺物出土状況（西より）
8. 66号住居跡遺物出土状況（南より）
10. 平安時代遺構（5）  
1. 67号住居跡遺物出土状況（南より）
2. 68号住居跡遺物出土状況（南より）
3. 69号住居跡完掘状況（南より）
4. 71号住居跡遺物出土状況（西より）
5. 73号住居跡遺物出土状況（南より）
6. 74号住居跡完掘状況（南より）
7. 84・85号住居跡遺物出土状況（南より）
8. 84号住居跡カマド遺物出土状況（南より）
11. 平安時代遺構（6）  
1. 92~94号住居跡遺物出土状況（西より）
2. 99・100号住居跡完掘状況（南より）
3. 101号住居跡完掘状況（南より）

4. 102号住居跡完掘状況（南より）  
 5. 103号住居跡完掘状況（南より）  
 6. 105号住居跡完掘状況（南より）  
 7. 110号住居跡完掘状況（南より）  
 8. 113号住居跡完掘状況（南より）
12. 平安時代遺構（7）  
 1. 114・134号住居跡完掘状況（南より）  
 2. 117号住居跡完掘状況（西より）  
 3. 118・119号住居跡完掘状況（南より）  
 4. 123号住居跡完掘状況（西より）  
 5. 1号掘立柱建築物跡完掘状況（空掘）
13. 平安時代遺構（8）  
 1. 2号掘立柱建築物跡完掘状況（西より）  
 2. 3号掘立柱建築物跡完掘状況（南より）  
 3. 4号掘立柱建築物跡完掘状況（南より）  
 4. 11号掘立柱建築物跡完掘状況（南より）  
 5. 第3次調査（C区）掘立柱建築物群（空掘）
14. 平安時代遺構（9）  
 1. 掘立柱建築物北群  
 2. 掘立柱建築物南群
15. 平安時代遺構（10）  
 1. 掘立柱建築物群全景（空掘）
16. 平安時代遺構（11）  
 1. 掘立柱建築物東群  
 2. 掘立柱建築物西群
17. 平安時代遺構（12）  
 1. 19号掘立柱建築物跡完掘状況（南より）  
 2. 20号掘立柱建築物跡完掘状況（東より）  
 3. 22号掘立柱建築物跡完掘状況（南より）  
 4. 25号掘立柱建築物跡完掘状況（西より）  
 5. 26号掘立柱建築物跡完掘状況（北より）  
 6. 27号掘立柱建築物跡完掘状況（南より）  
 7. 29号掘立柱建築物跡完掘状況（東より）  
 8. 30号掘立柱建築物跡完掘状況（南より）
18. 平安時代遺構（13）  
 1. 31号掘立柱建築物跡完掘状況（南より）  
 2. 38号掘立柱建築物跡完掘状況（東より）  
 3. 235号土塙完掘状況（南より）  
 4. 227・228号土塙完掘状況（南より）
5. 同墨書土器「公人」  
 6. 259号土塙完掘状況（南より）  
 7. 307号土塙完掘状況（南より）  
 8. 311号土塙完掘状況（北より）  
 9. 315号土塙完掘状況（南より）
19. 平安時代遺構（14）  
 1. 324号土塙完掘状況（南より）  
 2. 334号土塙完掘状況（南より）  
 3. 11号溝完掘状況・第2次調査（南より）  
 4. 11号溝完掘状況・第3次調査（南より）  
 5. 12号溝完掘状況・第2次調査（南より）  
 6. 12号溝完掘状況・第3次調査（南より）  
 7. 15号溝完掘状況（南より）  
 8. 17号溝完掘状況（西より）
20. 遺物（1）55・64・102号住居跡  
 21. 遺物（2）102・103・114・2・3・5・6号住居跡  
 22. 遺物（3）6～11・13・14・16～19号住居跡  
 23. 遺物（4）20・22・24～30号住居跡  
 24. 遺物（5）31～34・36号住居跡  
 25. 遺物（6）36・38・39・42・43・45号住居跡  
 50～53・59・60・62号住居跡  
 26. 遺物（7）62・63・65～69号住居跡  
 27. 遺物（8）70～74号住居跡  
 28. 遺物（9）74・75・77・82～84号住居跡  
 88・90・92～94・99号住居跡  
 29. 遺物（10）99～101・105・109号住居跡  
 30. 遺物（11）110～113・115・117号住居跡  
 119・123・127号住居跡  
 31. 遺物（12）127・130号住居跡・5・8・14・16・17号掘立・123・224・227・310・311号土塙・表採  
 32. 遺物（13）6・10・17・24・31・33・51・53・58・61・62・73・84・93・101・103・114号住居跡・34・100号土塙  
 33. 墨書土器 1  
 34. 墨書土器 2

## 第1章 調査に至る経緯

峯崎遺跡は、鬼怒川と田川によって形成された沖積低地から西に延びた小支谷に南面しており、調査前は畑地が広がっていました。畑の表面からは、以前から縄文式土器や石器、奈良時代から平安時代にかけての土器片などが多く数採集することができ、この地域一帯に、かつて長い年月にわたり大きな集落が営まれていたことが予想されていました。

昭和55年、すでに建設されていた野球場や体育館を含めた地域を「鹿塙運動公園」として拡張・整備する計画が決定されましたが、計画敷地内には峯崎遺跡も含まれていたため、都市計画課と教育委員会で遺跡の取り扱いについて協議をしたところ、記録保存の方法を取ることになり、発掘調査を実施することになりました。

当初、鹿塙運動公園予定敷地内における峯崎遺跡の面積は約40,000m<sup>2</sup>と広い範囲であったため、発掘調査を行う前に、調査区域の決定と遺構の分布状況を調べるために、平成元年3月13日から3月31日にかけて、地中レーダー探査および試掘調査を実施しました。地中レーダー探査は19ブロック・約9,000m<sup>2</sup>、試掘調査は8か所、約150m<sup>2</sup>を行いました。その結果、堅穴式住居跡等が検出され、遺跡の存在が確認されるとともに、調査区域と面積約15,000m<sup>2</sup>が決定され、平成2年度より山武考古学研究所に発掘調査を委託して実施することになりました。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

峯崎遺跡は、茨城県結城市大字結城字峯崎に所在し、JR水戸線結城駅約1.5kmに位置する。本遺跡は東側を日光を源とする鬼怒川と西側を栃木県との行政区界にもなっている江川によって開削された南北に伸びる細長い台地上に立地する。結城市街地の北側1.5kmはその台地が急に狭くなり東西幅約0.7kmで、市街地に入ると大きく広がり東西幅約3.0kmを測るようになる。その台地をさらに市街地に向かって放射状のヤト（小支谷）が入り込み、地形的にいくつもの花弁状の台地が形成されている。その中心が結市の現市街地であり、やや東に位置する結城跡となっている。

本遺跡の立地する台地は、その花弁状を呈する台地の中でも最も東端に位置し標高36~38mを測る。さらにその東側は鬼怒川によって形成された沖積地に接する。詳細にはその沖積地より西に小規模のヤト（小支谷）が入り本遺跡に接した低地となり沼化した現状であった。第2次の調査時にはヤト（小支谷）を埋め立てた場所に事務棟のプレハブを設定したため、台風によって水没した経緯がある。

本遺跡の範囲を決定するにはまだ未確定部分が多い。地形的には北を除いて東西南にはヤト（小支谷）が周る事から限定されるものと思われるが、北側の広がりについてはその詳細は理解らないし、遺跡の状況より北側への展開が予想される事から、今後の綿密な野外調査が急務となっている。

## 第2節 歴史的環境

### 縄文時代

旧石器時代の資料は今回の調査では得られなかつたが、結城市史によれば頁岩製の尖頭器とナイフ形石器が結城庵寺付近の上山川才光寺(2)出土となつてゐる。

本遺跡では、早～前期について調査時に纏維を含む細片を表探している所からわずかに營みを知る事が出来たが、ほかの遺跡は鬼怒川・江川に隣接する高位地に多く点在する。早期を代表する遺跡は向原(3)・南原(4)・田間権現(5)・上山川北坪(6)、前期を代表する神立(7)・才光寺(8)・曾根(9)・香取前A(10)・峯崎(11)・塚越(12)がある。土器形式は関山・黒浜式2種で黒浜式が主体的である。前期後半は不明となっている。

中期については、本遺跡で表探資料でわずかに五領ヶ台・阿玉台式の細片を得ている。周辺ではヤトが入り込む周辺の高位地に分布が見られる。代表する遺跡は鹿窪坂ノ上(12)・西原(13)・柳下A(14)・見晴町(15)・曾我殿台(16)がある。土器形式は加曾利E I～IV式・阿玉台式である。

後期に至つて初めて本遺跡で遺構と遺物が検出された。周辺の遺跡には上山川北坪(6)・鹿窪坂ノ上(12)・西原(13)・鹿窪東浦(17)・松木合A(18)・鹿窪沼尻向(19)・本町(20)が代表的であり、中でも鹿窪坂ノ上(12)は称名寺～安行II式まで継続して見られる。松木合Aではみみずく形土偶が発見されている。

晩期については鹿窪坂ノ上(12)・松木合A(18)が代表的で鹿窪坂ノ上では安行IIIa～IIIc・大洞B・BC式、松木合Aは安行IIIa IIIb式が見られる。

### 弥生時代

周辺の弥生時代は、鬼怒川を挟んで対峙する下館市女方遺跡(中期)などが最古とされている。しかし遺構のあり方は再葬墓であり、いまだに集落跡が発見されていない。この現象が特異なものは分からぬが、結城市的現状としては後期後半に属する遺跡が多い。代表的には田間権現(5)・香取前B(21)で文様は櫛状工具での波状文と頭部に簾状に施文するもの、付加条縄文を羽状に施文する菱形土器である。土器形式は櫛・二軒屋敷・広義の十王台式である。本遺跡での検出資料はない。

### 古墳時代

集落跡の実態は、結城市史によれば開発により消滅したものが多い事が怒り心頭的に記述されている。特に山王古墳群・松木合古墳群などは全壊あるいは半壊されたようである。

古墳と集落跡の分布は総体的には鬼怒川の注ぐ田川と江川の流域に展開する。前期の集落としては下原南(22)・寺内東(23)・四ツ京(24)があげられるが、結城市史に記載されている遺物の中には5世紀代に帰属するものも含まれる所から単純集落ではなく複合集落と思われる。また、善長寺(25)は4世紀前葉より6世紀後半まで集落が断続的に営まれる。この時期の古墳は現在まで発見されていない。

中期の集落としては、発掘事例がない事もあって明確ではないが先の下原南・寺内東・四ツ京に含まれるものと思われる。教育財団調査の善長寺(25)は滑石製模造品の生産集落である事が判明した。市内最古の古墳は5世紀代後半とされるもので松木合地区・曾我殿台地区・林備中地区にその出現を見る。松木合浅間塚古墳(26)は復元全長40mの前方後円墳で墳丘に葺き石と円筒埴輪を周らせ、主体部は粘土塚とする。粘土塚内部には緑色の玉類(碧玉か)・鉄器類・小形埴輪が出土している。築造の時期は市史では5世紀中葉～末葉としている。曾我殿台の庚申塚(27)と仙太郎塚(28)は共に30m未満の前方後円墳であるが葺き石

を有し、滑石製の刀子あるいは劍が出土している。林愛宕塚古墳（29）は前述と同様の形態・規模であり、主体部は櫛轍・櫛床で副葬品に方格規矩八乳鏡1面・五鈴銅・鐵劍2振り以上・直刀3振り以上・鐵器多数（甲冑も含む）鐵轍は平根に近いとされている。備中塚古墳（30）は二段築成で南側に作り出しを有する円墳である。直径48mを測り周囲も遺存は良好で葺き石と埴輪を有す。この他船札鷺山古墳（31）・小田寺内南古墳（32）がこの時期に含まれる可能性がある。後期の集落跡と古墳は、市内で爆発的に増加し、鹿窪沼尻向（33）など鬼怒川に注ぐ田川と江川の流域に展開する。古墳も同様な展開を示し、松木合古墳群（34）・曾我殿台古墳群（35）・小田林古墳群（36）・鹿窪古墳群（37）・林備中塚古墳群（38）・上山川古墳群（39）・山王古墳群（40）・香取前古墳群（41）・船札古墳群（42）などがある。

#### 歴史時代

本遺跡は、下総国（現千葉県）結城郡に所在し、左右を下野国と常陸国に囲まれた地域に貫入する下総国の最北西端に位置する。「倭名類聚抄」によれば葛筋・千葉・印旛・迺瑳・海上・香取・埴生・相馬・猿崎・結城・豊田11郡91郷を管し「延喜式」による國の等級は、大国に属する。「結城郡」に関しての文献史料は、「結城市史第4巻」によると現在までに6点見られる。

- ①「統日本記」神護景雲二年（768年）八月庚申に下総国結城郡小塙郷小島村と常陸国新治郡川曲郷受津村の間にて鬼怒川河道の付け替え工事を行なっている記事の中に、正六位藤原朝臣淨辦の関わりが見える。
- ②「万葉集卷二十」天平勝寶七歳（775年）乙未二月、筑紫に派遣される結城郡出身の防人の歌が収載されているものがある。氏族の記載は同史料の中に「結城郡矢作真長」「結城郡忍海部五百磨」「結城郡雀部広嶋」「下総国防人部領使少目從七位下県犬養宿祢淨人」がみえる。
- ③「古語拾遺」大同二年（807年）成立した文献で結城の郡名由来が記載されている。  
「(中略) …故謂之絶国、穀木所生、故謂之結城郡、古語麻謂之絶也、今為上総・下総二国是也… (後略)」
- ④「延喜式卷九 神祇九 神名上」延喜年中（10世紀初頭）健田神社・高橋神社が延喜式神名に記載される。  
(旧健田神社は峯崎遺跡の北東約1kmに位置する)
- ⑤「倭名類聚抄」承平年中（931～937年）に成立した文献で結城郡の郷名が記載されている。  
「倭名類聚抄卷六」下総郷第八十六（高山寺本）結城郡「茂治・高橋・結城・小塙・余戸」  
下総郷第八十六（古活字本）結城郡「茂治・高橋・結城・小塙（塙か）・余戸」
- ⑥「將門記」承平七年（937年）十二月十四日「平将門追討のため平良兼が軍を率いて法城寺門前に通過する。」

結城郡の郷名は「倭名類聚抄」によれば高橋・茂治（茂呂）カ・結城・小塙（小塙か）・余戸の5郷よりもなる。これらの郷の行政区は不明瞭であり、しばしば郡のどの地域担当するかが問題となる。「延喜式 神祇九 神名上」によれば、結城郡では健田神社・高橋神社の2社が式内社として10世紀初頭には成立している。この事より高橋神社（栃木県小山市大字高橋）の所在地付近が高橋郷と推察される。健田神社は結城市大字健田に所在し田川沿いの低地の残丘として健田神社旧跡が現存している。では健田神社の帰属する郷はいかずか、村岡良弼は小塙郷を「小塙」は「小塙」として、結城市街の東方結城市大字小塙にその所在を推定されているところから健田神社旧跡がその他に接する事からあるいは小塙郷内に位置していた可能性も否定できない。健田神社が田川沿いの低地になぜ位置していたかという理由については積極的な史・資料はないが、その母体となる村落が田川あるいは鬼怒川の氾濫により消失したため、村の社としての性格を失った

事が佐々木慶一（結城市史第4巻）に指摘されている。

茂治（茂呂）郷は、結城市南部に茂呂という村落があり、鎌倉時代には称名寺領茂呂郷としてあらわれており、これをもって茂呂郷に比定されている。

なかでも結城郷は郡の中心となるべき行政区域であり、郡衙（郡家）が置かれていた。その郡衙（郡家）には付属寺院として郡寺が近接して位置し、結城寺（43）がそれに相当するものと思われる。結城寺は結城市大字矢畠に所在し、古代から中世において窮屈された大寺院である。奈良時代初頭に創建された結城寺は、嘉吉元年（1441年）結城合戦で焼失するまで700年間存続し、「將門記」にあらわれる「結城郡法城寺」と推定されていた。結城市教育委員会では、昭和63年より平成6年度まで7次にわたる結城寺発掘調査（「茨城県史料」：考古資料：奈良平安時代）において多くの資料を得ている。伽藍配置は「法起寺式」を採用し、特に傳仏は法隆寺銅板如来三尊像と同型の原型から作られた如来倚像、法隆寺献納宝物押出仏と同原型から作られた如來座像が出土しているところから中央との関わりが指摘されている。文字資料としては新たに「法城（成）寺」「新治」「有岐」の文字瓦を得る事ができた。この資料の出土によって「法城（成）寺」は先に述べた「將門記」に登場する「結城郡法城寺」を裏付ける事となった。創建期の軒丸瓦は下野薬師寺の影響を受けた複弁八葉、上野植木魔寺との類似点をもつ單弁十葉、複弁八葉の複弁が単弁に変化する単弁十六葉、下総国分寺と同型式複弁八葉である。軒平瓦は創建期の重弧文、均整唐草文、重文郭がある。また、東日本で初例となった桂先瓦「單弁八葉」が出土している。結城寺に供給した八幡瓦窯（44）は、結城寺より北東へ約500m離れた台地の突端に位置する。1953年に高井悌三郎により調査されている。

平安時代後期この地で承平五年（935年）～天慶三年（940年）の5年間、東国一円を巻き込んで中央貴族社会を震撼させた事件があった。これが「平将門の乱」である。この事件は平氏同族の内部抗争「女論」といわれる婚姻関係をめぐる対立に起因する。また、この要因と結末を、峰岸純夫によれば「当時東国各地で勢力を蓄え、競い合っていた国司・郡司クラスの豪族間の抗争が絡み、さらに中央政府の東国支配の矛盾が拍車をかけて大きな内亂に発展したのである。」さらに「…「東国国家」夢は潰え、…その二世紀半後、源頼朝によって、この将門の「夢」は実現する事となる。」と結んでいる（結城市史第4巻）。

第1表 周辺の遺跡一覧表

1	峯 縮	歴史時代集落跡	16	曾我殿台	繩後加曾利E阿玉台式	31	驚神社	前方後円墳
2	上山川才光寺	頁岩製尖頭器	17	西原	繩後称名寺～安行Ⅲ式	32	小田寺内南	前方後円墳
3	向 原	繩早夏島式	18	松木合 A	繩後称名寺～安行Ⅲ式	33	下り松	集落跡・瓦
4	南 原	繩早茅山式	19	鹿塙尻向	繩後称名寺～安行Ⅲ式	34	松木合古墳群	後期
5	権 現	繩早茅山式	20	本町	繩後称名寺～安行Ⅲ式	35	曾我殿古墳群	後期
6	上山川北坪	繩早茅山式	21	香取前	弥生後期	36	小田林古墳群	後期
7	神 立	繩前閑山・黒浜式	22	下原南	古墳時代中期	37	鹿塙古墳群	古墳後期
8	才 光 寺	繩前閑山・黒浜式	23	寺内東	古墳時代中期	38	椿山中塚古墳群	古墳後期
9	中 曾 根	繩前閑山・黒浜式	24	四ツ京	古墳時代中期	39	山川の古墳群	古墳後期
10	香 取 前	繩前閑山・黒浜式	25	善長寺	昭和60年教育財團調査	40	山王古墳群	古墳後期
11	塚 越	繩前閑山・黒浜式	26	松木合浅間塚	前方後円墳・葺石	41	香取前古墳群	古墳後期
12	鹿塙坂ノ上	繩中加曾利E阿玉台式	27	曾我殿庚申塚	前方後円墳	42	戸崎古墳群	古墳後期
13	西 原	繩中加曾利E阿玉台式	28	仙太郎植荷塚	前方後円墳	43	結城廃寺	奈良時代・平成元～3年志教委調査
14	拂 下 A	繩中加曾利E阿玉台式	29	林愛宕塚	前方後円墳・方格壇	44	八幡瓦窯	奈良時代・昭和28年高井悌三郎調査
15	見 晴 町	繩中加曾利E阿玉台式	30	備中塚	円墳・造出・葺石	45	城の内館跡	中性館跡



第1図 峯崎遺跡と周辺の遺跡

## 第3章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

#### 確認調査)

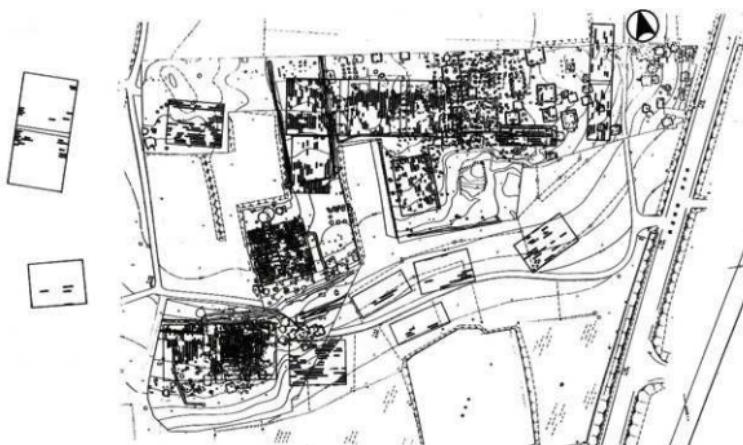
発掘調査は、遺構分布状況・時期・性格などを確認するための確認調査（結城市教育委員会実施）から開始し、物理探査法の地中レーダー探査を採用して行った。

その結果、1～20ブロックの内3・8・9・13～20で遺構・または搅乱と思われる地中変化が大小確認された。また、その結果を追認するためブロック3・5・6・9・11・12・15の表土を除去し遺構の有無を確認した。特にブロック8・9・14・16の地中変化は住居跡・溝跡と判断され、これを基に調査対象範囲と調査面積が決定された。

#### 本調査)

確認調査によって得られた成果に基づき、結城市教育委員会の指導の基に本調査の範囲15,016.5m<sup>2</sup>を決定し、調査は1～4次に亘り実施された。

調査区には結城市都市計画課「工事名鹿庭運動公園現況平面図縮尺1/500」を基に座標（X座標+1,900、Y座標-2,200）を基準に20mグリッドを設定し、グリッド番号は南北を算用数字、東西をアルファベットでそれぞれ付した。遺構の掘下げは、土層観察の為のベルトを設定し、慎重に進めた。実測図の縮尺は、遺跡全体図500分の1、遺構配置図100分の1、住居跡・掘立柱建築物跡・土塁・溝跡は平面図・土層図・断面図ともに20分の1で行なった。



第2図 地中レーダー探査変化網羅図

写真の撮影は、白黒用大型カメラ1台、白黒及びカラースライド用小型カメラ各1台を使用し、調査の進捗状況に合わせ、また各調査段階に必要に応じて実施した。さらに、遺跡の全体写真（空撮）はバルーンを使用し、遺構の状況により住居跡・掘立柱建築物跡・ピット群等も空撮の対象とした。

さらに第4次調査では、遺構の航空測量図化を実施した。化学分析では東日本では初めてとなる考古地磁気測定を行なった。

## 第2節 調査の経過

### 平成2年度（1991年）第1次本調査開始（仮称A地区）

1月18日中央公民館にて作業員説明会を行なう。21日発掘調査開始。機材搬入、プレハブ内整備、A区調査区域入り禁止用柵設置、ガス・電気の手配を行なう。調査区東側に幅10mのトレーナーを設定、深さ10cmで住居跡4軒が確認された。22日表土除去作業（～31日）および遺構確認作業（～2月2日）を行なう。31日残土処理作業を行なう。（～2月2日）

2月2日調査区南側にトレーナーを2本設定し沼地への落ち込みを確認。5日強風。グリッド杭・水準杭を設置する。確認された遺構は竪穴住居跡29軒・土坑87基・溝5条・ピット多数で、縄文～平安時代にわたると考えられる。6日遺構確認状況の空撮および遺構配置図作成を行なう。A区遺構調査を開始。

3月22日A区200分の1全測図の作成を行なう（～29日）。30日発掘調査を中断する。

### 平成3年度（1991年）

4月4日発掘調査を再開する。16日結城市教育委員会（以下「市教委」と記す）および結城市都市計画課（以下「市都市計画課」と記す）来訪、平成3年度の発掘調査区を設定する。19日A区100分の1全測図の作成を行なう（～23日）。30日A区の調査を終了する。

### 平成3年度（1991年）第2次本調査開始（仮称B地区）

5月23日B区市教委・市都市計画課へ挨拶する。24日B区発掘調査開始。表土除去作業（～31日）および遺構確認作業（～6月4日）を行なう。31日残土処理作業を行なう（～6月1日）。

6月4日B区遺構確認状況の空撮を行ない、遺構調査を開始する。5日グリッド杭・水準杭を設置する。B区遺構配置図を作成する（～6日）。19日結城市議会教育民生委員が現場視察。26日結城市都市計画課来訪。

7月2日市教委と現地説明会の打ち合わせを行なう。10日結城市立城南小学校児童およびPTAが遺跡見学を行なう。11日市都市計画課来訪。31日新聞発表を行う。

8月4日現地説明会を行なう。（見学者数63名）21日B区全測図の作成を行なう（～22日）。26日結城市内小・中学校の社会科担当教員見学。27日市都市計画課来訪。

9月2日市都市計画課来訪。4日B区の遺物整理を行なう（53箱）。市教委・市都市計画課と打ち合わせを行なう。5日重機による上ならしを行なう。6日B区旧石器時代の調査を開始する。C区表土除去作業を行なう（～25日）。10日B区の調査を終了する。

### 平成3年度（1991年）第3次調査の確認調査開始（仮称C地区）

12日C区遺構確認作業を行なう（～10月3日）。13日富山大学広岡公夫教授と学生2名により、2号住居跡内鍛冶炉跡の考古地磁気測定を行なう。B区の囲面整理を行なう。19日（木）雨台風18号と秋雨前線の影響による大雨のため、床上60cmまで浸水する。20日前日の被害の後片づけ、清掃を行なう。25日

残土処理作業を行なう（～10月4日）。26日市都市計画課来訪。10月3日C区遺構確認状況の空撮を行なう。5日C区に実測用の仮杭を設定し、400分の1遺構確認図を作成する。14日C区の検出遺構にグランドシートをかける。15日市教委・市都市計画課へ挨拶する。16日事務処理・保全対策などを終了、調査を中断する。



考古地磁気測定

平成4年度（1992年）第3次本調査開始（仮称C地区）

8月20日C区の調査を再開、市教委・市都市計画課へ挨拶する。21日C区草刈り作業・グランドシート撤去作業を行なう（～28日）。28日C区遺構再確認作業を行なう（～9月2日）。グリッド杭・水準杭を設置する。9月2日C区遺構調査を開始する。四日市教委・辰馬考古資料館長高井柳三郎館長・同学芸員來訪。7日市教委・国立奈良文化財研究所（以下「奈文研」と記す）大脇潔考古第2調査室長來訪。21日市教委・結城市区画整理課が現場視察。22日市教委・茨城県教育委員会が現場視察。25日強風。市教委・茨城県教育財團埋蔵文化財部浅井哲也氏來訪。

10月6日作業員を増員する。

12月17日C区100分の1全測図を作成する（～21日）。26日C区調査を中断する。

平成4年度（1993年）

1月11日C区調査を再開する。18日C区掘立柱建物群密集地造り方実測を行なう（～20日）。22日市教委・茨城県教育庁文化課來訪。2月11日C区遺構配置図を作成する。15日奈文研島田調査官來訪。3月22日東側道路部分の表土除去作業を行なう（～24日）。24日東側道路部分の遺構確認作業を行なう。25日トレンチャーによる搅乱の除去作業（重機併用）を行なう（～26日）。26日調査を中断する。

平成5年度（1993年）

4月5日調査を再開、調査区南東側搅乱部分の除去作業を行なう（～6日）。7日調査区南東側搅乱部分の遺構確認作業を行なう。13日調査済の一部を埋め戻す。26日全体清掃を行なう（～5月1日）。5月1日C区空撮を行なう。8日C区の調査を終了、午後から現地説明会を行なう。

平成5年度（1993年）第4次本調査開始（仮称D地区）

12月2日市教委・市都市計画課へ挨拶。D区の表土除去作業・残土処理作業を行なう（～7日）。8日ブレハブ・トイレ・物置・機材等の整理を行なう。9日安全対策を行なう。D区遺構確認作業を行なう（～10日）。10日グリッド杭・水準杭を設置、D区遺構調査を開始する。16日D区200分の1遺構確認全測図を作成する。26日調査中断。

平成5年度（1994年）

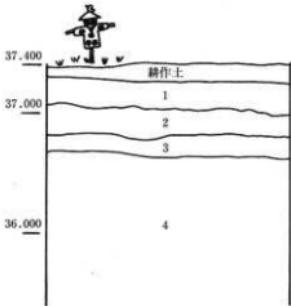
1月5日調査再開。31日航空写真測量（住居跡）を行なう。

2月1日茨城県史編纂室齊藤弘道氏・市教委來訪。3日38号掘立の調査終了、D区遺構調査終了、4ヵ年にわたる峯崎遺跡の発掘調査を全て終了し埋め戻し作業を開始する。4日撤収する。

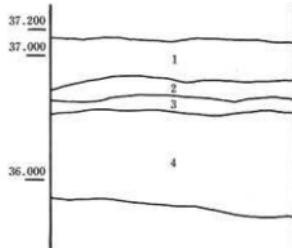
### 第3節 基本層序

本遺跡は、調査区が東西に長いためB・D区基本層序調査を行なった。その結果、遺構検出面は耕作土直下であるが、擾乱（トレンチャー）が激しく特にC区北側中央部（掘立柱建築物群の西側）の遺存状況は悪い。調査区高位部に亘っては特に変化は見られないものの、D区の東端部では谷部へ向かって傾斜しているところから、Ⅱ層上にクロボク土の堆積が認められる。とくにサンプリングは行なっていない。

B区基本層序

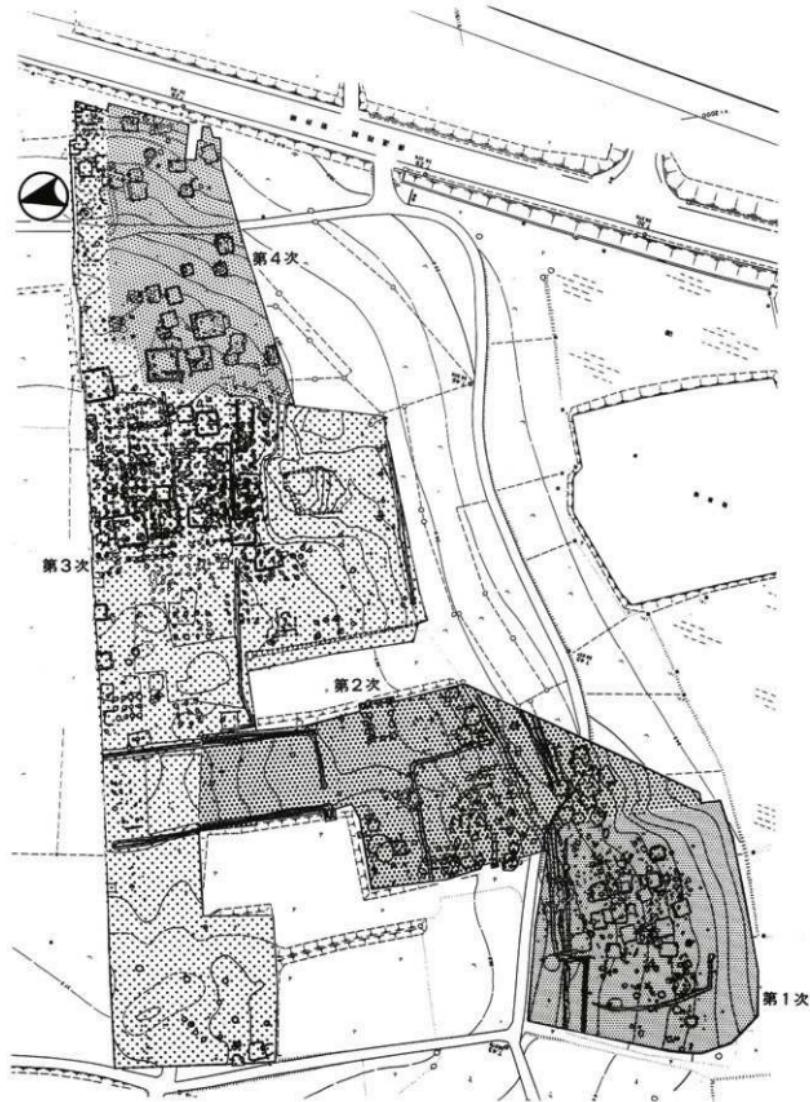


C区基本層序

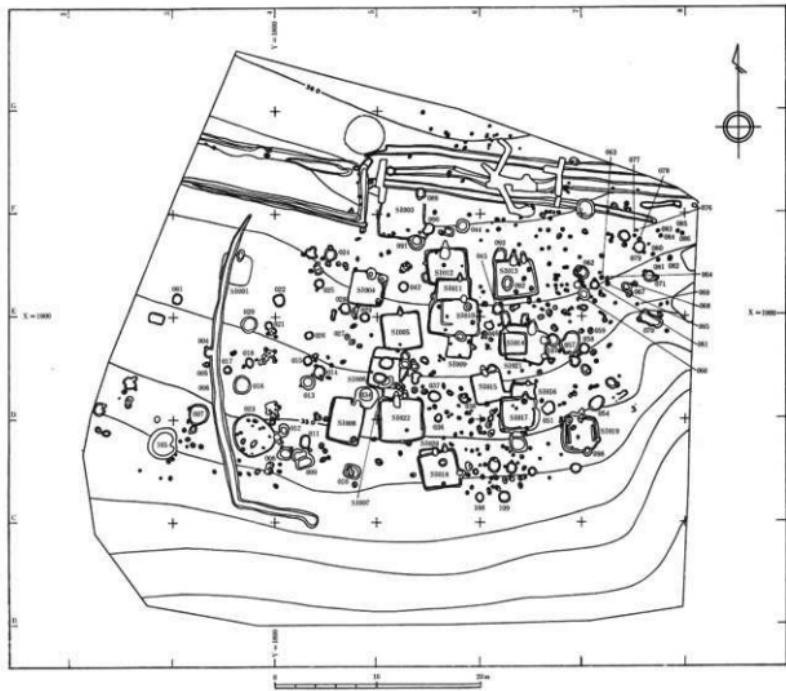


- 1層 暗褐色粘質土（ソフトローム：遺構検出面であるが耕作により削平が著しい）  
2層 明褐色粘質土（ハードローム）  
3層 黄褐色土（鹿沼軽石層）  
4層 暗褐色粘質土（ハードローム）

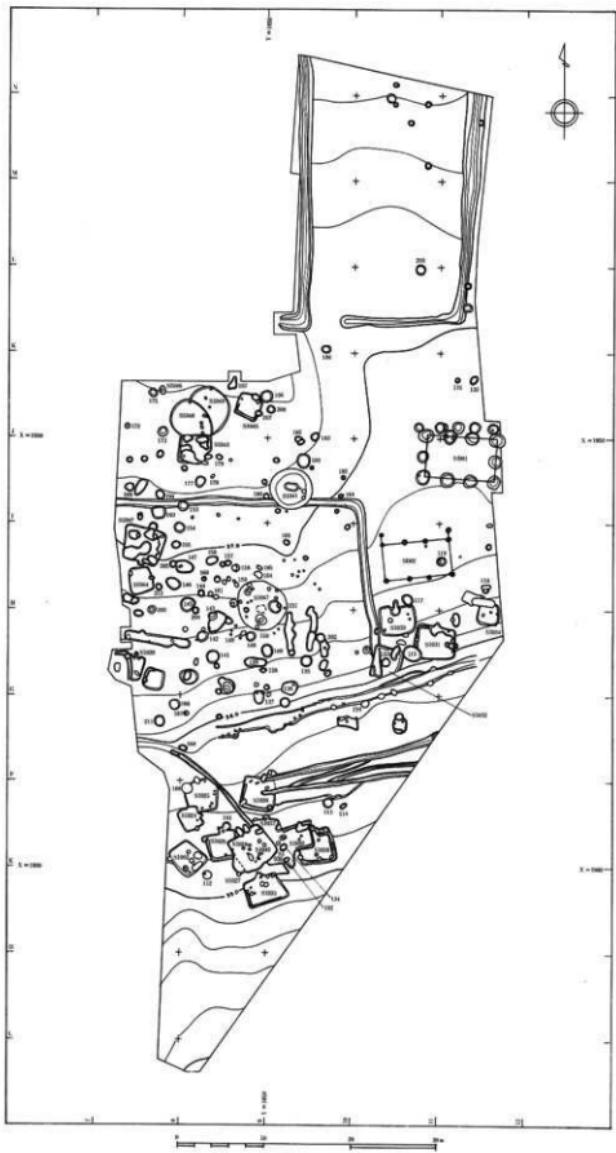
第3図 基本層序



第4図 峰崎遺跡全体図（年次調査範囲図）

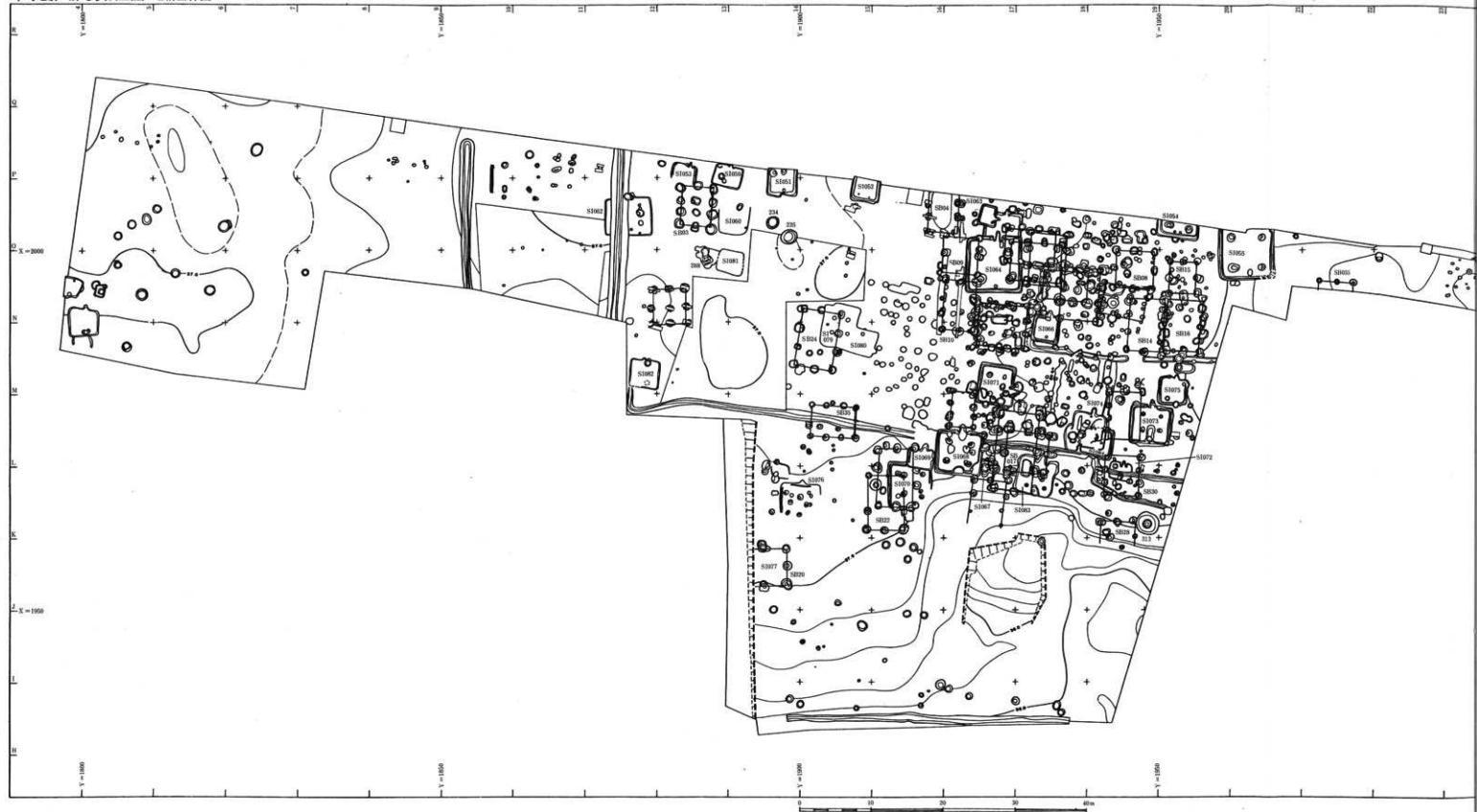


第5図 第1次調査 (A区) 遺構配置図

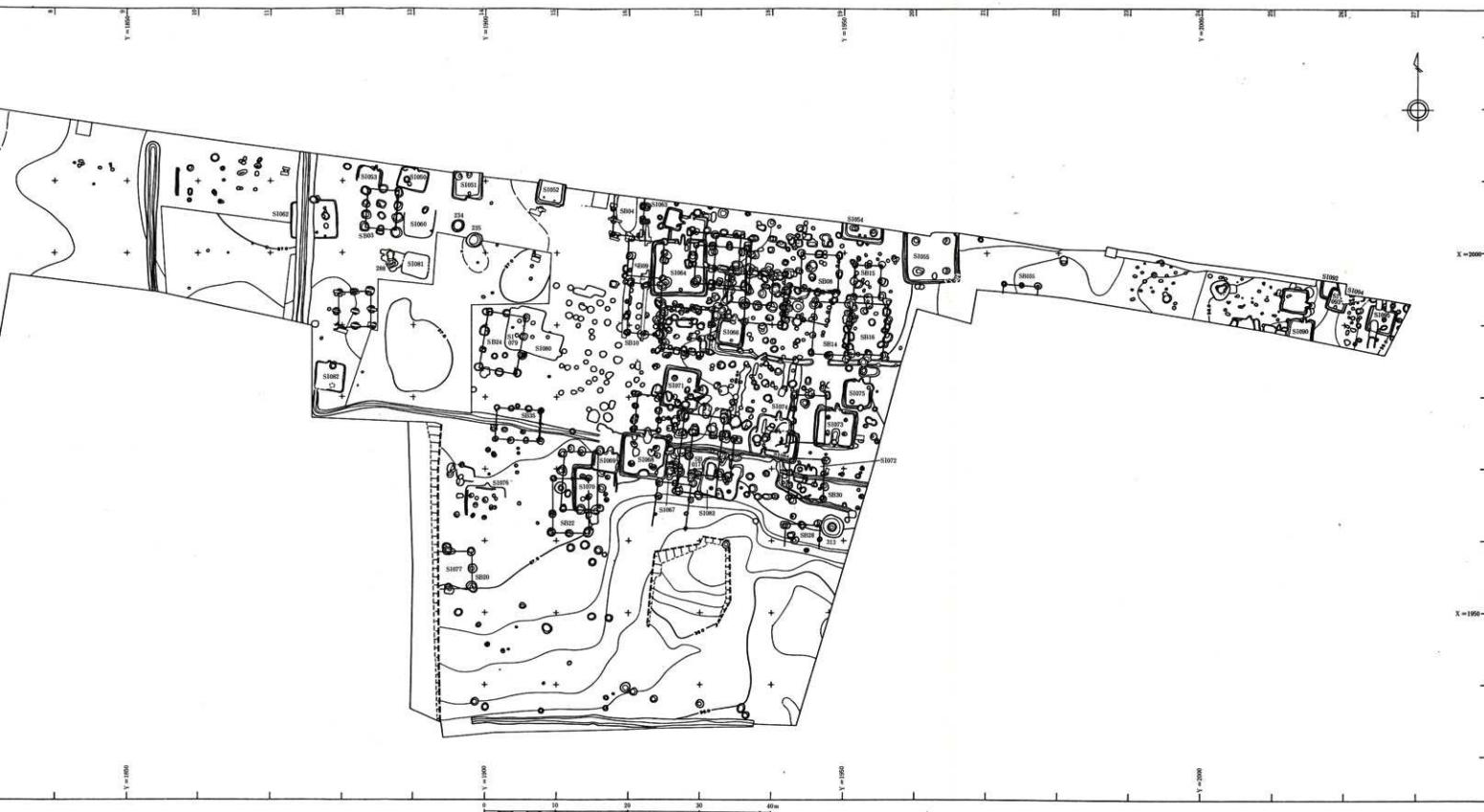


第6図 第2次調査(B区) 遺構配置図

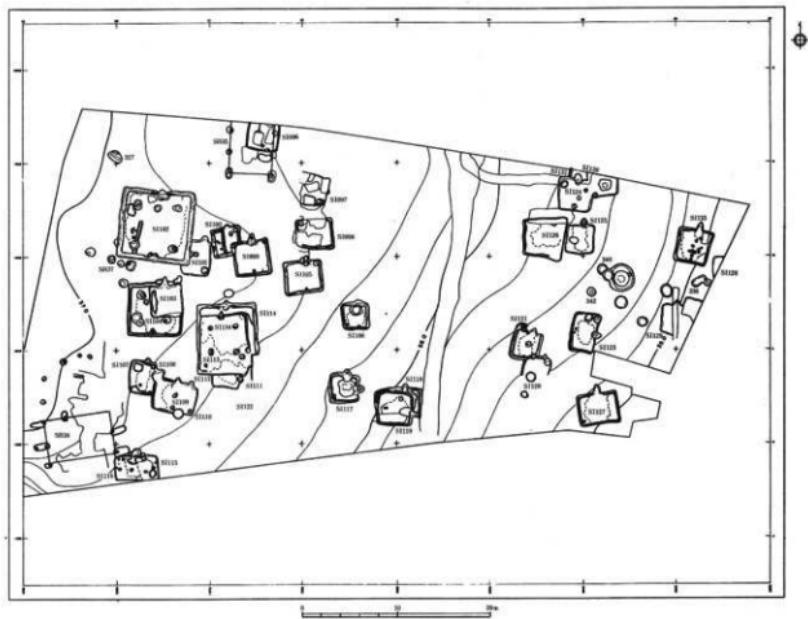
### 峯崎遺跡（第3次調査区）遺構全体図



第7図 第3次調査（C区）遺構配置図



第7図 第3次調査（C区）遺構配置図



第8図 第4次調査(D区) 遺構配置図

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概観

本遺跡は、結城台地の南端に位置し、東西西側を花弁状に入り込むヤト（小支谷）に囲まれた台地を形成する。調査により住居跡136軒、掘立柱建築物跡38棟、井戸跡18基、土塙329基、溝跡21条が検出された。

時代別に見ると縄文時代では、遺構は検出されなかったが条痕文系の織維土器から縄文早～前期・あるいは中期五領ヶ台・阿玉台式が窺われる。住居跡・土塙を伴う後期の堀之内・称名寺式が台地高位部西側にまとまりを見せていている。弥生時代の遺構遺物は検出されていない。古墳時代は中期（和泉式）に限定され住居跡1軒、土塙1基（SK 200）が検出されているがその前後は見当たらない。

本遺跡で主体的に占める遺構・遺物は、奈良・平安時代である。集落は古墳時代後期をとばし、突如奈良時代（8世紀中葉）に大型の住居跡（SI 054・55・64・65・95・102・103・104・114）が現れ、平安時代に亘り集落を形成する。その中で9世紀代側柱を主体とした掘立柱建築物跡が38棟配置される。その掘り方の覆土中には所謂奈良三彩が、住居跡からのものを含めて14点出土し、建築物群周辺の住居跡（SI 074・84）より、狼投窓跡群K14窓式の縁軸蓋が出土している。この縁軸蓋は金属器写しであり、他にSI 008より邢州窯産と思われる白磁碗など一地方集落跡にしては特異な遺物を包蔵していることが判明した。

また、遺構より官衙的様相の濃い性格と思われていたが、SI 009より墨書「□寺」SI 042より塑像の螺旋、表採遺物「□佛申□」など遺物は仏教的色彩が濃い状況になった。

本報告では、諸般の都合上この奈良・平安時代を中心と報告して行くことにし、縄文・古墳時代については稿を改めて報告する。

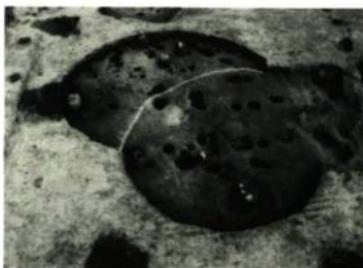
### 第2節 縄文時代

先に述べたように、表採遺物よりわずかながら織維を含む条痕文系土器片の存在から早～前期・あるいは中期五領ヶ台・阿玉台式の様相を知ることが出来る。

遺構は調査区の西側に集中して位置し、遺構は住居跡5軒（SI 023・029・047・048・049）、土塙2基（SK 196・216・229：遺物を包蔵するもの）を数えることができる。遺構として捉えられた住居跡・土塙は縄文時代後期の堀之内・称名寺式の範疇に属するものが主体的で、SI 048・049のように切り合うものを見られ後期の中でも時間差が認められる。

また、SI 023の深鉢のように掘之内式と・称名寺式が混在する様相を呈しており、特異な状況であることが特徴となっているようである。

遺物は深鉢を主体とするが、凹石や扁平な円礫の



縄文後期住居跡（SI 48・47）

両端を加工して製作された石錘が多くみられる。遺跡の南側には接して沼がある、あるいは東側には鬼怒川が近接する事から網漁など経済基盤の一端を窺い知る事が出来る。錘は石錘のみで土器片を再利用した土錘は見られなかった。



縄文後期土塙 (SK 196)



SI 23出土土器



SI 23出土土器



SI 23出土土器



SI 47出土土器



SI 47出土土器



SI 49出土土器



SK 216出土土器



遺構外遺物 (石錘)

### 第3節 古墳時代

遺構は、住居跡1軒（SI 044）、土塙1基（SK 200）とわずかに見られた。いずれの遺構も古墳時代中期前半（和泉式）に相当し、後期（鬼高式）の遺構・遺物は皆無である。

本遺跡の周辺には、首長的な古墳あるいは古墳群がなく、この時期には組織的な集落から外れた空白の地域であったかもしれない。

また、次の開発により遺構の破壊も考えられるが、奈良・平安時代の遺構の覆土からも古墳時代の遺物は皆無であるところから、後期には集落から外れた地域であったと推定される。

SI 044は南北2.65m、東西2.45mを測る南北に長い方形を呈する。主柱・貯蔵穴の施設ではなく、カマドのみ西側に付設されている。カマドは所謂造り付けのものであるが、遺存は良くない。火廻はカマドのみみられ炉は伴わない。遺物は小型丸底壺・甕形土器が出土する。小型丸底壺は底部がわずかに凹むものでヘラ削り後ハケメ調整を行なう。甕形土器は口縁部内部にハケメ調整を行なう。底部は突出した平底となる。

SK 200は長軸0.97m、短軸0.78m、深さ0.68mを測る稍円形の土塙である。遺物は投棄された状況で出土している。遺物は小型丸底壺3個・鉢形土器5個・高環（鈎付き）1個である。小型丸底壺の特徴は口縁部は器高1/3の位置で開き、口径は胴部最大径より小さい。胴部は扁平球形を呈し、底部はわずかに凹む。鉢形土器は内稜を有して短い口縁部を形成し、胴部は扁平となる。高環は脚部を欠損するが、環部下位に鈎状の突起を有する。調整はSI 044出土遺物と同じである。この時期にしばしば共伴する滑石製模造品はない。模造品か否かは明確でないがSI 101の覆土中より出土している。

### 第4節 奈良・平安時代

#### 第1項 土器分類

遺構年代を確定するには、その指標となる土器の器種分類を明確にする必要があることは当然であるが、個々の研究者間においても器種分類は微妙に食い違う事がしばしばある。その混乱を避けるため器種名と遺物を互いに示し、用語も平城京発掘調査報告書Ⅶの器種分類を継用して作業を進めた。

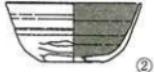
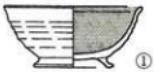
また、図版には通常の器種分類（床着のみ掲載）の他に、覆土中の遺物も埋没年代の時間差を知るために合わせて掲載するよう努めた。

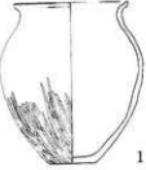
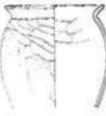


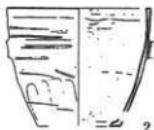
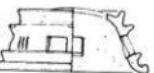
古墳時代土塙（SK 200）

表 峰崎遺跡土器分類表

土 器 器		器 形 と 成・整 形 の 特 徴	
坏	①	器種は2種認められ、①は素口縁で平底ながら端部を丸く納めるもの。②は所謂東北系の土器と思われる器種である。	
	②	底部調整は、①は口縁部付近～底部までヘラ削り、内部はナデが主体となり、放射状・螺旋状の暗文を施す。胎土はきめ細かく色調は橙色を基調とする。②は形態より坏H（鬼高式）の系譜を引くと思われる。口縁部は体部下位に稜を有して屈曲しながら開き、内外部分的内黒とする。底部はヘラ削りである。東北系の坏は内（外）面ヘラ磨きであるが、本遺跡のものはナデを主体とする。また内黒は内外に亘るものもある。	
A	①	底部に高台が付かないものである。基本的に口縁～体部の開きは直線的で、腰が丸みを帯び内反気味のもの（容量の深い）を腕として区別した。底部の切り離し法は、①ヘラ切りと②回転糸切りがある。県内はヘラ切りが基本的である。糸切りにはまれに③静止糸切りがみられる。	
	①	底部切り離し法は、①ヘラ切り→底部～下端をヘラ削り（a回転ヘラ削り・b手持ちヘラ削り・c無調整）である。②回転糸切り→底部～下端をヘラ削り（a回転ヘラ削り・b手持ちヘラ削り・c無調整）である。	
坏B	①	坏Bはロクロ坏で底部に高台が付くものである。基本的に坏Bは口縁～体部の開きは直線的で、丸みを帯び内反気味のもの（容量の深い）を腕として区別した。高台は低いものと高台が2cmを越えるもの（足高）がある。	
	②	底部の切り離し法は、①ヘラ切りと②回転糸切りがある。調整はヘラ削り（a回転ヘラ削り・b手持ちヘラ削り・c無調整）である。	

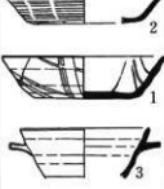
椀 A		底部に高台が付かないものである。口縁～体部の開きが内反気味で容量の深いものを椀とする。底部切り離し法は①ヘラ切りと②回転糸切りである。
椀 B		底部に高台が付くものである。口縁～体部の開きは高台部より始まり、内反気味で容量の深いものを椀とする。高台は低いものと高台が2cmを越えるもの（足高）がある。底部切り離し法は①ヘラ切りと②回転糸切りである。①ヘラ切り→底部～下端をヘラ削り（a回転ヘラ削り・b手持ちヘラ削り・c無調整）である。
皿 A		底部に高台が付かないものである。口縁～体部の開きは大きく平坦となる。底部切り離し法は手持ちヘラ削り（回転糸切りは観察できないことが多い）である。①ヘラ切り→底部～下端をヘラ削り（a回転ヘラ削り・b手持ちヘラ削り・c無調整）である。
皿 B		底部に高台が付くものである。口縁～体部の開きは大きく平坦となる。底部切り離し法は①ヘラ切りと②回転糸切りである。
盤		皿と良く似ているが、盤の口縁部は外体部に稜を有して短く立ち上がり、皿は立ち上がらないところに相違点がある。底部切り離し法は①ヘラ切り（a回転ヘラ削り）である。内部はヘラ磨き・内黒である。
鉢	A:  E:  F: 	器種は多種にわたりA～F（平城京発掘報告書Ⅳ）まであるが、県内で通常出土するものは鉢A（鉄鉢）・鉢E・鉢Fである。鉢A（鉄鉢）はクロコ成形で底部～下端をb手持ちヘラ削りである。鉢Eは古墳時代の系譜を引くもので胴～底部をb手持ちヘラ削りするものである。鉢Fは県内では須恵器に多く見られる。唯一柴崎遺跡83住-362に土師器鉢がみられる。

小型 壺	  <span style="float: right;">①</span> <span style="float: right;">②</span>	<p>器高12cm平均のものを小型壺とする。①は口縁部が単口縁となるものと、②の口縁部は短く開き端部は摘み上げられるものがある。調整はいずれも胴部は縱位のヘラ削りで、底部～下端はb手持ちヘラ削りであるが、①の単口縁は胴部にヘラ磨きを加えるものがある。</p>
小型脚付壺	 <span style="float: right;">①</span>	<p>常陸において出土例は県東部駄台遺跡だけであり僅少である。下総地域では見られるため設定しておいた。成形は①非ロクロと②ロクロとの2種類がある。調整はいずれも胴部は縱位のヘラ削りで、底部～下端はb手持ちヘラ削りである。</p>
壺	 <span style="float: right;">1</span>  <span style="float: right;">2</span>  <span style="float: right;">3</span>  <span style="float: right;">4</span>	<p>1. は在地型の所謂「常総型壺」である。口縁端部を摘み上げ、胴部は縱のヘラ磨きである。胎土には雲母を含むものが多い。古相（7世紀代）のタイプは胴部最大径が中位にあり、新相（9世紀代）は上位となり長胴化する。2. は口縁～頸部を「くの字」状とするもの。壺にも他地域の搬入品が見られ、3. は「武藏型」の壺である。口縁～頸部を「コの字」状・「くの字」状に外反する薄手の壺で頸部を横位に胴部以下を縱位とするb手持ちヘラ削りである。4. は口縁端部を摘み上げ、面に螺旋状の沈線を施すものである。在地の土器には類例がない。</p>

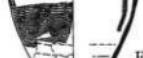
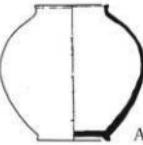
	 1	瓶は古墳時代の系譜を引くもので1. の寸胴のタイプがある。県北の金木場遺跡のようにVI期（9世紀後葉）まで残るもの、あるいは県中央部薬王院東遺跡の2. 把手付き多孔式などは未還元の問題も残すが須恵器に主体的に見られる。
瓶	 2	
羽釜		羽釜は口縁部直下に鈎を貼り付けるもので胴部は大半が寸胴であるが、県内での出土例は少ない。成形は粘土での輪積みで中～下位にわたりベラ削りの調整が多い。県北部遠下遺跡VI期（10世紀前葉）、森戸遺跡XI期（11世紀中葉）、県南部南丘遺跡IV期（11世紀中葉）から出土している。
硯		土師器製の硯は県内でも類例がなく県東部幸田台遺跡が初例となっている。時期は9世紀後葉である。

県内の須恵器窯は、日立市成沢窯跡・大沼窯跡、常陸太田市幡山遺跡、馬頭根窯跡、水戸市木葉下窯跡群、大潤窯跡群、町堀ノ内窯跡群、蜂沢窯跡、仲村窯跡群、東城寺窯跡群、追原鳥瓜窯跡、笠間市大潤窯跡、三和町浜ノ台窯跡、水戸市三ヶ野窯跡、新治郡小野窯跡など14遺跡が知られている。

このなかでも幡山遺跡では、すでに7世紀初頭には生産が開始され（1994：土生）、木葉下窯跡群ではI～III期（8世紀前葉～後葉）まで生産を行なっていた事が知られている（1983：根本・1984：川井・1989：佐々木）。また、窯構造からTA1号窯は半地下式無段登窯であり、静岡県湖西窯群との関係も論じられる（1986：佐久間）など問題の多い窯跡群である。堀ノ内窯跡群ではII～IV期（8世紀中葉～9世紀前葉）の解明が行なわれている（1989：五十川）。他に大潤窯跡III期（8世紀後葉）、三ヶ野窯跡V期（9世紀中葉）、浜ノ台窯跡V期（9世紀中葉）、小野窯跡V期（9世紀中～後葉）が知られている。

	須恵器	器形と成・整形の特徴
坏	 1 2	<p>底部に高台が付かないものである。基本的に口縁～体部の開きは直線的である。底部は1. 平底を基本とするが2. 丸みを帯びるものとがある。</p> <p>底部の切り離し法は、①ヘラ起こし（ヘラ切り）と②回転糸切りがある。</p> <p>県内はヘラ起こしが主体的である。本遺跡より3. 双耳环が出土している事から浜ノ台窯跡の検討が必要になる。本遺跡の近くには堀ノ内窯跡群・浜ノ台窯跡・小野窯跡があり、本遺跡への供給先として考慮しているものの、結城庵寺へ供給していた八幡瓦窯を含めての詳細な調査が急務となる。</p> <p>また、下総の実情からすれば、中央窯（永田・不入窯跡群）を持ち、そこから派生した地方窯が成立する上総と、中央窯がなく始めから地方窯（千葉郡には中原窯跡・宇津志野窯跡）として展開する下総は対照的である。</p> <p>従って下総には水田・不入窯産・常陸産（胎土に雲母を多く含む）の製品が数多く搬入されていることからもこうした現象も考慮せねばならない。</p>
A	 1 2 3	<p>底部の切り離し法は、①ヘラ起こし→底部～下端をヘラ削り（a 回転ヘラ削り・b 手持ちヘラ削り・c 無調整）である。②回転糸切り→底部～下端をヘラ削り（a 回転ヘラ削り・b 手持ちヘラ削り・c 無調整）である。</p>
蓋	 1	<p>坏蓋は全体的には器高が高く、口縁端部は1. 短く折れ曲がるもの、2. 断面三角形となるものがある。鉢は擬宝珠である。調整はa回転ヘラ削りが主体的で法量分化が著しい。</p>
	 2①	<p>形態は全体的に扁平で、口縁端部は1. 形骸化したかえりが残る。2. 短く折れ曲がる。鉢は擬宝珠が①扁平化したもの、②ボタン状、③リング状である。調整はa回転ヘラ削りが主体的である。県内での出土例にはしばしば胎土に雲母を含み還元軟質多く見られる。</p>
	 2②	
	 2③	
	 2	

坏	1	坏Bはロクロ坏で底部に高台が付くものである。1. は体部下位に稜を有し口縁～体部の開きは直線的で高台が低く底部との差がなくなる（北新田A59住-5）。2. は体部下位に緩く稜を有し口縁～体部の開きは外反気味に開き法量分化が著しい。3. 浜ノ台窯跡に双耳坏が見られる。
	2	底部の切り離し法は、①ヘラ起こし（ヘラ切り）と②回転糸切りがあるが県内では②の採用は見られないようである。①ヘラ起こし➡底部～下端をヘラ削り（a 回転ヘラ削り・b 手持ちヘラ削り・c 無調整）である。県内では木葉下窯跡群・堀ノ内窯跡群がⅡ期（8世紀中葉）に出現する。
B	3	
皿 A		高台の付かないものを皿Aとする。底部の調整はa 下端～底部ヘラ削りが主体的である。
皿 B		高台の付くものを皿Bとする。底部の調整はa 下端～底部ヘラ削りである。
盤 A		底部に高台が付かないものである。口縁部は外体部に稜を有して短く立ち上がる。底部の切り離し法は、①ヘラ起こし（ヘラ切り）➡底部～下端をヘラ削り（a 回転ヘラ削り）である。
盤 B	1 2	底部に高台が付くものである。形態は盤Aと同じである。口縁部の立ち上がりは直角に近いものが木葉下窯跡群Ⅱ期（8世紀中葉）に出現する。それにやや遅れて堀ノ内窯跡群にも生産が開始される。1. 高台が低く底部との差がなくなるものと2. 高いものがある。底部の切り離し法は、①ヘラ起こし（ヘラ切り）➡底部～下端をヘラ削り（a 回転ヘラ削り）である。
高盤		盤は平たく口縁端部で短く折れ曲がる。脚部は幅広がりとなり縦位に透かしが入るものもある。特筆すべき調整は見られない。 生産地は堀ノ内窯跡Ⅱ期（8世紀中葉）、木葉下窯跡Ⅲ期（8世紀後葉）より出現する。堀ノ内窯跡ではⅡ～Ⅳ期（9世紀前葉）まで生産するが、Ⅱ・Ⅲ期とⅣ期では口縁端部の形態が異なる。Ⅱ・Ⅲ期では開くだけであるが、Ⅳ期になると短く折れ曲がるようである。消費地はいずれもⅢ期から松原27住、石井台9住、鹿の子（染谷）7住、鹿の子C122工、鹿の子C65住では堀ノ内窯跡Ⅲ期の特長を有する高盤が65住Ⅳ期に現れる。厨台KC3011住ではⅡ期である。

鉢	A		<p>鉢はA～FとXまで7分類されている。鉢Aは鉄鉢模倣である。鉢Bは肩部に棱を有して口縁部が立ち上がり底部を平たく納めるもので片口となる。鉢Dは口縁部は短く開き肩部は張り平底に統くもので法量分化が著しい。高台の付くものと付かないものがある。鉢Eは口縁部は短く水平に折れ曲がり端部は摘み上げられる。平底から口縁～胴部が開くものである。口縁部は外部にb平行・c格子の叩きを施す。鉢Fは所謂摺鉢で横に突出する平底より口縁～体部は直線的に開く。県内の生産地で出土されたものは鉢D・鉢E・鉢Fである。鉢D・Eは木葉下窓跡I・II期（8世紀前～中葉）、鉢Fは堀ノ内窓跡IV期（9世紀前半）である。消費地で出土した鉢は鉢A・鉢D・鉢E・鉢Fで特に鉢D・鉢Eは数量共に主体的である。鉢Aは鹿の子C96住、鉢Fは大塚新地55住と共にIV期（9世紀前半）である。調整の特長は、鉢Aが底部下端へラ削り（a回転ヘラ削り・b手持ちヘラ削り・c無調整）、鉢D・Eは外体部b平行叩きである。鉢Fはわずかに金木場56住・大塚新地55住の2遺跡で共にIV期（9世紀前半）に比定されている。</p>
	D		
	E		
	E		
	E		
	F		
壺	A		<p>平城京発掘報告書dには壺A～Q・X・多嘴壺などに器種分類されているが、特に長・短頸壺としては区別していない。本県で通常出土する器種は壺A（薬壺）・壺B・壺C・壺E・壺G・壺L・壺M・水瓶・淨瓶・小瓶である。なかでも壺L・壺M・水瓶・淨瓶・小瓶は猿投窓跡群（灰釉）に依存している。壺A～Eの短頸壺には蓋が伴うがこれについても類例はわずかである。</p> <p>壺AがI期（8世紀前葉）に木葉下E5窯に出現しこれには蓋が伴う。他に大淵窓跡ではIII期（8世紀後葉）、堀ノ内窓跡ではIII期（8世紀後葉）、三ヶ野窓跡ではV期（9世紀中葉）がある。壺Bは三ヶ野窓跡ではV期（9世紀中葉）に、壺Mは長頸壺の小型であるが県内の窯での出土例はない。壺Gは撒入品で伊豆産である。本県の生産地の出土例は、壺Lが木葉下窓跡I期（8世紀前葉）、堀ノ内窓跡II期（8世紀中葉）、大淵窓跡III期（8世紀後葉）、三ヶ野窓跡V期（9世紀中葉）、浜ノ台窓跡V期（9世紀中葉）である。なかでも小瓶が三ヶ野窓跡V期（9世紀中葉）に生産されているところに注目したい。</p> <p>消費地の出土例は壺A（蓋）が金木場67住V期（9世紀中葉）、石井台6・9住III期（8世紀後葉）、寺崎台地3住IV期（9世紀前葉）、柴崎1区</p>
	B		
	E		
	G		

	<p>1次99住V期（9世紀中葉）、鹿の子C120・114住IV期（9世紀前葉）、鹿の子（染谷）火葬墓SX01VI期（9世紀後葉）、大塚新地55住IV期（9世紀前葉）である。壺Bは大神外宿A2・6住IV期（9世紀前葉）、石井台24住II期（8世紀中葉）、奥谷81II期（8世紀中葉）、奥谷67住III期（8世紀後葉）、鹿の子C36住・31土IV期（9世紀前葉）である。壺Eは厨台KC3098住II期（8世紀中葉）、厨台KC306住V期（9世紀中葉）である。壺Mは鹿の子A8住IV期（9世紀前葉）である。壺Gは調味料として墨の煮汁を入れた専用の土器である。本県においても北新田A6住VI期（9世紀後葉）、思川14住V期（9世紀中葉）、鹿の子C142住III期（8世紀後葉）がある。他の器種は消費地での出土例が先に述べたように9世紀中～後葉以後、灰釉陶器に依存しており、浄瓶・小瓶とも幸田台遺跡よりの出土である。底部切り離し法は、①ヘラ起こし（ヘラ切り）②回転ヘラ削り→底部～下端をヘラ削り（a回転ヘラ削り・b手持ちヘラ削り）である。</p>
	<p>壺は平城京発掘報告書Vによれば壺A～Eに分類されている。1. 壺Aは大型のものと2. 小型の2種類ある。壺A大型は口縁部は「くの字」状に外反し、胴部は肩の張る卵到形で底部は丸底である。壺A小型は胴部が長胴化して平底となる。壺Bは胴～底部は壺Aとなんら変化ないが口縁部が「くの字」状に開き端部は素縁となり、把手を貼り付ける。壺Cは口縁部が垂直に立ち上がり端部は素縁となる。胴部は壺A・Bに比べ扁平となり、底部は平たくなる。壺Eは口縁部が「くの字」状に開き端部は素縁で頸部に把手（耳）を貼り付ける。調整は内外部に叩き絞めが行なわれる。叩き・当て具の模様はa同心円・b平行・c格子目が主体的である。まれにd無文の当て具も見られる。地域によっては叩き・当て具の模様が異なる。また、県内では叩きにa同心円を採用するものがある。この壺に関して川井は分布より「…その中心は常陸南部から下総北部にあるように思われる。」と地域限定し「常総型壺の分布」と「ヘラ切り技法の分布」との3者の類似性を指摘したうえで、同心円文を「装饰を意識した」と仮定して祭祀との関わりを指摘している。また、この須恵器の胎土中には雲母が混入する事から生産地は、新治郡東城寺窯跡群を含めた県南地域であろうとしている（1988川井）。生産地出土例は壺Aが木葉下窯跡I期（8世紀前葉）・堀之内窯跡II期（8世紀中葉）に、壺Dは堀之内窯跡IV期（9世紀前葉）、三ヶ野・浜ノ台・小野窯跡V期（9世紀中葉）出現する。</p>

瓶		瓶は煮沸具の中では器種は少なく瓶A 1種に止まる。口縁～胴部は直線的あるいは緩く内反気味に開き口縁部は短く「くの字」状に屈曲し端部を玉縁（突帯）状となる。また、頸部に把手を貼り付けるものもある。底部は4～5個の透かしを入れる。調整は底部下端をヘラ削り（b 手持ちヘラ削り）である。胴外部は叩きを行ない模様はb平行・c格子目である。
羽釜		羽釜は煮沸具である。口縁部直下に鈎を貼り付けることで胴部は寸胴となるものが多いが底部に亘る資料はまだ管見に触れていない。県内でもわずかに厨台BR 3～40住Ⅲ期（9世紀前葉）にこの器種が見られる。土師器質ではあるが厨台KC30～40住Ⅲ期（10世紀中葉）に三足を貼り付けるものも出土しているが、生産遺跡ではまだ出土していない。
硯		硯としては製品の他に須恵器大甕などの破片転用品が多く見られるが、ここでは製品としての硯を扱う。硯（陶硯）には1. 円面硯・2. 風字硯がある。生産地ではいすれも円面硯である。木葉下窯跡Ⅰ期（8世紀前葉）に始まり、堀ノ内窯跡ではⅡ期（8世紀前葉）大瀬窯跡ではⅢ期（8世紀後葉）、三ヶ野窯跡ではⅤ期（9世紀中葉）がある。 消費地では円面硯が大塚新地16住Ⅲ期（8世紀後葉）、鹿の子C146工Ⅲ期（8世紀後葉）に出土している。

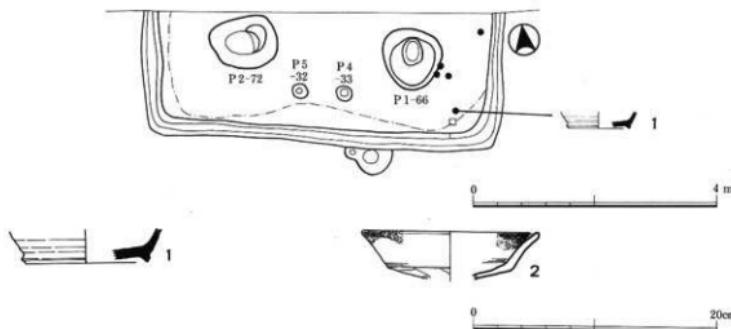
## 第2項 遺構

遺構は、繩文時代後期より中世にわたり検出されている。先に述べたように、ここでは奈良・平安時代の遺構を主体に資料提示を行ない第1項の土器分類を使用しながら、おおまかに奈良時代と平安時代に遺構（住居跡）を分けた。資料提示出来なかつたものについては、第5章の住居跡規模表に掲載し全貌を網羅出来るよう努めた。

本文中の資料提示は、平面図のみ掲載したため従来の方法に比べ省略部分が多く、住居構造を追求する上においてはその叱責は否めない。遺構選定は、住居跡・掘立柱建築物跡の切り合いを、遺物は土器組成・施釉陶磁器・墨書き土器を各々重視し、そのうえで構造上不可欠な主柱穴・梯子柱穴と思われるものについては床面より計測して、例えば深さ40cmであればその数字を柱穴横に「-40」と表現するようにした。堆積などについては本文中に記載し、カマド構造については割愛した。

奈良時代の住居跡（SI 054・055・064・065・066・079・095・102・104）は9軒検出されている。第3・4次調査区を主体に台地の中央～東側に分布して見られる。平面形は一辺5～7m前後の方形を呈し、壁面は直線的で垂直に落ち込むため隅角が鋭角的である。壁溝は幅広く、柱穴（掘り方）は大きく深い。カマドは北壁中央に位置し、煙道部は壁を切り込むが燃焼部は屋内に構築するなど古墳時代の特長を色濃く残す。

平安時代の住居跡（SI 001～022・024～040・042・043・045・046・050・051～053・056～063・067～078・080～094・096～101・103・105～134）は117軒検出され、8世紀後半～10世紀後半までの約200年間続いたと思われる。平面形は2～5m前後、方形を基本とするが形骸化し規模的にばらつきが見られる。柱は居住面積が縮小化するため床面上になく屋外に設置され、カマドの位置は10世紀代には北より東に移行する傾向が看取される。集落の占地状況は台地全体にわたり広く分布するが、特に遺跡の西側である第1～3次調査区西側は濃密となっている。また、第3次調査区中央～東側の掘立柱建築物群周辺は平安時代の住居跡が希薄であることから、集落跡変遷過程のある時期に掘立柱建築物造営の計画があった事が想定される。

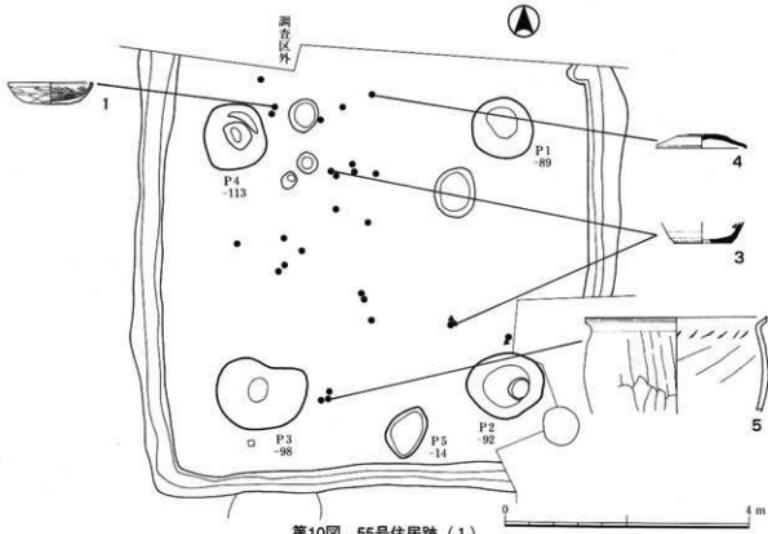


第9図 54号住居跡・出土遺物

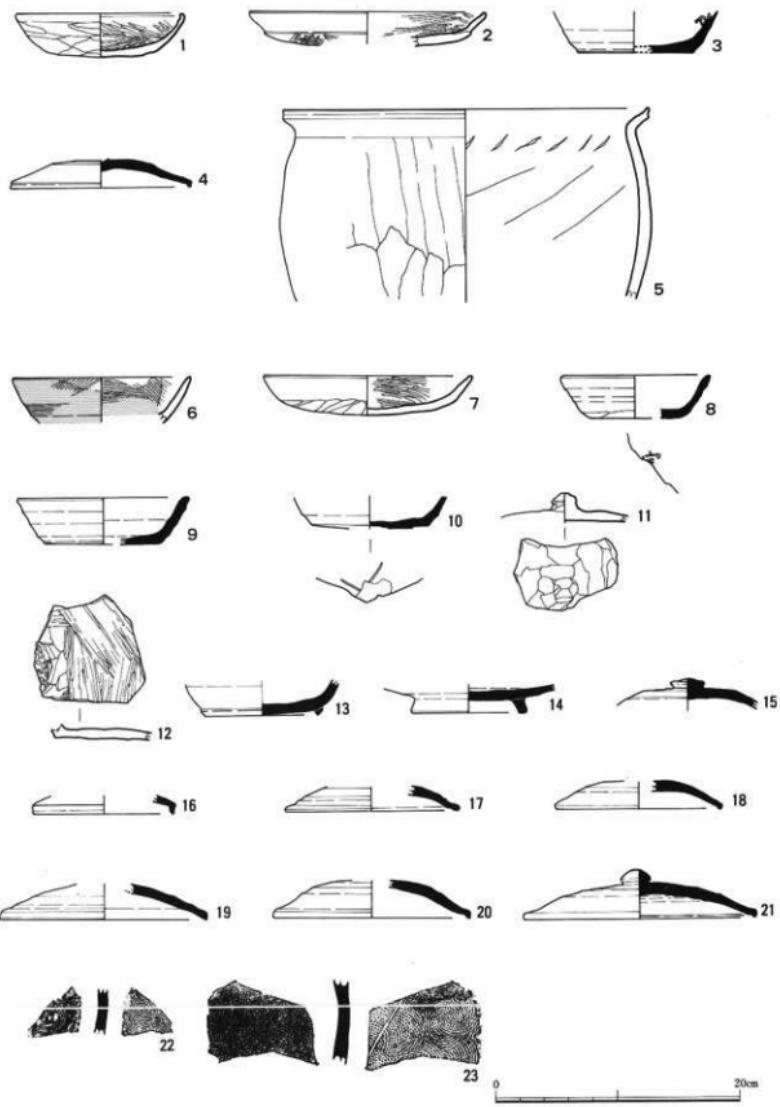
奈良時代

#### 54号住居跡

形態 方形：北側は調査区外で全貌は不明である。規模  $1.9\alpha \times 5.80m$ ：主柱穴は2本検出されているが、実際には4本を基本とするものである。支柱穴なし：梯子柱穴は南壁に近接して2本対（P4・5）で見られる。カマド？：貯蔵穴なし：壁溝全周：遺物 床着は1須恵器壺Bだけである。体部は高台部より直接聞くもので、底部は破片ながら高台部との差が余りないものである。覆土中には2非ロクロ壺A（東北系）が混在するが、1との時期差はない。他に土師器壺A片、須恵器蓋片、鉢E片がある。



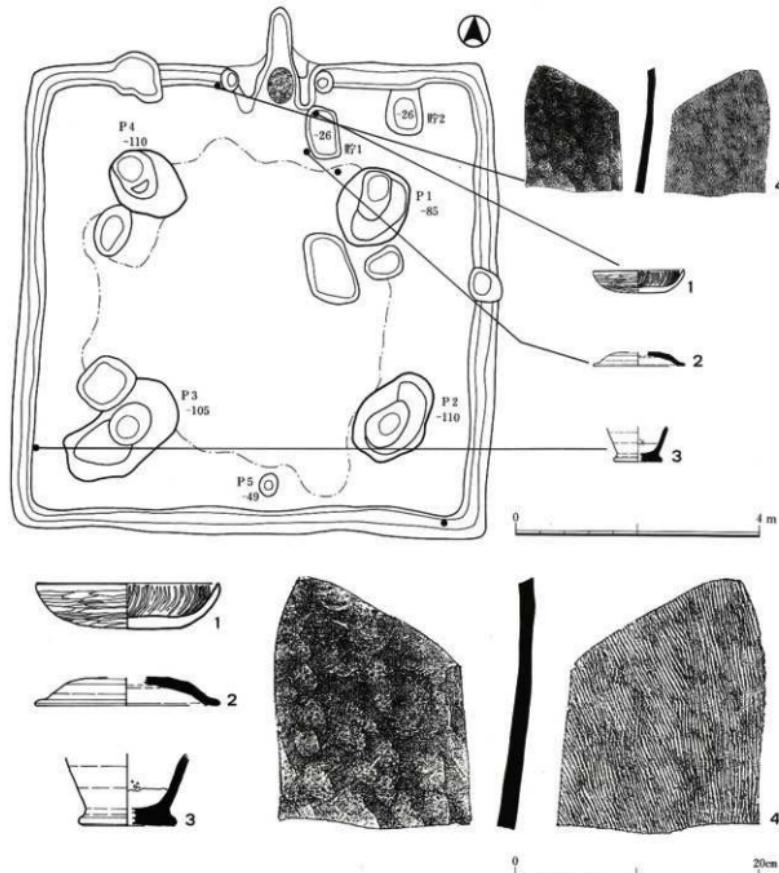
第10図 55号住居跡（1）



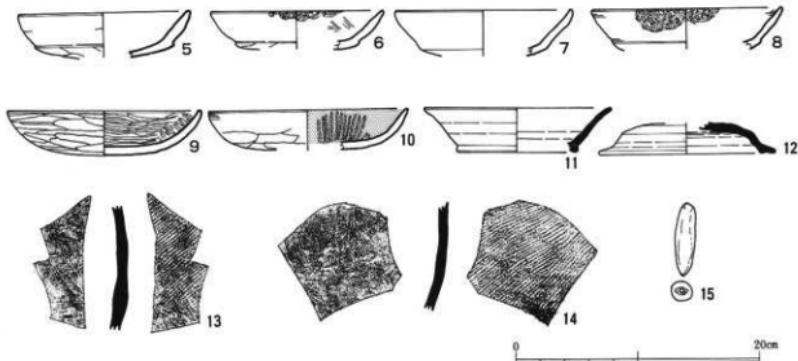
第11図 55号住居跡出土遺物（2）

55号住居跡

形態 方形：規模 北側は調査区外で全貌は不明である。6.9a × 7.50m：主柱穴4・支柱穴なし：梯子柱穴南壁に近接して浅いPit 5が見られる。：カマド不明：貯蔵穴不明：壁溝全周：遺物 床着は1～5で、6～23は覆土中の遺物である。1・2は非クロロ坏Aである。1は口縁端部に内稜を有し、2は外稜を有すところから盤に近い。3は須恵器坏Aで箱形となるもので油煙が付着し灯明用に使用されたものである。4は須恵器坏B蓋で口縁端部は短く折れ曲がる。5の壺Aは縦ヘラ削り調整のみでヘラ磨きは見られない。6は東北系坏・11・12は土器器蓋で鉢の貼り付けに刺突を施す。他の細片には須恵器坏A・坏B・坏B蓋・盤B・壺A大型（同心円叩き）があり、墨書きロクロ坏A「本」、線刻「宝」きがある。



第12図 64号住居跡・出土遺物（1）



第13図 64号住居跡出土遺物（2）

#### 64号住居跡

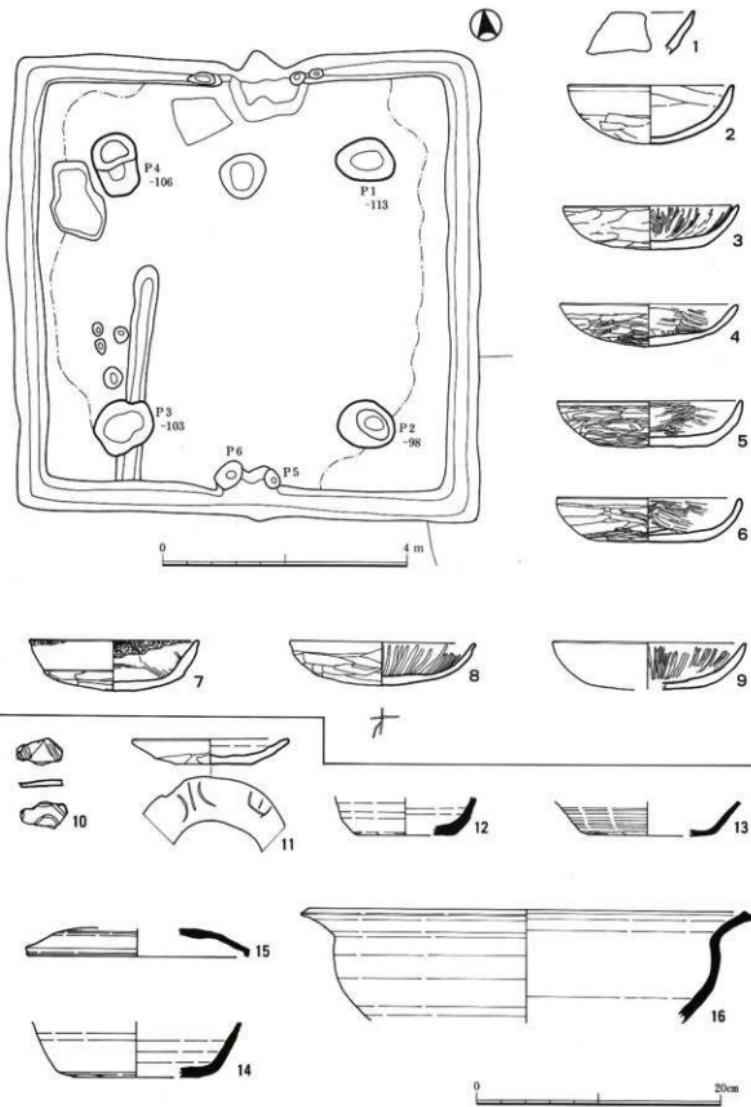
形態 方形：規模  $7.44 \times 7.60m$ ：主柱穴4本：支柱穴はカマドの両わきに2本見られる：梯子柱穴は南壁に近接してP5がある：北カマドで煙道は比較的長い：貯蔵穴はカマド右袖に接するものと北東隅角に2ヶ所見られる：壁溝全周：新旧関係はSI 065を切り、SB 06・09・10・12・SI 063に切られる：遺物 床着のものは1～4である。1は非クロロ坏Aは内面に放射状暗文を施す。2は須恵器坏B蓋で口縁端部にわずかに反りが残り、胎土に雲母が混じる。3は須恵器鉢F、4は転用鏡で須恵器壺A大型の転用である。内面無文当て具痕上は擦痕が顕著である。覆土中は5～16である。5～8は非クロロ坏Aの中でも東北系に属するもので、体部外縁が下位となる。周知の東北系坏はヘラ磨き・黒色処理（内黒）を施すが、本遺跡の坏は器形・黒色処理（部分）は踏襲するものの調整はナデとなる。9・10は非クロロ坏Aは放射状暗文を施すが、なかでも10は部分的に内黒とする。須恵器は11～14である。11の坏Bは大きく開くもので、胎土は灰色で黒色粒子が混じる搬入品と思われる。12の坏B蓋は反りが形骸化したもので胎土に雲母が混じる。13・14は壺A大型片、15は管状土錐である。他に非クロロ坏Aの破片に墨書「中毛」が見られる。この墨書は本遺跡最古となる。



64号住居跡カマド

#### 65号住居跡

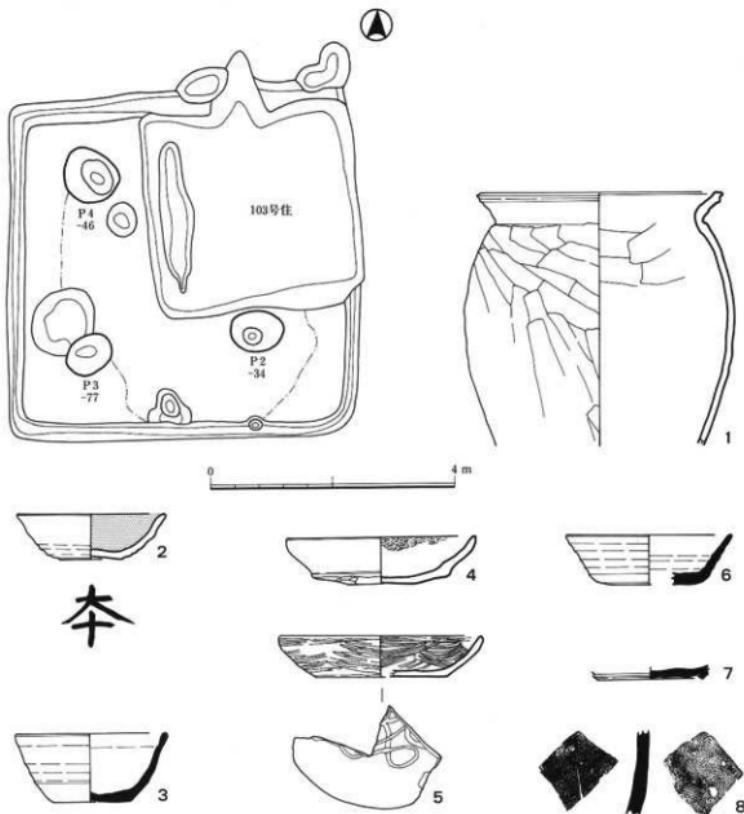
形態 方形：規模  $3.2a \times 5.00m$ ：主柱穴なし：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝全周：SI 63・64・SB 06に切られ、深さはわずかに20cm残る：遺物 床着・覆土中のものを含めて細片のため図示はできなかった。床着は小形壺A・壺Aである。覆土中は坏A・壺A・須恵器坏A・坏B・鉢E・壺・壺A大型である。以上がわずかに器形がわかる遺物であるがSI 64に切られ、壺A大型の胎土中には海綿状骨針が含まれるところから、木葉下窯II期の製品と思われる。



第14図 102号住居跡・出土遺物（1）

102号住居跡

形態 方形：規模  $7.10 \times 7.00\text{m}$ ：支柱穴4本：支柱穴カマド両わきに見られる：梯子柱穴は南壁に近接してP5・6がある：北カマド：貯藏穴なし：壁溝全周：遺物 床着のものは1～9、覆土中は10～16である。2はカマドよりの出土で古墳時代の系譜引くものである。3～6・8・9は非クロロ坏Aで丸・平底が混じる。放射状暗文は3・8・9で残りはヘラ磨きとなる。7は東北系坏で口縁部内外に黒色処理が窺える。10は非ロ坏Aで外底部に螺旋状暗文を施す。12・13・14は須恵器坏Aで13の体部は外に開きロクロ目が強く残り底部調整は丁寧なヘラ削りである。15は坏B蓋で口縁部は短く折れ曲がる。16は鉢Dで扁平な胴部より外反する口縁部の端部は若干摘み上げられる。他に8は外底部に線刻「オ」、11の土師器皿Aは外体部に線刻で「水山」カがある。また、13・14・15・16は胎土白灰色・木目細かであり搬入品と思われる。



第15図 103・104号住居跡・出土遺物

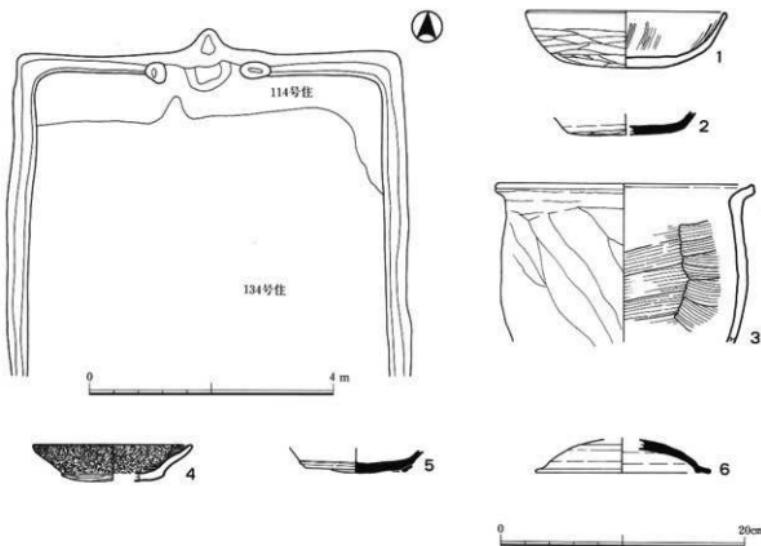


### 103号住居跡

形態方形：規模  $3.05 \times 3.30m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴なし・壁溝なし：遺物 床着の1は甕Aであるが口唇部は摘み上げられさらに選状に沈線がめぐる特異な甕である。覆土中は2の壺A（内黒）で外底部に墨書「本」がある。3は須恵器壺A・4は東北系・5は外底部に螺旋状暗文を施す。7は須恵器壺Bであるがこれらは104号住よりの流れ込みと思われる。他に墨書「□床」がある。103号住は上記より平安時代に帰属する。

### 104号住居跡

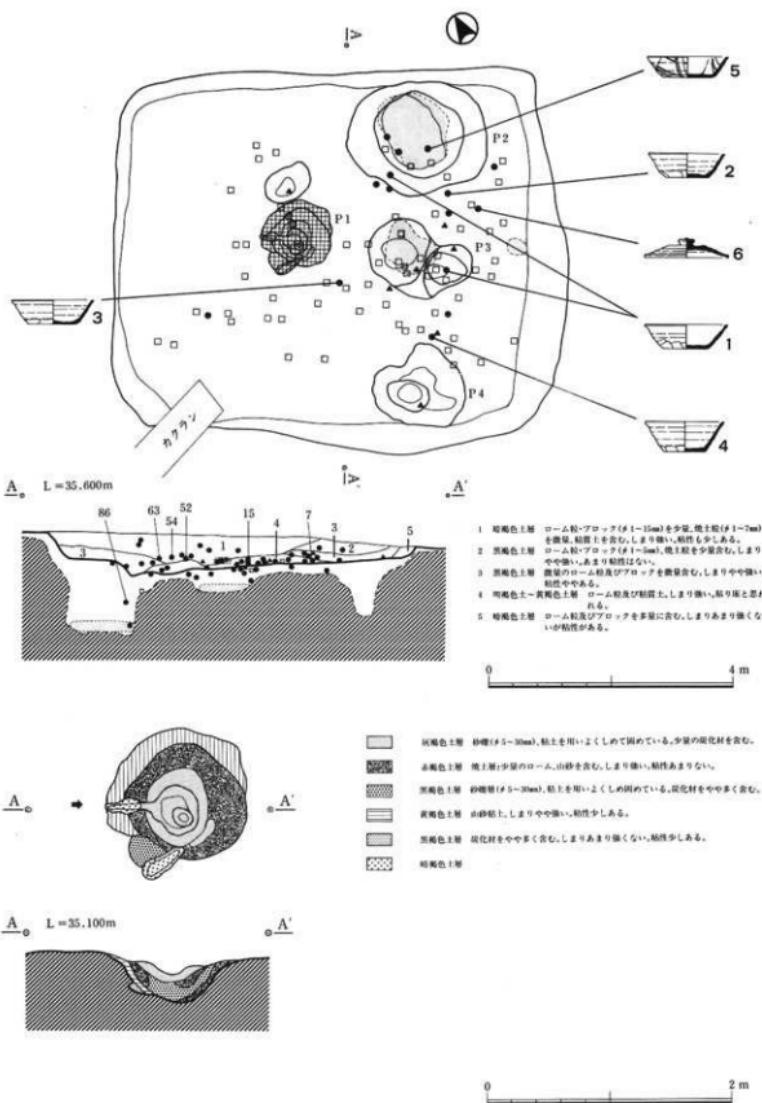
形態方形：規模  $5.70 \times 5.50m$ ：主柱穴4：支柱穴なし：梯子柱穴南壁に近接してP5がある：カマド？：貯蔵穴なし：壁溝全周：103号住に切られる：遺物 すべて覆土中からである。6は須恵器壺Aで下端～底部回転ヘラ削り調整を行う。8は須恵器甕A大型で外部に同心円印を有する。



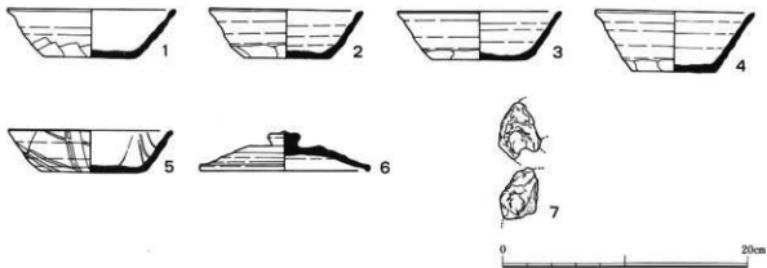
第16図 114号住居跡・出土遺物

### 114号住居跡

形態方形：規模  $6.84 \times 6.30m$ ：主柱穴不明：支柱穴カマド両わきに2本見える：梯子柱穴不明：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝北東西：134号住に切られる：遺物 床着は1～3、覆土中は4～6である。1は非クロロ坏Aで放射状暗文を施す。須恵器坏Aの胎土は木目細かく底部ヘラ削り調整とするもので胎土より102号住の13～16に類似する。3の甕Aは口縁部が「くの字」形になるもので内部に刷毛目が残る。外部は斜めのヘラ削りである。4は東北系坏Aで内外黒色処理する。5は須恵器坏Bで底部は高台部より大きく出る。6は須恵器坏B蓋で口縁部の反りは退化している。胎土中に雲母を含み還元軟質である。



第17図 2号住居跡 (1)

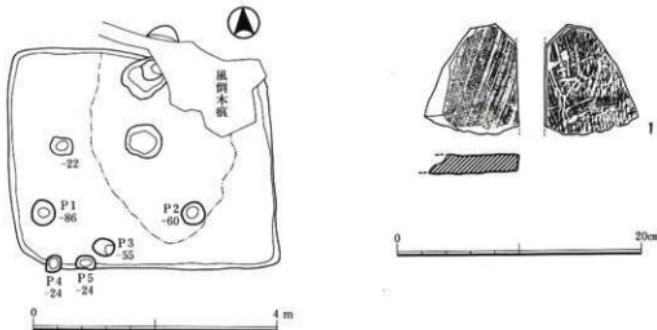


第18図 2号住居跡出土遺物（2）

平安時代

2号住居跡（鍛冶工房）

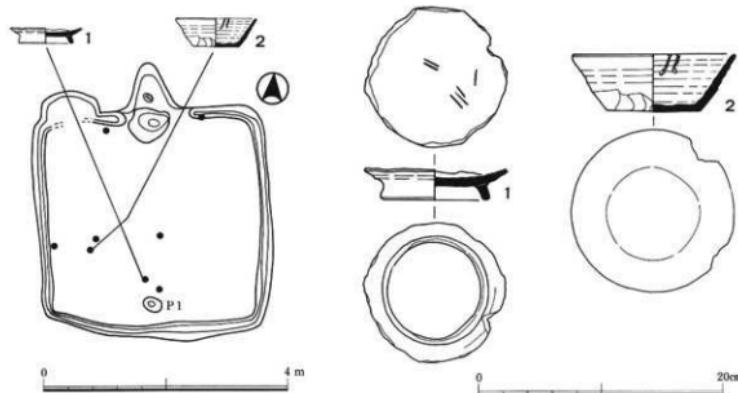
形態 方形：規模  $2.90 \times 3.55m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴・カマド・貯蔵穴・壁溝なし：P 1は鍛冶炉、P 2・P 3は排滓槽である。P 4は形状・深さから構造柱と思われるが対となるものはない。P 2・P 3の底部より鉄滓が多量に出土した。P 1の鍛冶炉は直径1.10m、深さ0.40mの橢円形を呈し、鍛冶炉の中では大型部類である。鍛冶炉は所謂地下構造を有するもので下部より人為的に炭層・砂礫層・粘土からなり、上位の粘土は還元化され青灰色を呈する。➡の位置には幅20cmの浅い掘り込みがあり藉羽口が位置する。その右側の空間は工人の仕事場であろう。遺物 床着は1～6、7は覆土中である。1～4の須恵器壺Aは下端～底部のヘラ削り調整は同じであるが、4は法量が異なる。5は搬入品で回転ヘラ削り調整で火拂が頸着であり器形・調整も他のものと異なるが法量変化はない。6は須恵器壺Bの蓋である。



第19図 3号住居跡・出土遺物

3号住居跡

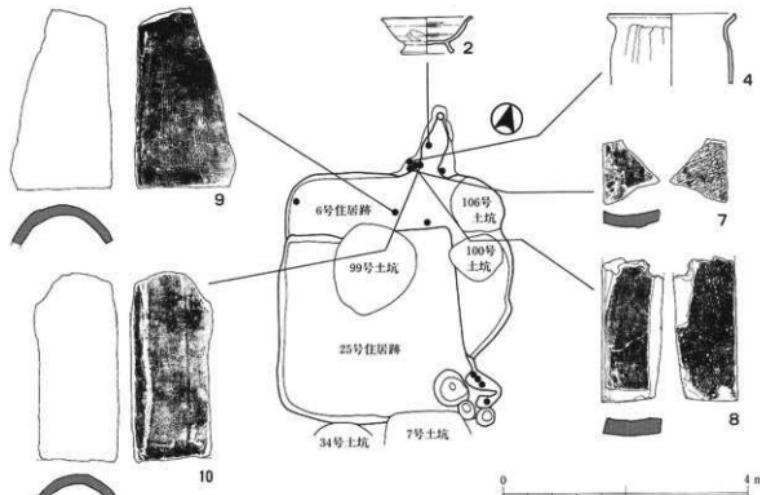
形態 方形：規模  $3.50 \times 4.22m$ ：主柱穴は南寄りに棟持ち柱が2本：支柱穴と梯子柱穴の区別は困難であるがP 3～5の3本がこれらに相当する。北カマド（大半は擾乱により明確でない）：貯蔵穴・壁溝なし：遺物 覆土中のもので壺A（回転糸切り無調整）・壺A・平瓦の細片がある、1の平瓦は凸面に線刻「豈」がある。調整は糸切りによる1枚造りで、凸面に長縄による叩きが残る。



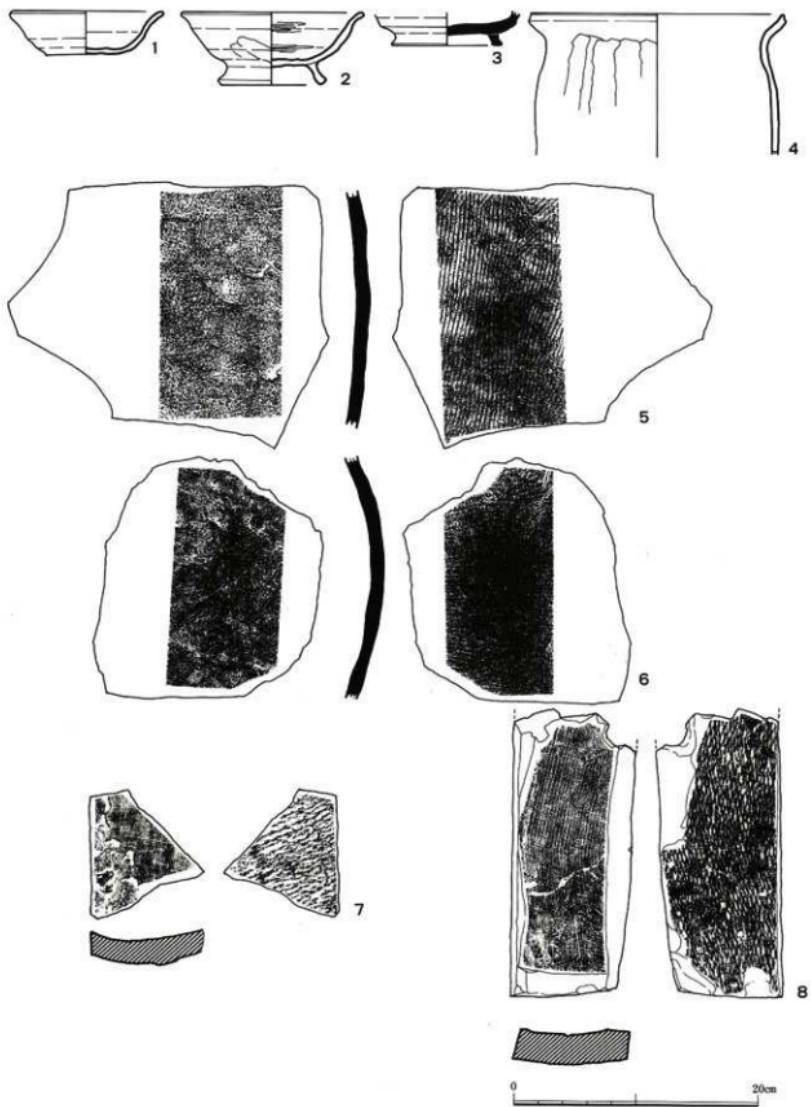
第20図 5号住居跡・出土遺物

5号住居跡

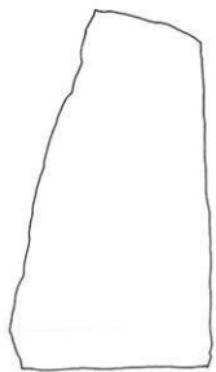
形態 方形：規模  $3.60 \times 3.70m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴は南壁に近接して P1 が位置する：北カマド：壁溝全周：6号住居跡に切られる：遺物 床着は 1・2 がある。この他に図示していないが壊A（灯明）が 2 点ある。調整は共に底部ヘラ削りである。1 は転用窓（須恵器盤B）で外底部に墨痕が残る。2 は須恵器壊Aで口縁内部に油煙が残るところから灯明に使用されたもので、外底部に墨痕が残る。



第21図 6号住居跡（1）



第22図 6号住居跡出土遺物（2）



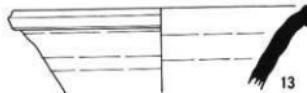
9



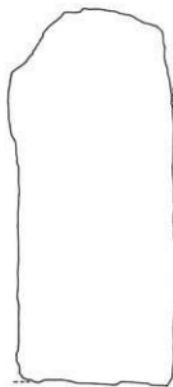
11



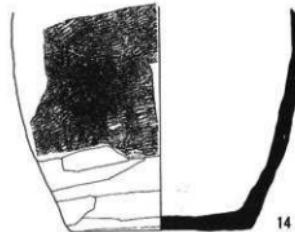
12



13



10



14



15



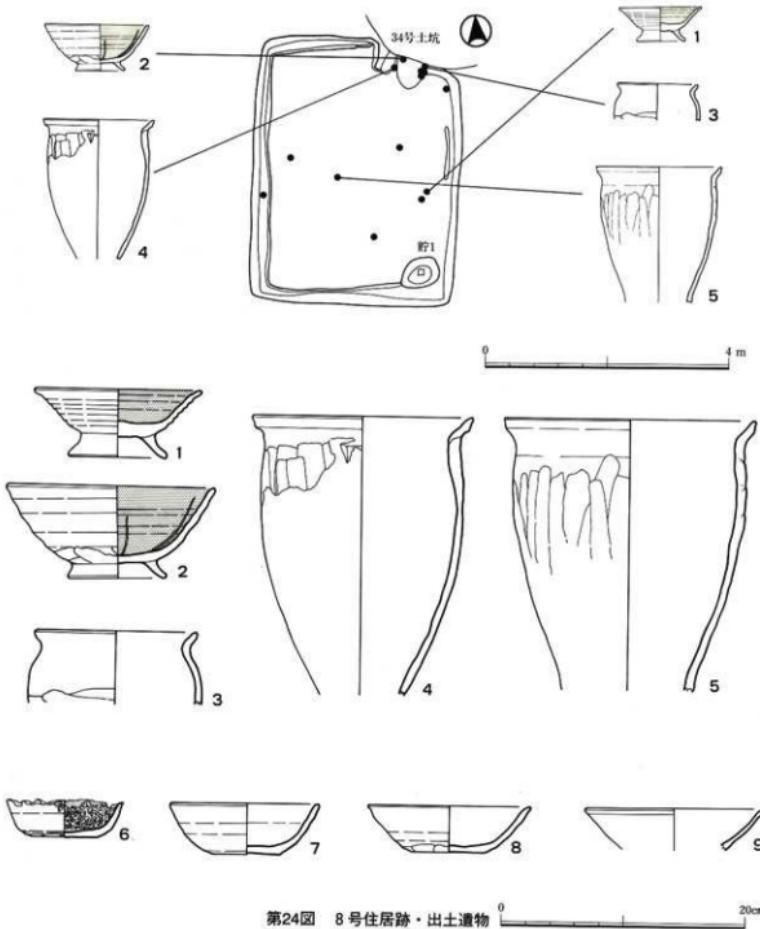
16



第23図 6号住居跡出土遺物(3)

6号住居跡

形態 方形：規模 3.62m：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴不明：北カマド・袖構築材に丸・平瓦を使用：貯蔵穴・壁溝なし：25号住に切られる：遺物 床着（カマド）は1～10、覆土中は11～16である。1は壊A、2は壊Bで高台はやや足高となり、内体部をヘラ磨きとするが内黒ではない。3は須恵器壊B、4は壊A調整は縦ヘラ削りである。5・6は須恵器壊A大型の破片で共に白色粒を含むが、6には海面状骨針が混じる。7は平瓦・8は熨斗瓦・9・10は丸瓦である。12は須恵器壊A・13は須恵器壊A大型の口縁部・14は須恵器壊A小型・16は土製の紡錘車である。その他覆土中には図示できないが灰釉碗（K14）が出土している。

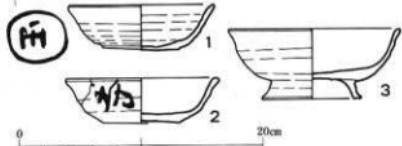


第24図 8号住居跡・出土遺物

### 8号住居跡

形態 方形：規模  $4.20 \times 3.15m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマドはSK 034（井戸）を切る：貯藏穴は南東隅に位置する：壁溝北南西側に残る：SK 034との関係か人為的堆積を示す。遺物 床着（カマド）は1～5、覆土中は6～9である。1・2は椀B・3は小型壺B、4・5は壺Aであるが長胴化して底部は細く在地系とは思われない。6～8は壺Aである。6は灯明用・7は回転糸切り無調整・8は下端～底部ヘラ削りである。9の白磁碗は口縁部に小さな折り返しの玉縁を形成する邢州窯の製品である。

他に7の墨書「」、「上」がある。

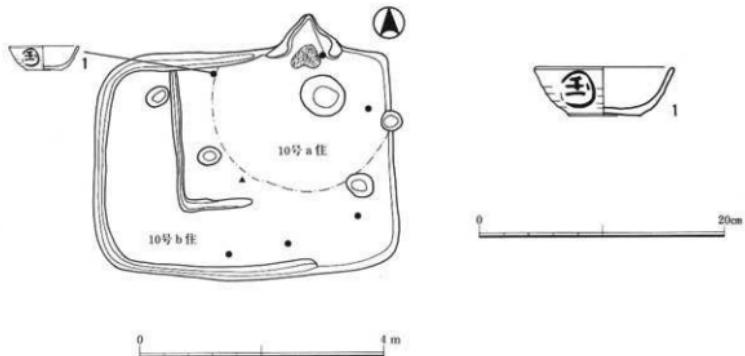


第25図 9号住居跡出土遺物

住に切られる。遺物 全て覆土中の出土である。1・2は壺A、3は椀Bである。1は底部調整が底部回転糸切りのもので、外体部に朱墨書「」がある。2は底部調整が下端～底部ヘラ削りがあり外体部に墨書「寺」がその他2ヶ所に墨痕、外底部にも墨痕が窺える。3は椀Bで底部回転糸切りである。外底部に墨痕が見られる。

### 9号住居跡

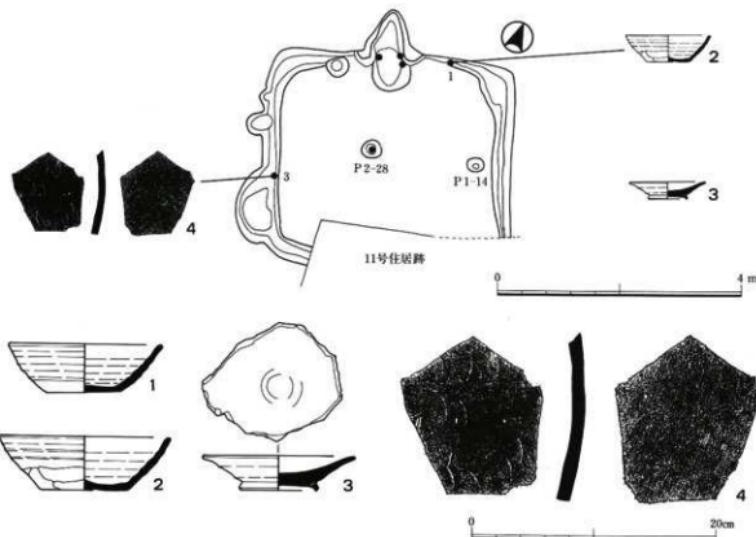
形態 方形：規模  $2.3a \times 2.30m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴南壁に近接してP 1がある。：東カマド：貯藏穴・壁溝なし：10号



第26図 10号住居跡・出土遺物

### 10号a・b住居跡

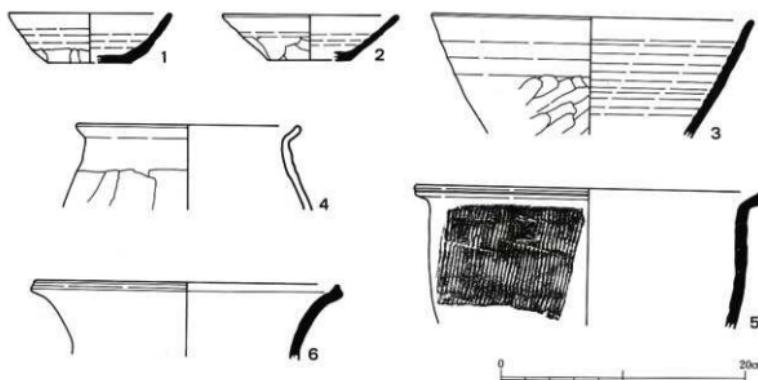
形態 方形：規模  $2.70 \times 3.60m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯藏穴なし：壁溝北南西側に残る：11号住を切る。増築により当初のカマドを利用しながら南・西側に拡張する。拡張前を10号a住・拡張後を10号b住とする。10号b住は規模  $2.45 \times 3.45m$  を測る。遺物 床着遺物1は壺Aで底部回転糸切り無調整である。外体部に墨書「」がある。覆土中にも墨書が5点出土しているが判読不明であるため墨痕として扱った。他には灰釉長頸瓶片が見られる。



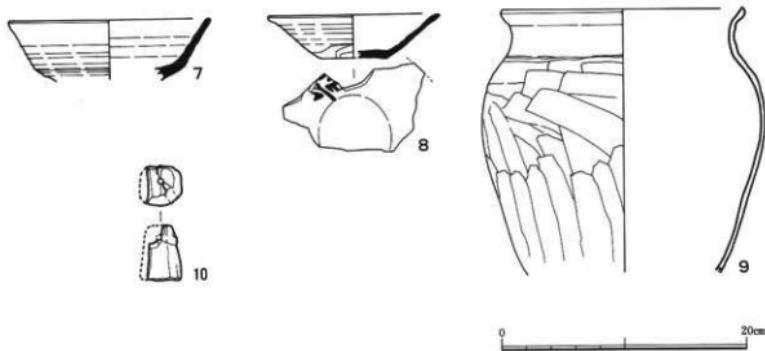
第27図 12号住居跡・出土遺物

#### 12号住居跡

形態 方形：規模  $3.15 \times 3.95\text{m}$ ：11号住に切られる。主柱穴・支柱穴・梯子柱穴・北カマド・貯蔵穴・壁溝全周：遺物 床着は1～4である。須恵器壺Aの調整は、1は下端～底部回転ヘラ削り、2は下端～底部ヘラ削りである。3・4は転用硯である。3の須恵器皿Bは内体～底部、4の壺A大型は胴内部に擦痕が共に顕著で、特に4は墨が付着する。土器の組成は須恵器で占められ土師器は見られない。



第28図 13号住居跡出土遺物（1）



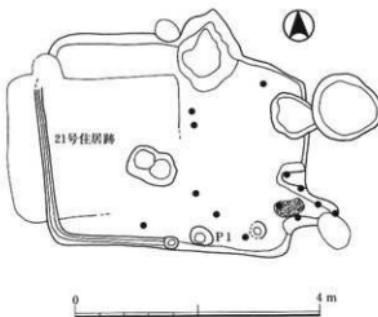
第29図 13号住居跡出土遺物（2）

#### 13号住居跡

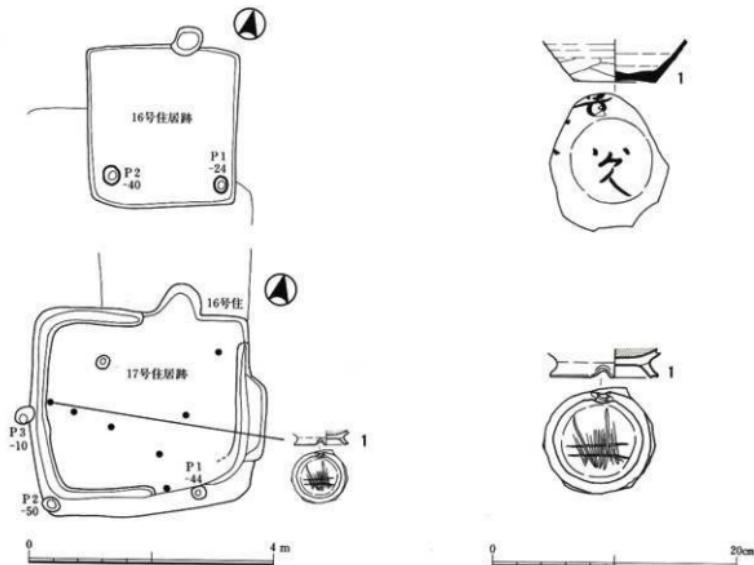
形態 方形：規模  $3.45 \times 3.35$ m：主柱穴は2本：支柱穴なし：梯子柱穴は南壁に2本位置する：カマドは北・東に位置する：貯蔵穴は2ヶ所：壁溝全周：遺物 床着は1～6、覆土中は7～10である。1・2の須恵器壺Aは、調整は下端～底部ヘラ削り、須恵器鉢Eも下端～底部ヘラ削りとなる。4は壺B、須恵器は壺と思われるが、鉢Eにも類似するものがあり器形を決定するに困難となっている。5は須恵器壺A小型の口縁部で胎土に石英・雲母が顯著である。7は須恵器壺Bで良好な焼成となっている。8は須恵器壺Aで外体部「前」かあり。9は土師器壺Cである。10は土製の鍤である。上部横位と真上に穿孔されて40gを測る。他に覆土中より灰釉陶片が2点・瓶片1点見られる。また、墨書3点が出土しているがいずれも判読は明確でない。土器組成は須恵器が圧倒的である。

#### 14号住居跡

形態 方形：規模  $3.32 \times 4.25$ m：主柱穴・支柱穴なし：21号住居に切られる。梯子柱穴は南壁に近接してP1が位置する：カマドは北側に1ヶ所、東側に2ヶ所見られるが、住居廐棄前は東南隅に移動する：貯蔵穴なし：壁溝南西側：遺物 図示していないが床着は須恵器壺A、土師器皿B・小型壺A・壺Aである。壺Aは胴部縱位ヘラ削りだけの調整で特有のヘラ磨きは見られない。また下端部のヘラ削りを行なうなど須恵器の調整技法を合わせ持つ。覆土中には壺A・皿B・小型壺Aがあり、墨書には「南」かが見られる。



第30図 14号住居跡



第31図 16・17号住居跡・出土遺物

#### 16号住居跡

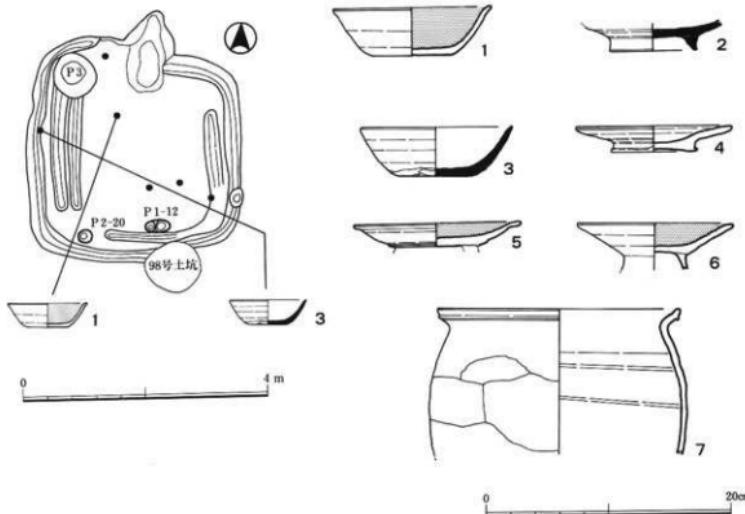
形態 方形：規模  $2.52 \times 2.35m$ ：主柱穴は南壁両端に P1・P2 の 2 本が棟持柱と見られる：支柱穴なし：梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴・壁溝なし：17号住を切る：遺物 床着はなく、覆土中のみ出土している。1は須恵器環Aで外体・底部に墨書き見え、外体部「中公人」か・外底部「公人」と判読できる。他に坏A、灰釉長頸瓶が出土している。

#### 17号住居跡

形態 方形：規模  $3.00 \times 3.35m$ ：主柱穴なし：支柱穴 P1・2 の 2 本が相当すると思われる。P3 は P1・2 より浅いため除外した：梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝全周：16号住に切られる：遺物 床着は 1 のみである。1は坏B底部で、外体部に線刻「井」かが窺われる。他は覆土中に墨書き 4 点みられるがいずれも判読が明確でない。

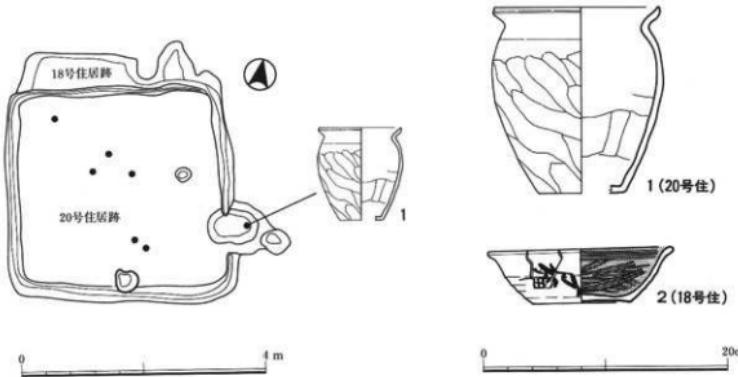
#### 19号住居跡

形態 方形：規模  $3.75 \times 3.35m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴が南壁に近接して 2ヶ所見られるがこれらには時間差がある。壁溝は完掘時に東・南側に 2 本、西側に 3 本検出された。これらは増改築による結果であり、カマドは定位位置のまま 2 回認められる。当初の規模は  $2.90 \times 2.30m$  を測るもので梯子柱穴 P1 が対応する。1回目の増改築はカマドを除き東・南・西側の 3 方向に拡張され規模は  $3.10 \times 3.00m$  を測り梯子柱穴 P1 が対応する。2回目は西側の壁を修築し規模は  $3.50 \times 3.30m$  を測り梯子柱穴 P2 が対応する。明



第32図 19号住居跡・出土遺物

確でないがカマド北西隅角のズレは、1回目の増改築に伴うものと思われる。壁溝全周：貯蔵穴は最終時に伴う：壁溝全周（3回）：遺物 床着は1～3、覆土中は4～7である。1は壺A底部回転糸切り無調整、2は須恵器皿B、3は須恵器壺A、4～6は皿B、7は甌Aで胴部ヘラ削りは横位である。この他覆土中より墨書きが2点出土し「福カ万」がわずかに判読できるが今1つは墨痕である。



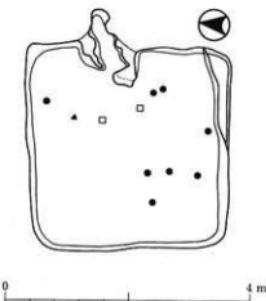
第33図 18・20号住居跡・出土遺物

### 18号住居跡

形態 方形：規模  $0.6a \times 2.90m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴・壁溝なし：20号住に切られ、わずかにカマドを残す：遺物 覆土中で壊A・壺A・須恵器壊Aがある。壊底部の調整は回転糸切り無調整と下端～底部ヘラ削りが混在する。

### 20号住居跡

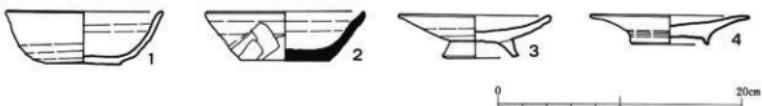
形態 方形：規模  $2.40 \times 3.60m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴南壁に近接してP1がある：東カマド：貯蔵穴なし：壁溝全周：18号住を切る：遺物 床着（カマド）は1の小型壺Aである。覆土中は2壊Aで底部調整は回転糸切り無調整で外体部に墨書「万福」がある。



第34図 27号住居跡

### 27号住居跡

形態 方形：規模  $3.00 \times 3.17m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴なし：東カマド：貯蔵穴・壁溝なし：遺物 図示はしていないが床着は須恵器壊A・壺Bがある。調整は前者が下端～底部ヘラ削り、後者が回転ヘラ削りである。他に小型壺A・壺A・須恵器鉢E・管状土錘がある。覆土中より灰釉楕片、墨書が3点出土している判読は「成万」「本」残り1点はわからない。



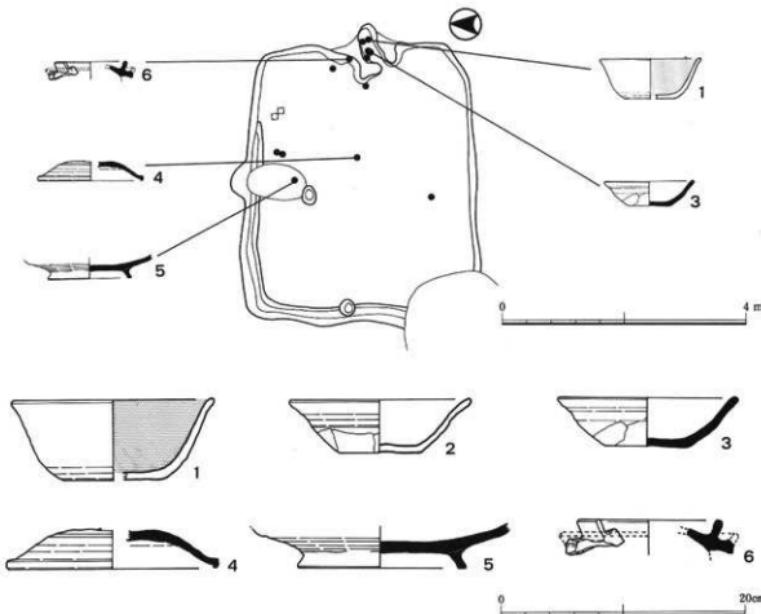
第35図 30号住居跡出土遺物

### 30号住居跡

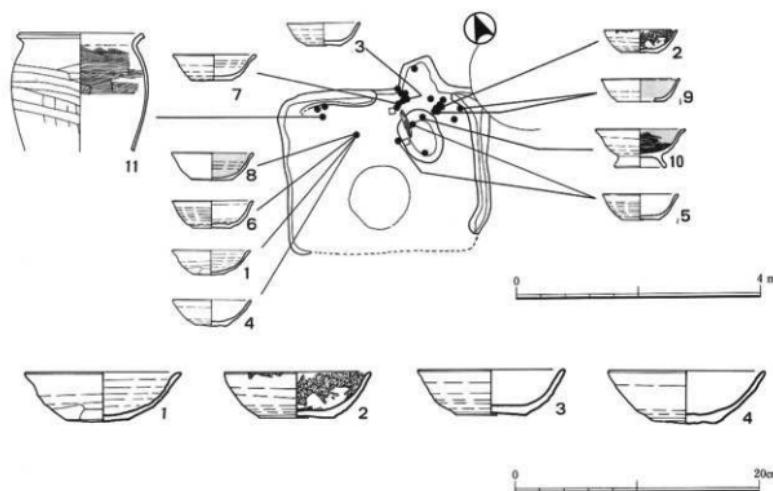
形態 方形：規模  $2.25 \times 3.15m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝は南側：38号住を切る：遺物 床着は1～4である。1は壊Aで底部調整は回転糸切り無調整である。2は須恵器壊Aは口縁部がやや内済し、調整は下端～底部ヘラ削り、3・4は壊Bで高台部の造作は3が貼り付け、4が削り出しによるもの。覆土中に壊A片2点あり、1つは墨書「奉□」今一つは判読不明である。

### 31号住居跡

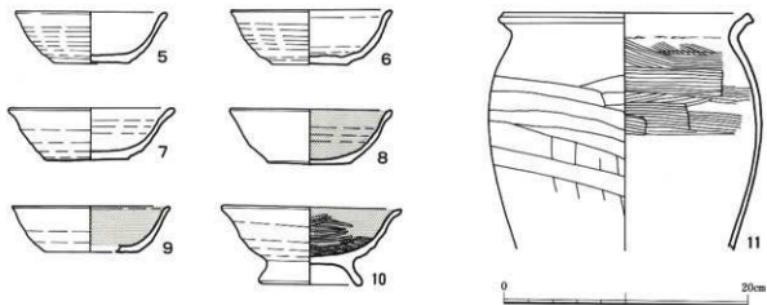
形態 方形：規模  $3.60 \times 4.40m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北・東カマドで北より東に移動が認められる：貯蔵穴なし：壁溝北西側：遺物 2・4・5は床着、1・3・6はカマドよりの出土である。1は内黒の壊Aで調整は回転糸切り無調整である。2・3は壊Aで底部下端～底部ヘラ削り。また2は土師器としているが、3と法量が同じであるため焼成不良（未還元堅緻）の可能性がある。4は須恵器蓋、5は壊B、6は円面鏡で上部1/4の遺存である。他に墨書が2点あり、その内1点は「西」かと読める。



第36図 31号住居跡・出土遺物



第37図 32号住居跡（1）



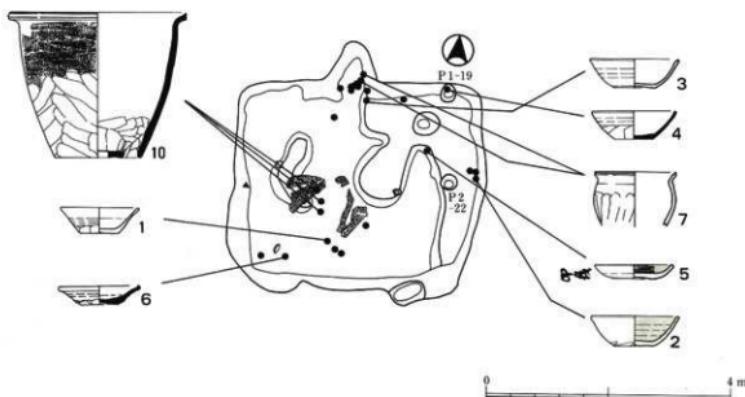
第38図 32号住居跡出土遺物（2）

### 32号住居跡

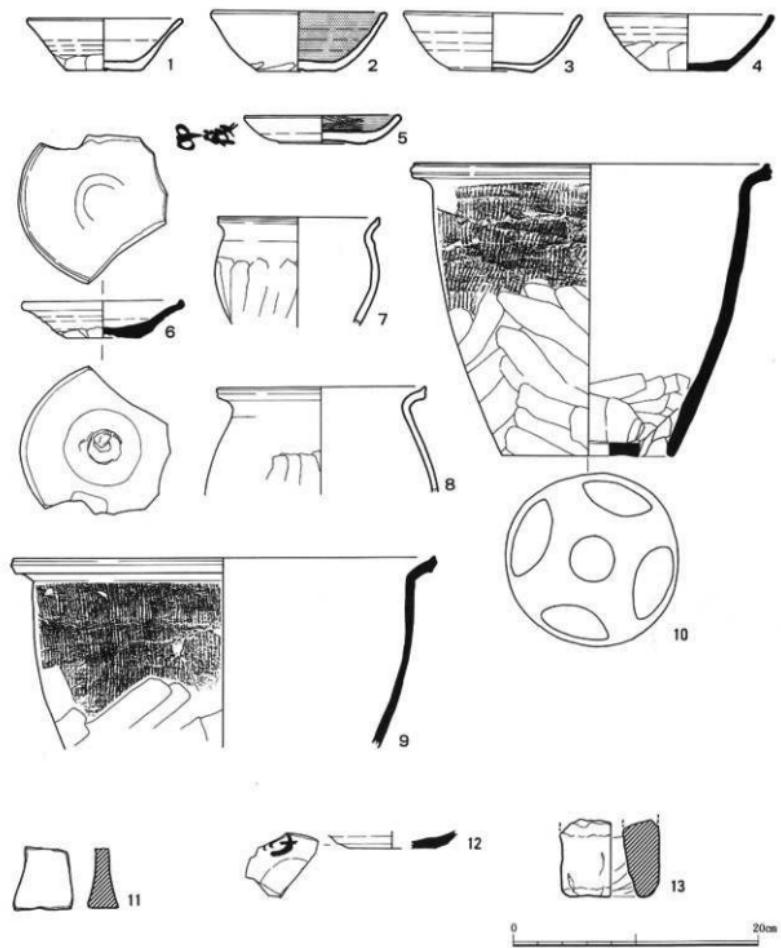
形態 方形：規模  $2.60 \times 3.50\text{m}$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド（東寄り）：貯蔵穴なし：壁溝全周：遺物 掘載した遺物は全て床着である。遺物は壺A・B（足高）・甕Aで構成され須恵器はない。壺Aは1を除いて底部調整が回転糸切り無調整である。2は灯明用である。また1・4・6・8はカマドの焚き口西側より4枚重なった状況で出土している。さらに管状土錘がカマド焚き口付近にまとまって合計276個出土している。管状土錘は住居で製作し、カマドで焼成された事がわかる。



管状土錘出土状況



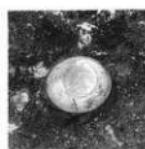
第39図 33号住居跡（1）



第40図 33号住居跡出土遺物（2）

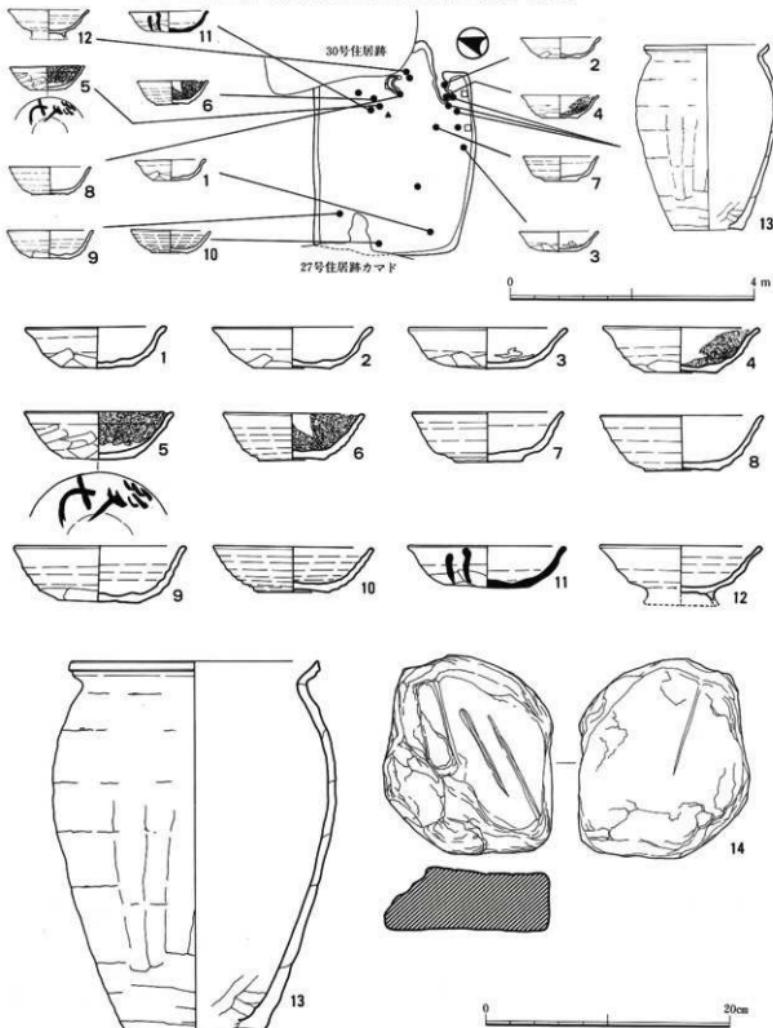
33号住居跡

形態 方形 形：規 模 2.95×3.70m：支柱穴なし：支柱穴2（P 1・2）？・梯子穴なし：北カマド：貯蔵穴なし：遺 物 床着は1～11、覆土中は12・13である。4の須恵器環A・転用硧（蓋）を除いて土師器である。底部調整は1・4が下端～底部ヘラ削り、2が回転糸切り後下端～底部ヘラ削り、3・5が回転糸切り無調整である。6は転用硧（須恵器蓋）で内面擦痕が顕著である。調整は天井部回転ヘラ削りの



33号住居跡出土状況

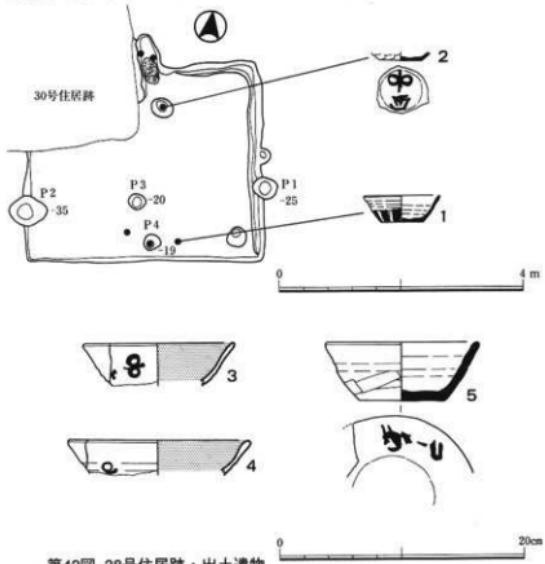
後さらにヘラ削りを行なう。1～4は壺A、5は皿Aで外体部に墨書「中後」がある。7は小型壺A・8は壺A、9は須恵器鉢E・10は須恵器瓶（多孔）であるが、口径・口縁部の長さに相違点が窺えそ�である。11は砥石、12は外体部に墨痕を有す須恵器壺Aである。13は輪の羽口片である。



第41図 36号住居跡・出土遺物

### 36号住居跡

形態 方形：規模  $2.50 \times 2.80\text{m}$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：カマド？：貯蔵穴・壁溝なし：27・30号住が切る：遺物 床着は1・3・5～7・9～11・13、カマドは2・4・8・12である。11の須恵器坏Aを除いて全て土師器である。坏Aの調整は下端～底部ヘラ削り（1～5・9・11）と回転糸切り無調整（8・7・6・10）とが半々である。壺Aはヘラ磨きが見られない。14は雲母片岩の砥石である。表裏に擦痕が溝状に残る。墨書きは5の外体部「後七」、11の墨痕である。他に灰釉長頸瓶片がある。



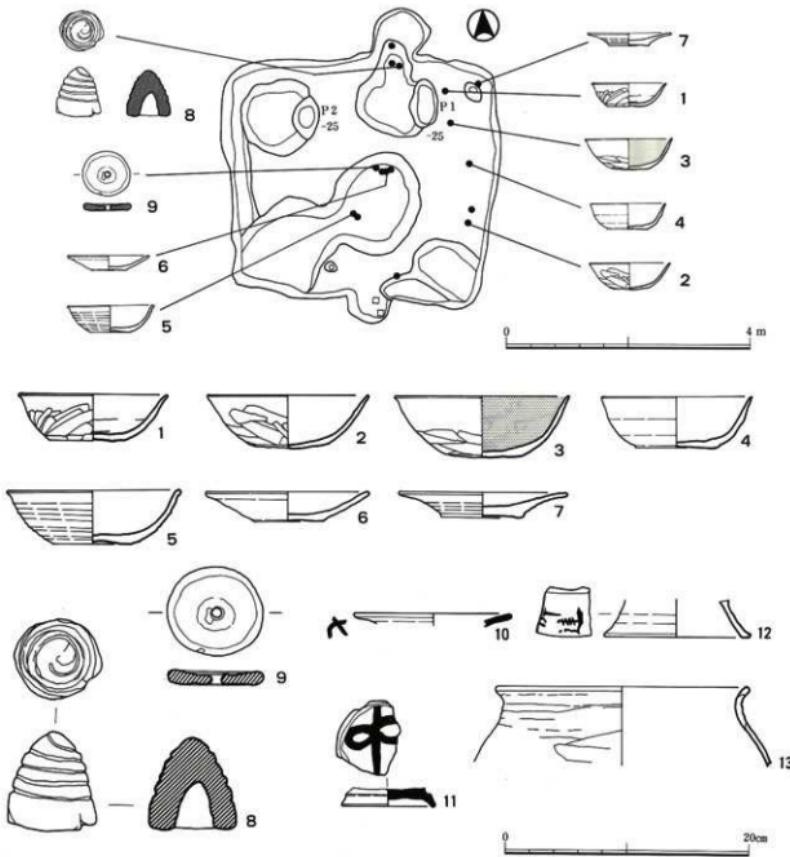
第42図 36号住居跡・出土遺物

### 38号住居跡

形態 方形：規模  $3.00 \times 3.70\text{m}$ ：主柱穴は東西壁に接してP1・2がある。支柱穴はP1・2間中央にP3が位置する：梯子柱穴は南壁に接してP4がある：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝北・東側：30号住に切られる：遺物 床着は1・2、覆土中は3～5である。調整は下端～底部ヘラ削りが主体である。他に須恵器坏A（灯明）・壺A大型がある。墨書きは6点あり判読可能は「中□」「中西」「中南」か、後2点は墨痕である。

### 42号住居跡

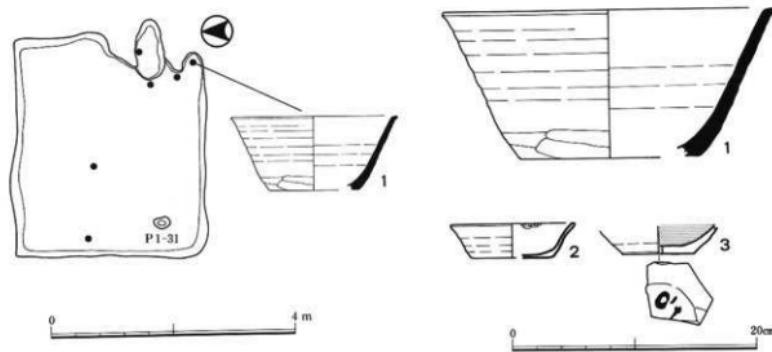
形態 方形：規模  $3.80 \times 4.20\text{m}$ ：主柱穴はP1・2の2本：支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝西：遺物 床着は1～8、覆土中は10～13である。坏A（1～5）、皿A（6・7）、8は土製品蝶型でカマドよりの出土である。内部は中空とし外部には螺旋状に線刻する。最大幅15cm、高さ2.0cmを測る。9は紡錘車（坏A転用）である。覆土中には墨書きがあり10「七」12「□連」11朱墨「中」、他に「□」「公人」か「万」がある。12は壺Cで調整は横ヘラ削りである。



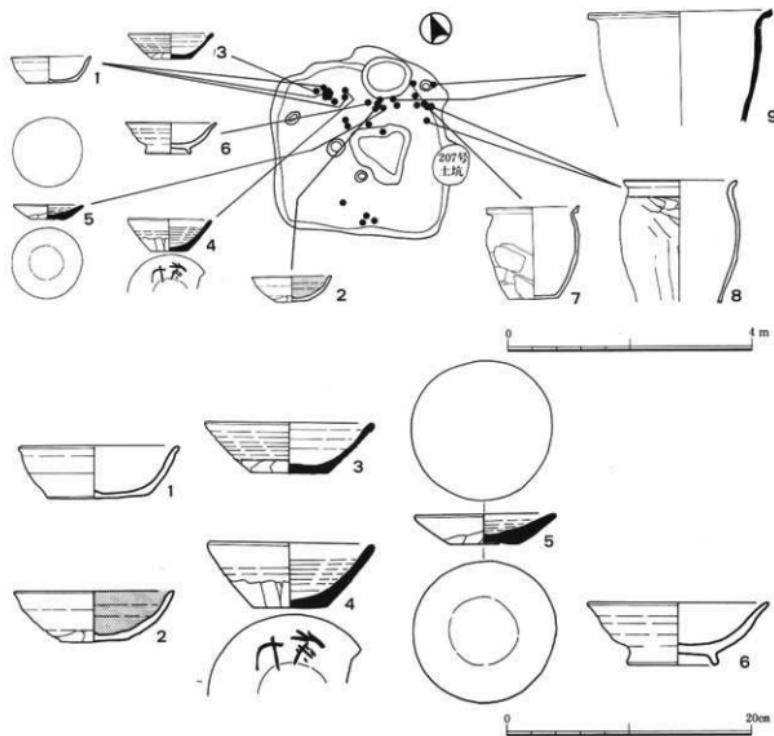
第43図 42号住居跡・出土遺物 (8はスケール1／1)

43号住居跡

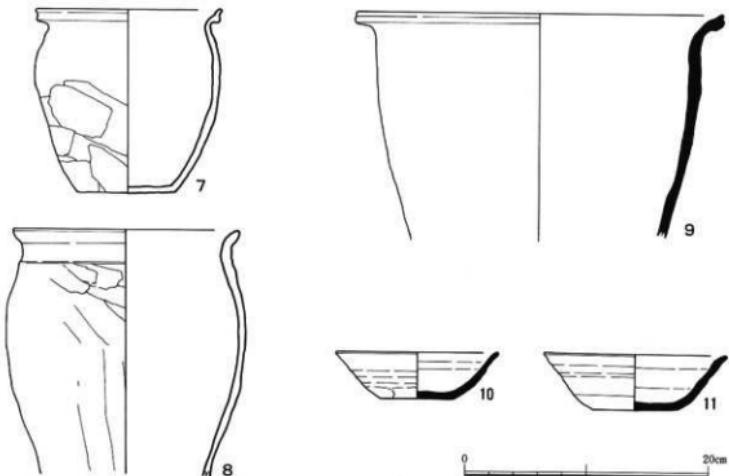
形態 方形：規模 2.95×3.45m：主柱穴なし：支柱穴P1がある。梯子柱穴は従来の位置（カマドの対面位置、あるいは南壁中央付近）はない：東カマド：貯蔵穴・壁溝なし：遺物 床着は1の須恵器鉢Eである。口縁部は外反するが端部で面をなし、下端～底部ヘラ削りである。覆土中は2・3の坏Aの他に須恵器壺A大型、灰釉椀片（K90）・転用硯（灰釉椀底部：光ヶ丘1号）がある。2は口径10cm、器高3cm以内の小型坏で調整は回転糸切り無調整である。3の墨書きは判読不明である。



第44図 43号住居跡・出土遺物



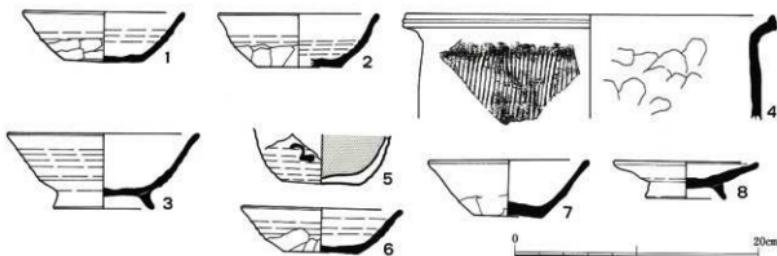
第45図 45号住居跡・出土遺物（1）



第46図 45号住居跡出土遺物（2）

#### 45号住居跡

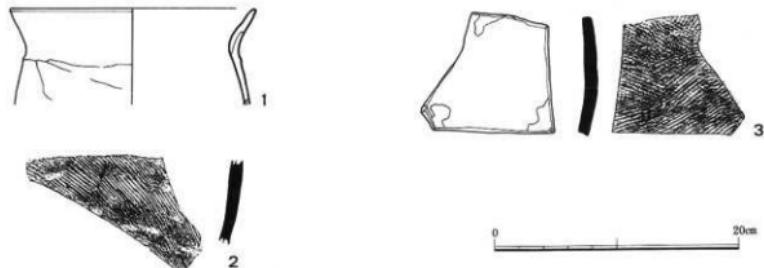
形態 方形：規模  $2.70 \times 2.60m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：カマド北？：貯蔵穴・壁溝なし：遺物 床着は1～9、覆土中は10・11である。底部の調整は1・11が回転ヘラ削りで、残りは下端～底部のヘラ削りである。5は須恵器皿A、6は壺B、7は小形甕A、8は甕C、9は須恵器瓶である。墨書には4の「後七」・5の底部内外朱墨痕がある。他には覆土中に灰釉瓦片（光ヶ丘1号）がある。



第47図 51号住居跡出土遺物

#### 51号住居跡

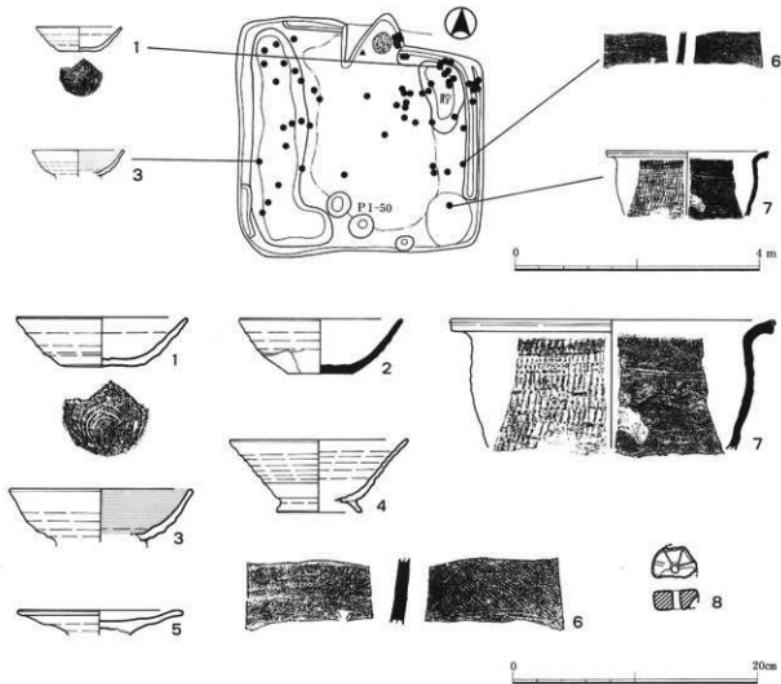
形態 方形：規模  $3.5a \times 3.85m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴は南壁に1本：壁溝北東西側：擾乱大：遺物 床着は1～4、覆土中は5～8である。5を除いて全て須恵器で構成される。1・2・6・7は須恵器壺A・3は壺B・4は鉢E・8は皿B、覆土中には墨書が12点見られる。わずかに判読できるものは「中」「中西」「公口」などがある。他に鉄製刀子が出土している。



第48図 52号住居跡出土遺物

52号住居跡

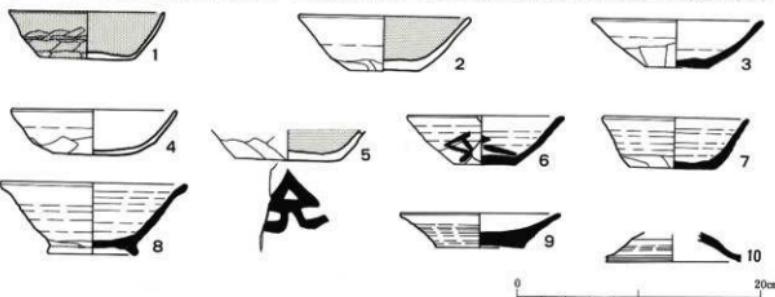
形態 方形：規模 $3.05 \times 3.54m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴：カマド？：貯蔵穴なし：壁溝東南西側：擾乱大：遺物 床着は1～3である。1は壺Cで胴部は横位のヘラ削りである。2は転用硯で内面には墨痕・擦痕が顕著である。もとは須恵器壺A大型の胴部である。胎土に黒色粒を含み、調整は内面は同心円当て具、外面は平行叩きである。3は須恵器壺A大型の胴部片である。2よりも木目が粗い。



第49図 58号住居跡・出土遺物

### 58号住居跡

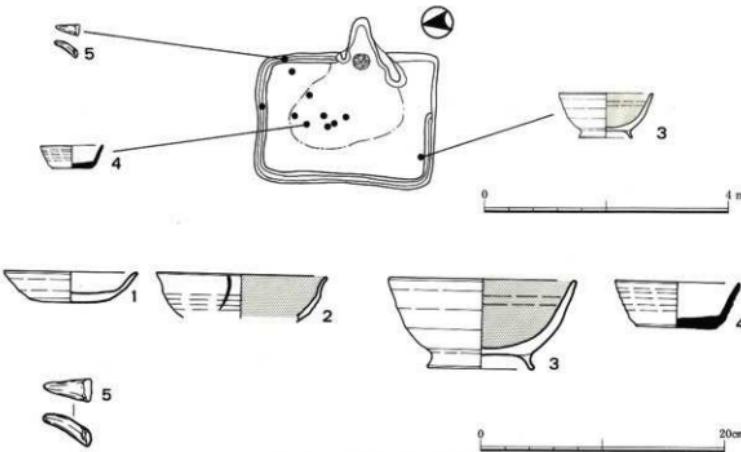
形態 方形：規模  $3.65 \times 3.85m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴は南壁に近接してP1が位置する：北カマド：貯蔵穴は北東隅：壁溝北東側：遺物 床着は1・3・6、カマドから2・4、7は搅乱の中より出土している。1は壊Aで調整は回転糸切り後底部周辺をヘラ削りする。2は須恵器壊A、3・4は壊B、5が皿B、6は須恵器小形甌A、7は須恵器鉢E、8は滑石製の紡錘車で片面に放射状の線刻がある。



第50図 60号住居跡出土遺物

### 60号住居跡

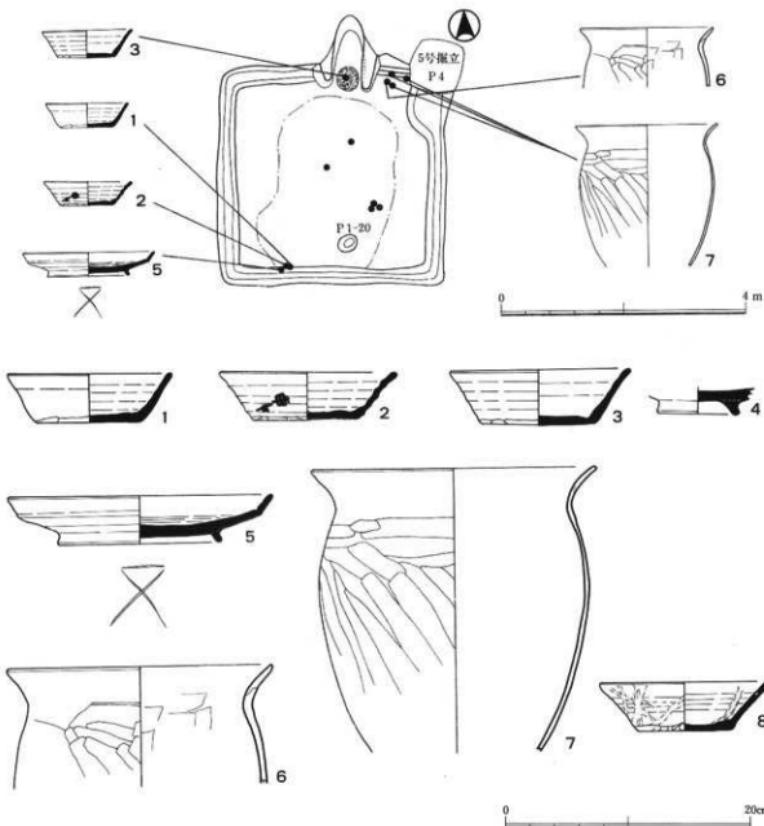
形態 方形：規模  $3.9a \times 4.10m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴不明：壁溝なし：搅乱大：遺物 床着は1～3、覆土中は4～10である。1・2は壊Aで1は薄手の器内で内外黒色処理される撇入品、4～7は壊A、8は壊Bである。9は須恵器皿A、10は須恵器蓋である。底部の調整は土師器・須恵器共に下端～底部ヘラ削りである。墨書は5の朱墨「允」、6は内外体部に墨痕がある。他に灰釉枕片（K90）がある。遺物は床着・覆土中共に時間差がない。



第51図 63号住居跡・出土遺物

63号住居跡

形態 東西に長い方形：規模 2.80×2.05m：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：東カマド：貯蔵穴なし：壁溝東南西側：65・64号住居を切る：遺物 床着は3～5、1・2はカマドからの出土である。1は壺A、2・3は椀B、4は須恵器壺Aである。5は双耳壺の牛角状把手である。管見に触れられている資料は浜ノ台窯より出土している。他には68・73号住より出土しているが、68号住の双耳壺は灰釉陶器に見られるような把手が扁平となるものである。墨書きは2の外体部に「ノ」かが見られるが判読は明確でない。



第52図 66号住居跡・出土遺物

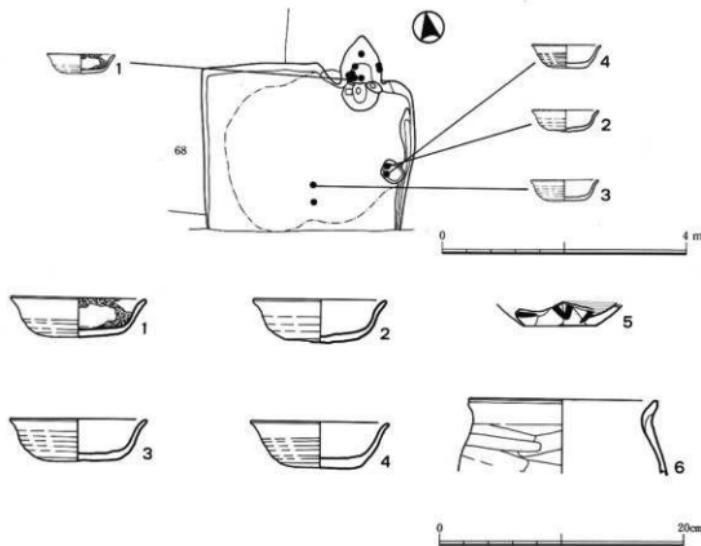
## 66号住居跡



遺物出土状況

形態 方形：規模  $3.45 \times 3.55m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴は南壁に近接しP1が位置する。：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝全周：SB05に切られる：遺物 床着は1～7、覆土中は8である。1～3は須恵器壺Aである。4は須恵器壺B、5は須恵器盤Bで外底部に線刻で「又」が見られる。6・7は壺Cで所謂武藏型の壺でヘラ削りは横位△斜位である。8は須恵器壺Aであるが内外面に火棒が顕著となっている。出土した須恵器壺Aの底部調整は下端～底部ヘラ削りであるが、下端の削り幅が狭く調整の違いが見られる。墨書は2の外体部に「車□」が見られる。

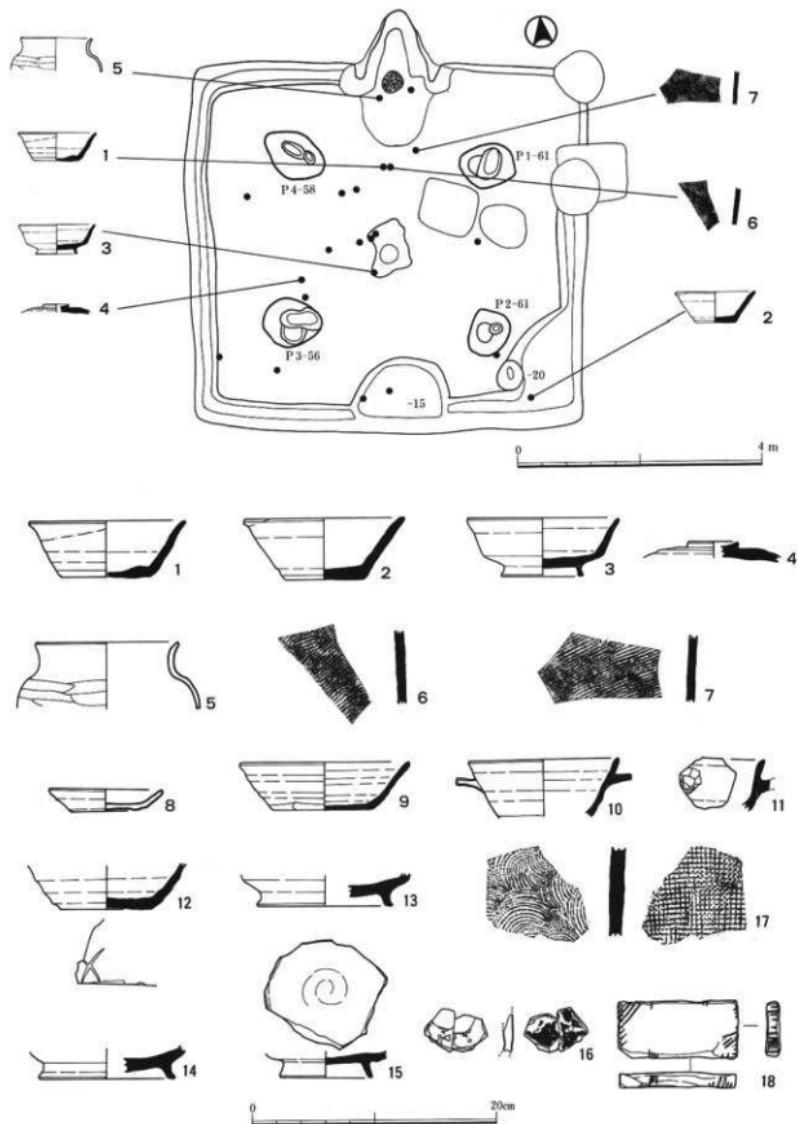
また、南壁の西よりに須恵器が上から1・2・5の順に重なった状況で出土している。



第53図 67号住居跡・出土遺物

## 67号住居跡

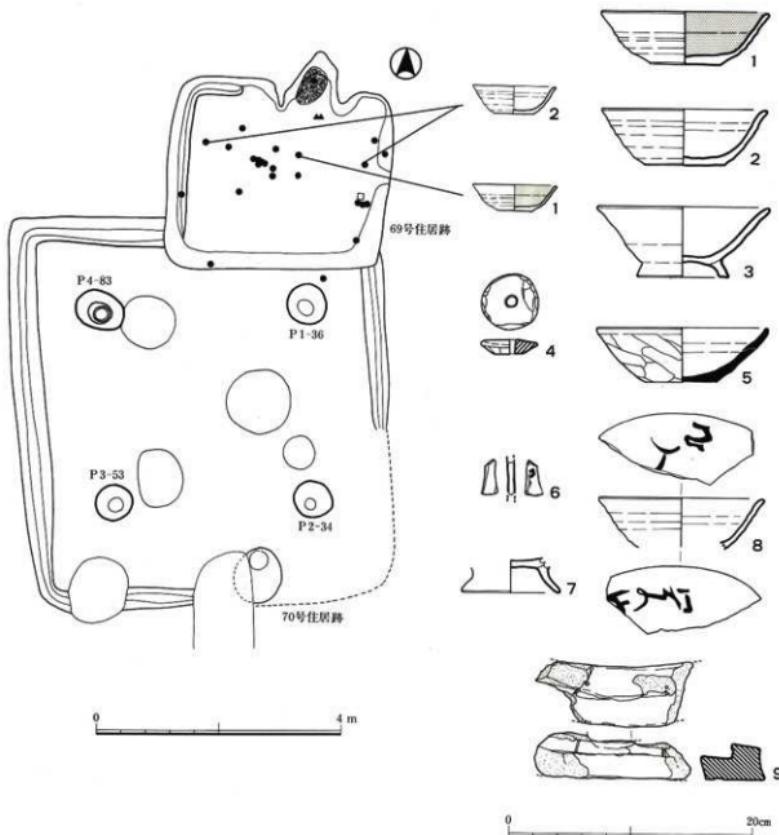
形態 方形：規模  $2.6a \times 3.35m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴？：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝東側：68号住・SB07を切る：遺物 床着は1～4、覆土中は5・6である。1～4の壺Aは口径11cm、器高3.5～4.0cmを測る小形の壺で、調整は回転ヘラ切り無調整ある。5は壺A、6は小型壺Aである。他には灰釉碗（K90光ヶ丘1号）、覆土中より墨書が10点出土している。5は判読不明、朱墨「中」2点など、残り判読不明7点出土している。



第54図 68号住居跡・出土遺物 (18はスケール1／2)

### 68号住居跡

形態 方形：規模 5.60×6.15m：支柱穴4：柱子穴なし：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝全周：67号住に切られる：遺物 床着は1～7、覆土中は8～18である。1・2は須恵器坏A底部回転ヘラ削り、3は須恵器坏B、4は蓋で鉢はリング状となり硬質に還元されている。5は小型壺C（武藏型）、6・7は須恵器壺A大型で外胴部は焼成時に金色に発色している。8は皿Aで回転糸切り無調整、9・12は須恵器壺Aである。12の外底部にはハラ記号「×」がある。10・11は須恵器双耳坏で10は把手が扁平、11は從来より知られている牛角状のものである。いずれも胎土より浜ノ台窯のものと思われる。13～15は須恵器壺Bで中でも15は転用鏡である。16は三彩陶磁器片で被熱され変色している。17は壺A大型叩きは格子目である。18は白瑪瑙による未製品である。6面に鋸状工具痕が見られ、表裏面は磨かれて顯著でない。



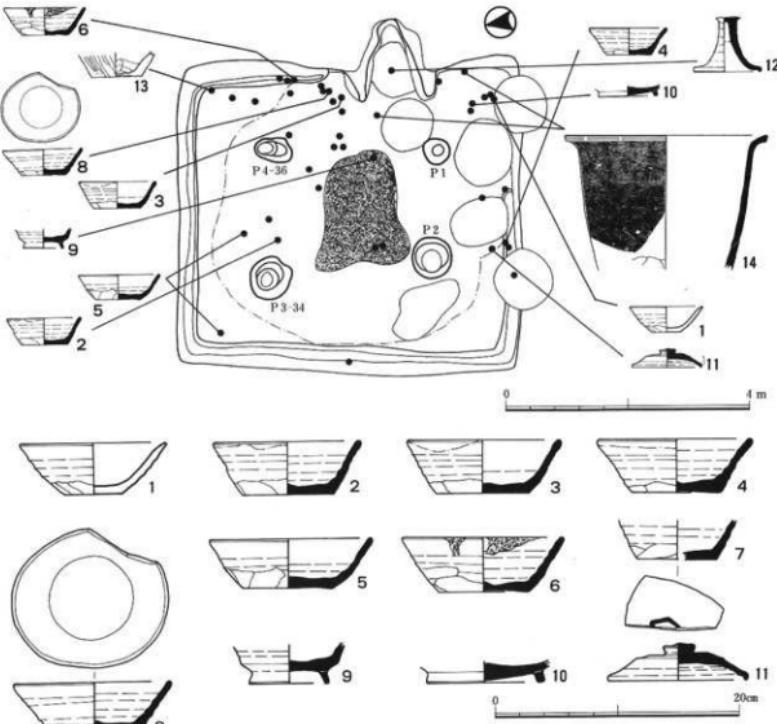
第55図 69・70号住居跡・出土遺物

### 69号住居跡

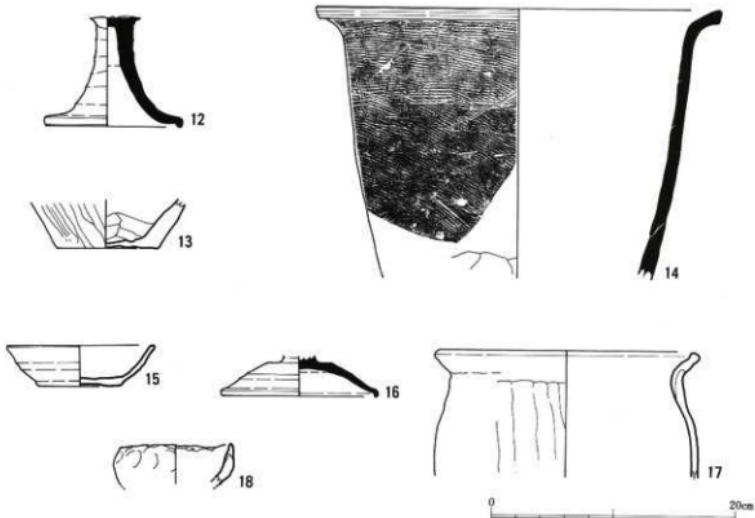
形態 方形：規模  $3.1\alpha \times 3.25m$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯藏穴なし：壁溝西側：70号住を切る：遺物 床着は1～4、覆土中は5である。1・2・5は壙A、3は壙Bである。この他に図示していないが、壙Aは累計8個の出土である。底部の調整は回転糸切り無調整と下端～底部ヘラ削りが半々である。5は石製紡錘車、管状土錐24個が出土している。他に小型壺C片、須恵器壺A大型片、墨書きは2点出土しいずれも壙Aである。一つは判読不明、今一つは明確で無いが「合」かであろう。

### 70号住居跡

形態 方形：規模  $6.10 \times 5.80m$ ：主柱穴4：支柱穴・梯子柱穴なし：北カマドと思われる：貯藏穴なし：壁溝全周：69号住に切られ、SB 22を切る：遺物 6～9は覆土中で床着遺物は無い。6は三彩陶器瓶の破片で被熱され変色している。7は壙B（足高）、8は壙Aで内外墨書きが見える、内は「公人」・外は「墨痕」である。9は須恵器不明製品である。下部は「L字」状に屈折し底部あるいは脚部と思われる。下部には透かしが入り、形は不明であるが両端部には小穴（径2mm）が穿たれている。



第56図 71号住居跡・出土遺物（1）



第57図 71号住居跡出土遺物（2）

#### 71号住居跡

形態 方形：規模  $5.30 \times 4.75m$ ：主柱穴は4本：支柱穴・梯子柱穴なし：東カマド：貯蔵穴なし：壁溝全周：床着は1～14、覆土中は15～18である。1は壺Aである。2～8は須恵器壺Aで器形（口唇部が豊肥する）・法量・調整糸に同一の物が多いところから同一の窯製品と思われる。9・10は須恵器壺B・11は蓋・12は高台盤の脚部・14は瓶がある。13は壺Aの底部である。土器組成は圧倒的に須恵器が多い。覆土中では15の壺Aは回転糸切り無調整・16は須恵器蓋であるが、11のものと差は見られない。17は壺A（縦ヘラ削り）、18は手づくね土器、他に灰釉皿片（K90）がある。墨書きは墨痕を含めて3点あり、判読出来るものは「公人」かがある。

#### 73号住居跡

形態 方形：規模  $5.15 \times 5.60m$ ：主柱穴は4本：支柱穴は：梯子柱穴は南壁に近接してP5・6がある：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝は全周しP5から主柱穴P2～3の間にさらに浅い溝が入る性格は不明である：遺物 床着は1～16、覆土中は17～28である。

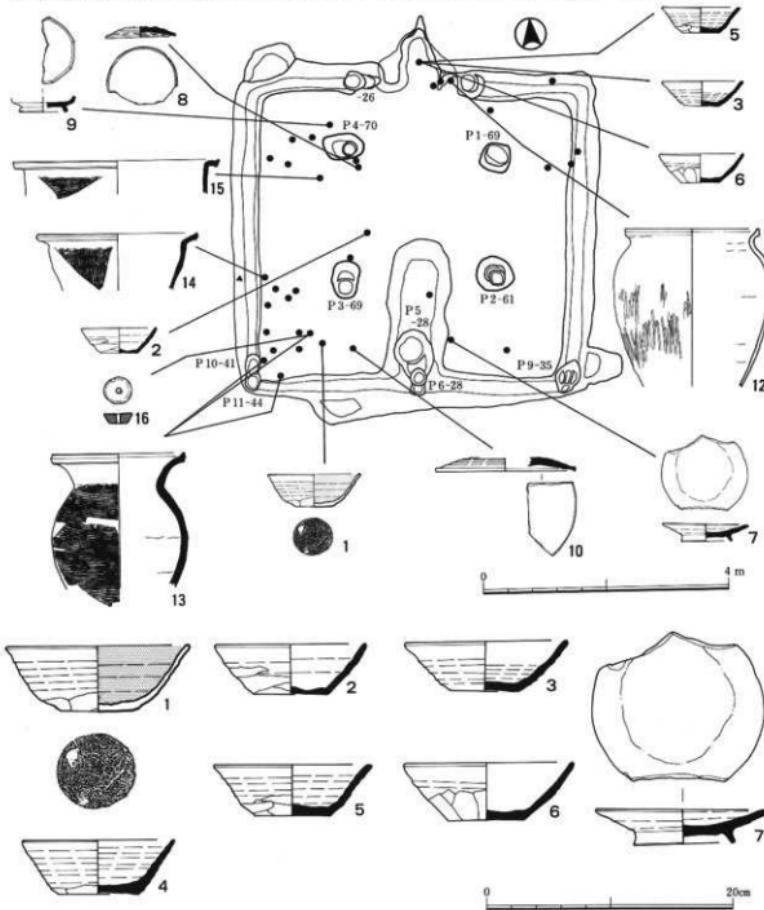
1は壺Aで底部の調整は回転糸切りの下端～底部ヘラ削りである。2～6は須恵器壺Aで3の回転糸切り無調整を除き、下端～底部ヘラ削りである。7・8は転用硯（7は須恵器皿壺B・8は須恵器蓋）で各々内底・天井部は擦痕が顕著である。9・10（9は須恵器壺B・10は蓋）も7・8程ではないが、擦痕が認められる。11・12は壺Aでカマド袖からの出土である。共に縦位ヘラ削きが顕著に認



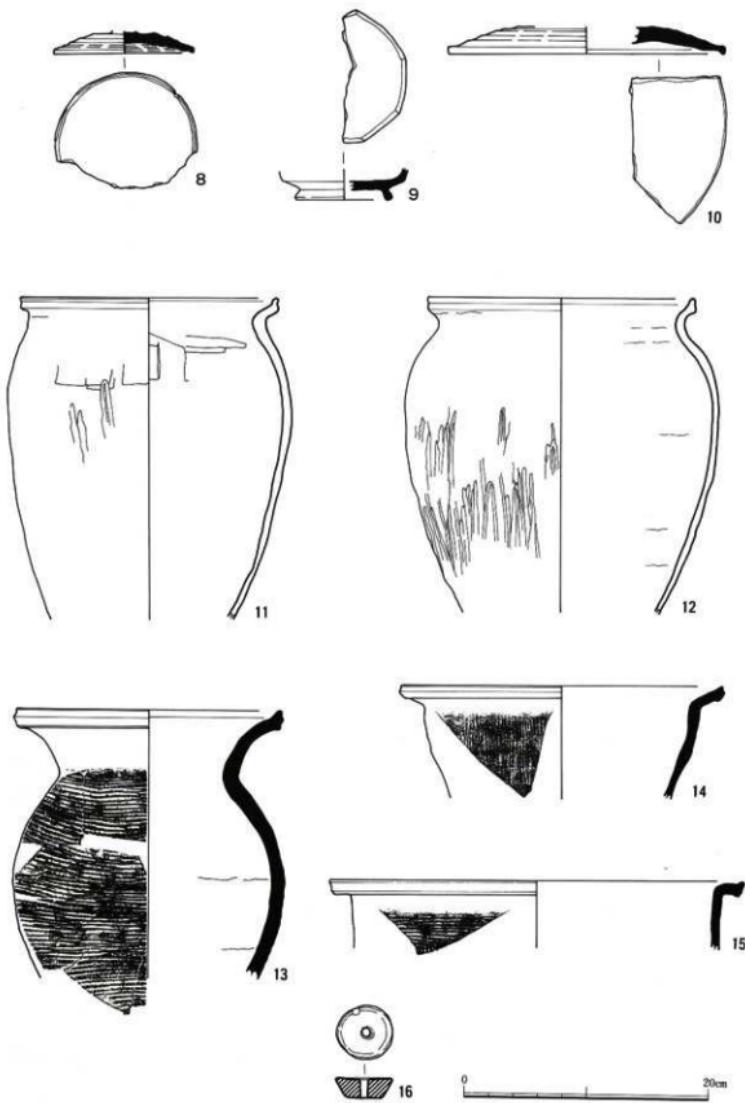
カマド遺物出土状況

められる。13は須恵器甕A小型である。外胴部は横位平行タタキが見られる。14は須恵器瓶・15は須恵器鉢Eである。16は土製錘車である。覆土中の遺物は坏A（18~20は回転糸切り、17・21~23は下端~底部ヘラ削り）、24は須恵器坏B（使用痕）、25は須恵器蓋、26は三彩小壺の底部である。内外剥離が著しいが三彩（白釉・緑釉・褐釉）がわずかに残る。27は須恵器壺Eの破片（短頸壺）、28は須恵器双耳坏の牛角状把手で浜ノ台窯の製品と思われる。

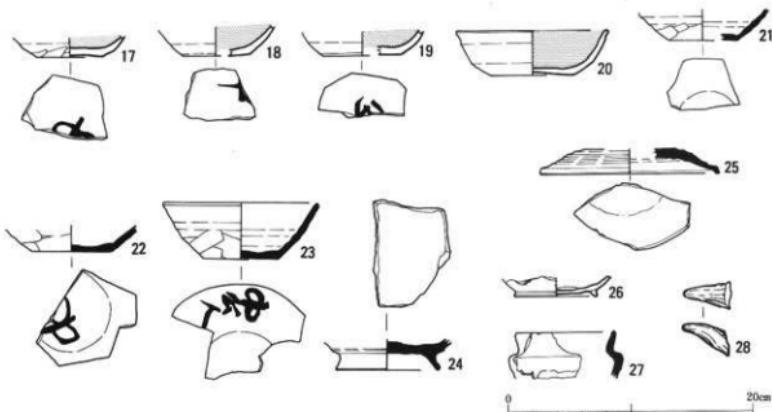
特にカマドの火床部より須恵器坏がそれぞれスサ粘土を充填させながら重ねた状況で3個体見られ、支脚として使用されていた。また、その下位には小ピットが掘られ、さらに先の3個体から連続して甕A片を含



第56図 73号住居跡・出土遺物（1）



第59図 73号住居跡出土遺物（2）



第60図 73号住居跡出土遺物（3）

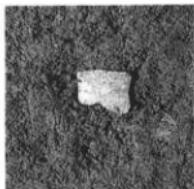
めて11個（累計14個）の壺類が出土している。これらはいずれもスサ粘土をかませながら重ねている。

他に墨書きが21点出土しているが、ここでは多量であるため判読出来るものを掲載した。残りの墨書きは墨書き集成に掲載している。17・18・22は「中」である。19は「西」か、23は「中公人」である。他に朱墨「公人」かがある。21点中「中」に関わるものは8点、「公」に関わるものは3点数えることが出来る（「中」「公」は23で重複する）。

#### 74号住居跡

形態 方形：規模  $2.80 \times 3.5\text{m}$ （北西側を84号住と重複するが切り合い関係は明確ではない。カマドの遺存より84号住が先行か）：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド（燃焼部・煙道部は擾乱により壊されている）：貯蔵穴：壁溝なし：遺物 床着は（カマド）1～9、覆土は10～13である。

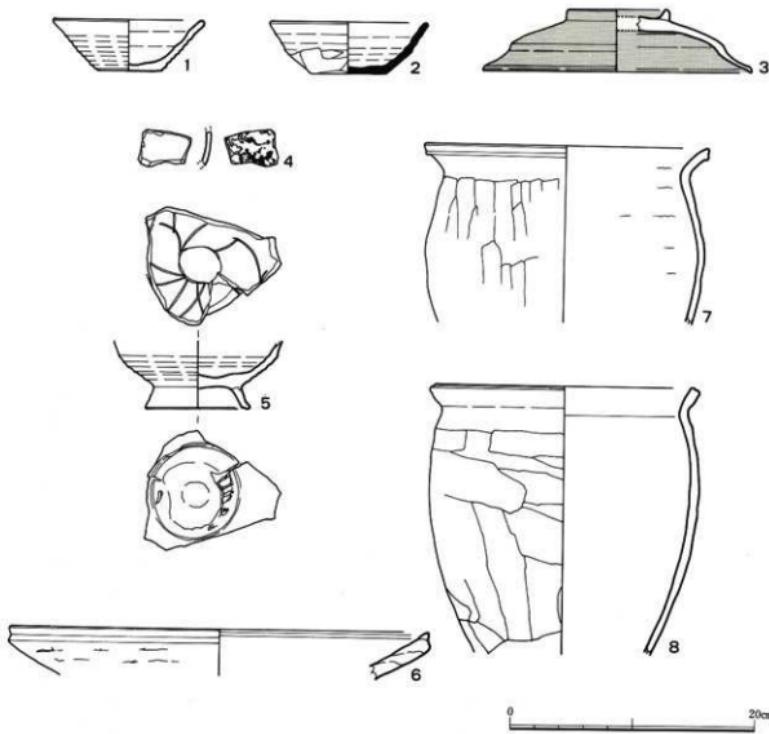
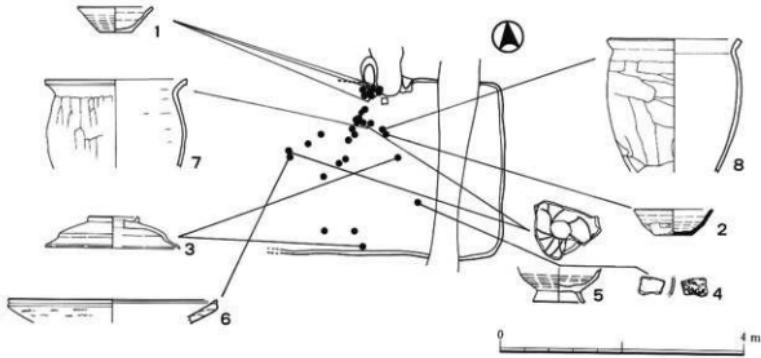
1は壺A、底部調整は回転ヘラ削りである。2は須恵器壺Aで底部の調整は下端～底部ヘラ削りである。3は縁釉蓋である。口縁部が84号住覆土中より出土し接合に至っている。口縁部は端部で短く折れ曲がり、体部中位で棱を有して屈折する。鉢は環状となり接合は埋め込みではなく貼り付けと思われる。内外総釉掛けで若草色を呈し、胎土は硬質である。鉢・内底部の擦痕より蓋としてではなく、皿として使用されている。むろん口縁部に擦痕はない。したがって当初より蓋と縁楕のセットとして供給されたものではない事が分かる。この器形は金属模倣が特徴的であり、猿投窓鳴海地区に類例が求められ黒笠90号窯式に比定されるものと思われる。4は三彩瓶の破片である。被熱により変色している。5は椀Bである内底部に線刻で蓮華を意匠する。高台部接合は貼り付けであるが、身の方に窪みを入れ接合面を強化している。



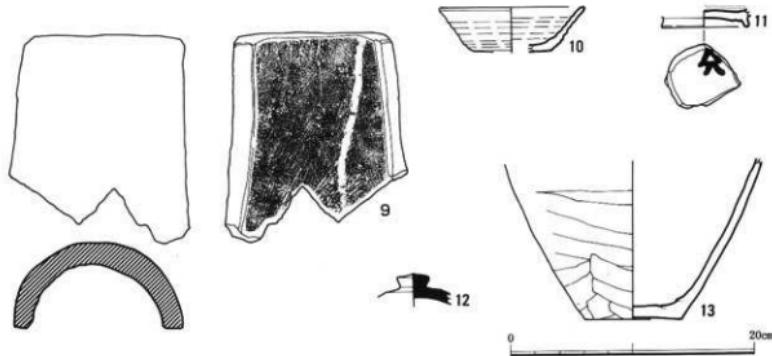
三彩陶器



緑釉陶器

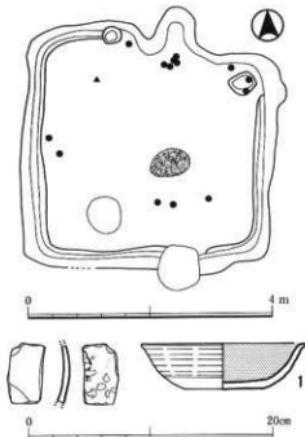


第61図 74号住居跡・出土遺物（1）



第62図 74号住居跡出土遺物（2）

6は鉢の口縁部片である。輪積み痕が顯著にみられ口縁端部は摘み上げられる。7は壺A・8は壺Cである。調整は7が縦位ヘラ削り、8は縦位ヘラ削り+上・下位横位ヘラ削りを行なうなど周辺（常陸）の技法とは異なる。9は丸瓦でカマドからの出土である。凸面はヘラで丁寧にナデられている。凹面には糸切り痕・布痕（布縫じ痕）が残る。狭端部には玉縁が付かない行基葺である。10は壺A底部ヘラ削り、11は壺Bで外体部に墨書「允」がある。墨書はこれ1点だけである。12は須恵器蓋で鉢は扁平な宝珠である。13は壺Aの胴～底部で胴部中位の調整は斜ヘラ削りで、さらに下位をヘラ削りする。



第63図 75号住居跡・出土遺物

貯蔵穴・壁溝なし：床面には中央より北側にピットが東西に3個（P 1～3）が並ぶ。P 1は楕円形を呈し最大径34cmを測る浅い掘り込み（深さ10cm）は上面が還元化され、下位は被熱により焼土化されていた。P 2は直径23cm、P 3は長軸30cm、短軸23cmの楕円形を呈し、被熱により黒色化された円窪が立位されていた。いずれも

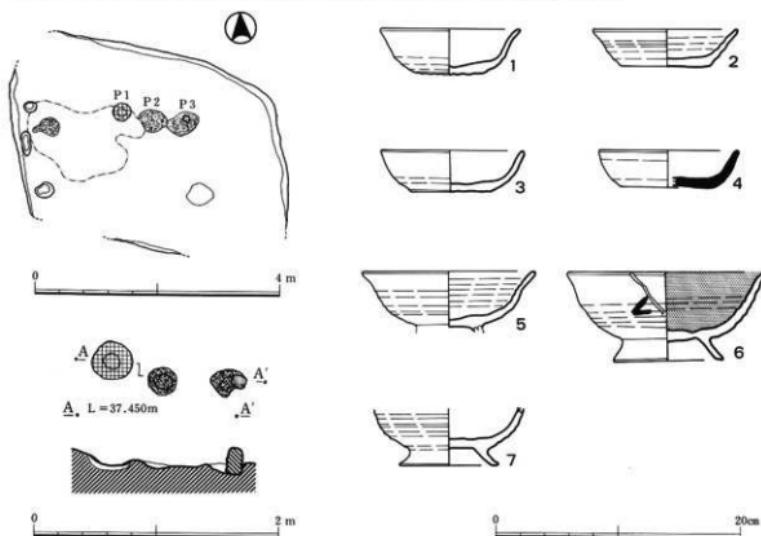
#### 75号住居跡

形態 方形：規模 3.85×3.75m：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴は東隅角に位置する：壁溝はカマド部を除いて全周する：遺物 床着は（カマド）2、覆土中1がある。2は壺A（内黒）で底部調整は下端～底部回転ヘラ削りである。図示していないが、カマドより小型壺A（胴部縦位ヘラ削り・下位斜位ヘラ削り）が出土している。1は三彩陶器瓶片で、表面は剥離・被熱により変色している。墨書は「朱墨痕」が1点出土している。

#### 77号住居跡（小鐵冶跡）

形態 基本的には方形であるが遺存状況は悪く、わずかに残る壁面より推定して平行四辺形を呈す：規模 3.05×4.40m：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴・カマド・

内部には焼土と炭が混じる。鉄滓は出土していないがこの状況より小鍛冶跡と思われる。遺物 遺存状況は浅いため遺物は床着とみなした。1～3は壺A・4は須恵器壺A、5～7は壺Bである。底部調整は1の回転ヘラ削り無調整を除き回転糸切りである。墨書き6に見えるが「墨痕」である。



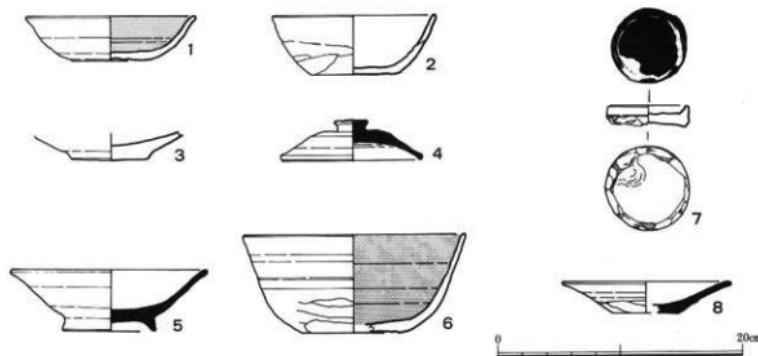
第64図 77号住居跡・出土遺物



第65図 79号住居跡出土遺物

#### 79号住居跡

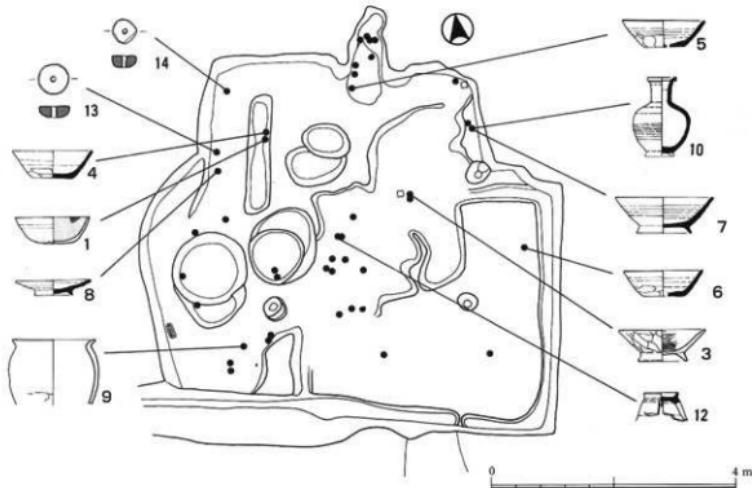
形態 方形：規模  $5.40 \times 4.90\text{m}$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴不明：北カマド：貯蔵穴：壁溝不明：80号住居を切る：擾乱大：遺物 すべて覆土中よりの出土である。1は須恵器壺Aである。ロクロ目が強く残り、底部は丸底となる。底部の調整はヘラ削りである。色調は明白白色を呈する。2は須恵器蓋で鉢は宝珠形を呈す。3は須恵器平瓶で胴部下位の遺存である。4は須恵器壺A大型である。口縁部は「くの字」形に折れ曲がり、端部は断面三角形を呈する。頸部には1条の凸帯を貼り付け、胴部外部は縦位の平行叩きを施す。内部の當て具は無文である。3・4の胎土は灰色を呈し黒色粒を多く含むところから撤入品と思われる。



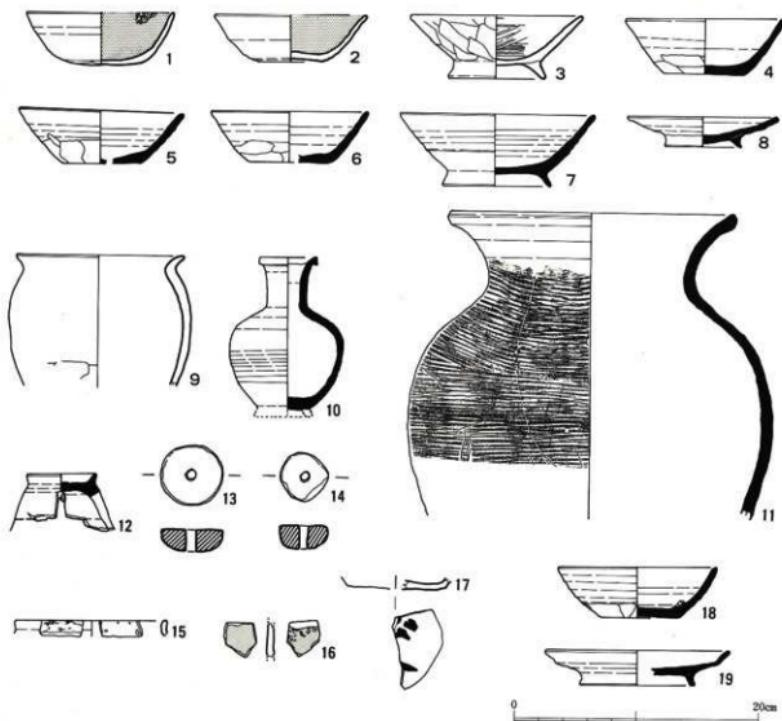
第66図 83号住居跡出土遺物

83号住居跡

形態 方形：遺物 1～7は床着、8は覆土中である。1・2は壺A、3は皿A、4は須恵器壺B蓋、5は須恵器壺B、6は椀Aで内黒、7は転用硯で外底部には朱墨痕が遺存する。もとは灰釉椀で高台は三日月状を呈し、打ち欠いた部分は研磨する。8は須恵器皿Aである。底部の調整は回転ヘラ切り無調整（1）・回転ヘラ削り（3）・下端～底部ヘラ削り（2・6・8）の3種類がある。図示できないもので甕C片、須恵器盤B片（新治窯）・瓶片、灰釉椀片（光ヶ丘1号）がある。



第67図 84号住居跡（1）



第68図 84号住居跡出土遺物（2）

84号住居跡

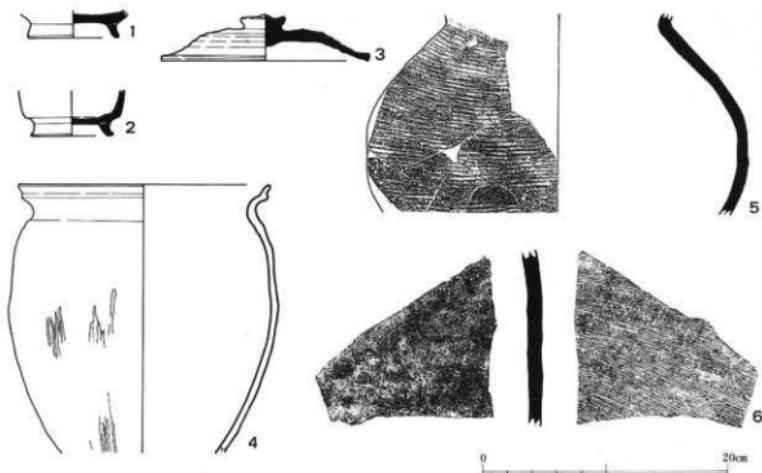
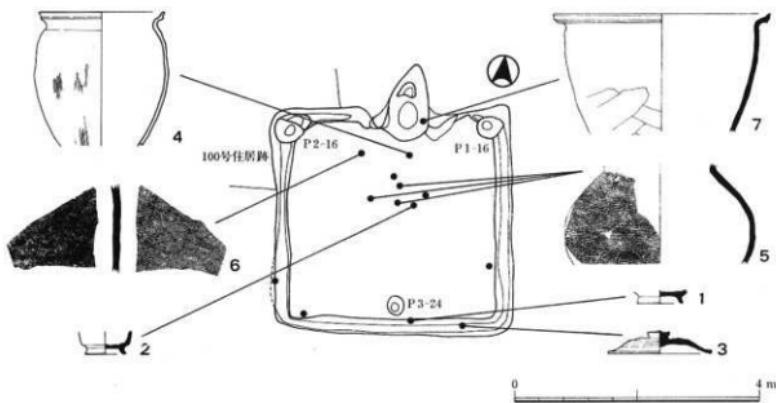
形態 方形：規模  $4.00 \times 4.00\text{m}$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴・カマド・貯藏穴・壁溝全周？：74号住との切り合いは明確でない。遺物 床着は1～13、覆土中は15～19である。1・2は壺A・3は壺Bで外体部いっぱいにヘラ削りされる。4～6は須恵器壺A・7は壺B・8は皿Bである。9は甕C・10は須恵器壺M・11は甕A小型・12は側面に十字透かしを入れるとろから小型の円面鏡と思われるが、擦痕は見られない。また、天地逆にして高台部に当たる部分にはわずかに擦痕が見られ、小型の壺Bで明器的な使用例を見たが明確でなかった。13・14は石製紡錘車、覆土中15は三彩陶器短頸壺、16は綠釉陶器片、17は墨書「公人」か、18は須恵器壺A・19は盤Bである。他に須恵器高盤片、灰釉段皿片（K90）がある。



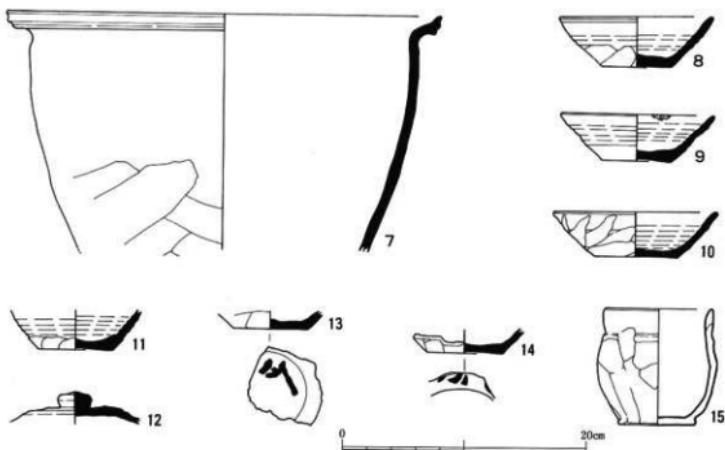
第69図 93号住居跡出土遺物

93号住居跡

形態 方形：規模 2.40×2.50m：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴南1：カマド？：貯蔵穴なし：壁溝全周：93号住は94号住を切り、92号住に切られる。遺物 床着は1・2、覆土中は3である。1は須恵器壺A調整は下端～底部ヘラ削り、2は須恵器蓋で口縁端部は折れ曲がりが少ない。図示していないが他に小型壺A片・甕A片がある。3は須恵器長頸瓶の口縁部である。



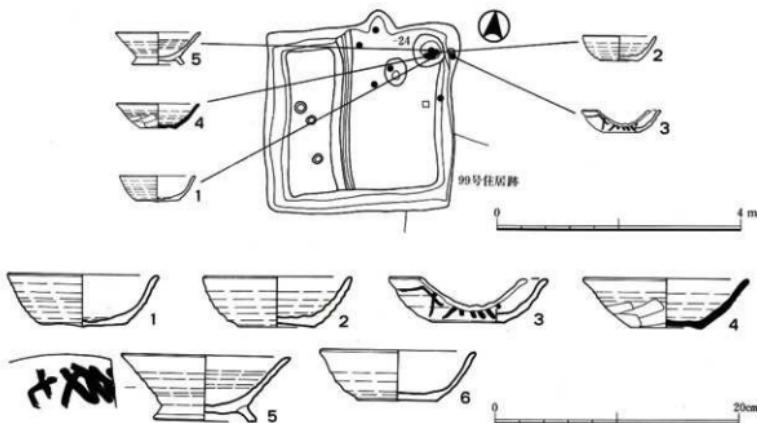
第70図 99号住居跡・出土遺物（1）



第71図 99号住居跡出土遺物（2）

#### 99号住居跡

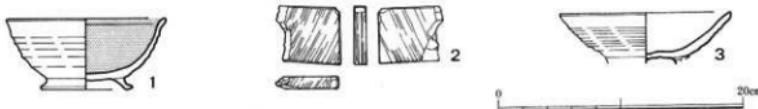
形態 方形：規模  $3.55 \times 3.65m$ ：主柱穴なし：支柱穴は北壁両脇にP1・P2がある：梯子柱穴は南壁に近接してP3がある：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝全周：遺物 床着は1～7、覆土中は8～15である。1・2は須恵器壺B・3は蓋で口縁端部は断面三角形を呈す。4は壺Aでわずかにヘラ磨き痕が残る。5は須恵器壺A小型・6は須恵器壺A大型で内面無文叩き、外面は継位平行叩きである。8～11・13・14は須恵器壺B、12は須恵器蓋である。15は小型壺Bである。墨書は5点（8・9・11・13・14）出土したがいづれも判読は不明である。



第72図 100号住居跡・出土遺物

### 100号住居跡

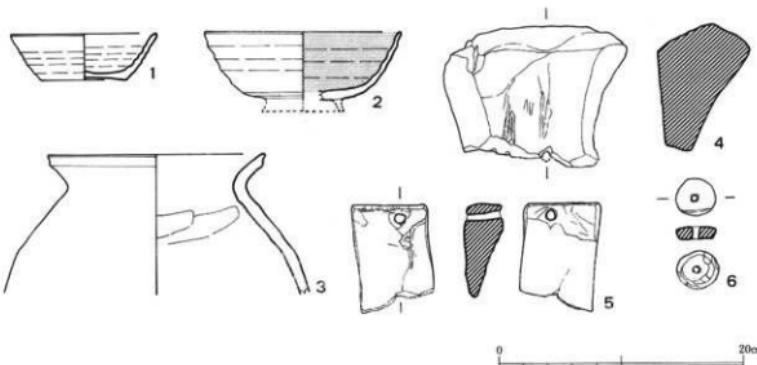
形態方形：規模  $2.90 \times 2.90\text{m}$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯藏穴は北東隅に位置する：壁溝全周（周溝内に小ピット）：また間仕切り溝が南北に走り、西側の床面が東側に比べ高くなっている：遺物 床着は3、貯藏穴中は1・2・4・5、覆土中は6である。4の須恵器を除いて土師器である。また5の環Bを除いて環Aである。底部の調整は回転ヘラ切り無調整（1）、下端～底部ヘラ削り（4）、回転糸切り無調整（2・3・5・6）がある。墨書きは2点出土し3・5の「後七」であるが、特に3は「後七」部分を故意に打ち欠いている。



第73図 101号住居跡出土遺物（2はスケール1/2）

### 101号住居跡

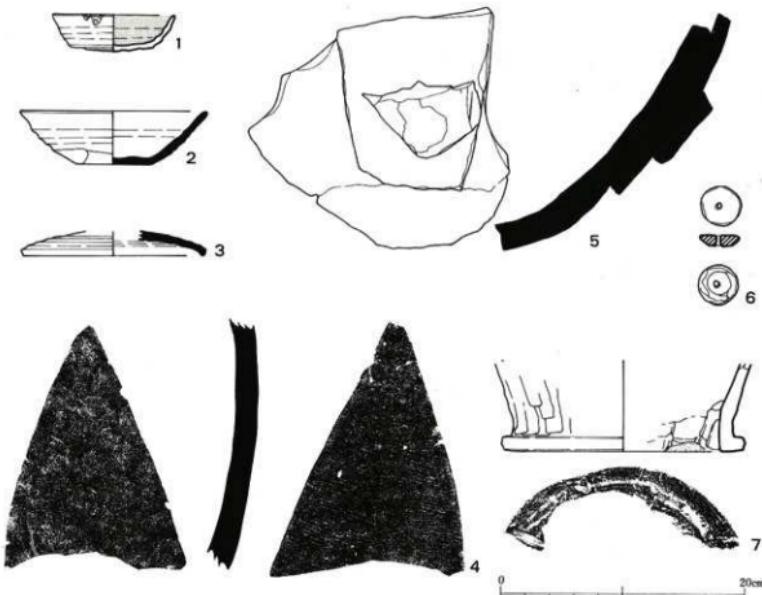
形態方形：規模  $3.55 \times 3.10\text{m}$ ：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴東南側に1本：北カマド：貯藏穴なし：壁溝は全周し周溝内に小ピットが多く見られる。遺物 床着は1・2、覆土中は3である。1は椀B（内黒）で底部回転ヘラ切りである。2は滑石製未製品で縦2.3cm、横2.4cm、厚さ0.5cmの方形を呈すが片面は欠損している。欠損部を除いて研磨痕が残る。3は环Bで高台部を欠き、底部回転ヘラ切りである。



第74図 109号住居跡出土遺物

### 109号住居跡

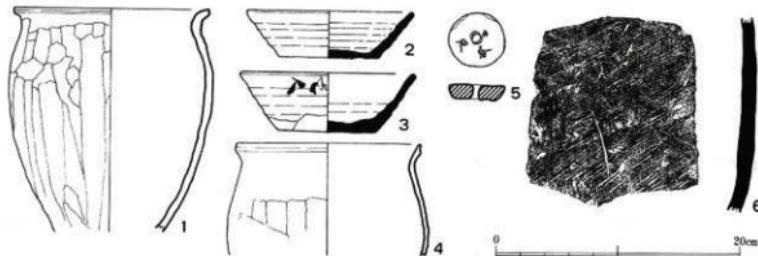
形態方形：規模  $3.25 \times 3.85\text{m}$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴南壁に近接して1本：北カマド：貯藏穴なし：壁溝西側：107号住に切られ、110号住を切る：遺物 床着1～5、覆土は6である。1は环Aで底部の調整は回転糸切り無調整である。2は椀B（内黒）で調整は下端～底部回転ヘラ削りである。3は壺A、4（凝灰岩製）、5（安山岩製）は磁石と共に穿孔される。6は土製紡錘車である。



第75図 110号住居跡出土遺物

110号住居跡

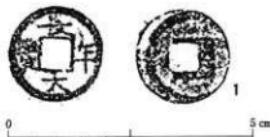
形態 方形：規模  $2.74 \times 0.6$  m：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴不明：北カマド：貯蔵穴・壁溝不明：109号住を切る：遺物 床着は1～5、覆土中は6である。1は壺A（内黒）口径10cmの小型壺である。口縁部に油煙が付着するところから灯明用として使用されている。底部は回転ヘラ切り無調整である。2は須恵器壺Aで底部の調整は下端～底部ヘラ削りである。3は須恵器蓋で口縁端部は折れ曲がる。4は須恵器壺A大型の破片である。5は焼き台でサス粘土に壺A大型の破片が3枚付着する。4・5共に内面は無文当て具・外面は平行叩きである。6は土製鉗鉤車、7は壺の底部に鍔が付く、透かしは多孔となる。



第76図 113号住居跡出土遺物

### 113号住居跡

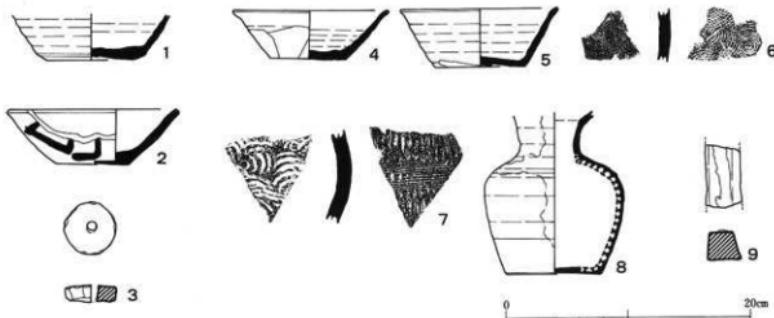
形態方形：規模  $3.64 \times 3.60$ m：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴・壁溝なし：111号住を切る：遺物 床着は1、覆土中は2～6である。1は小型壺Aである。調整は縦位ヘラ削りである。カマドより非口坏A（放射状暗い）片が2点あるが113号住には伴わない。2・3は須恵器坏Aである。いずれも口縁～体部は直線的に開き箱形を呈す。2の調整は回転ヘラ切り～下端のヘラ削り。3は下端～底部ヘラ削りである。いずれも胎土中に雲母を含む。4は小型壺A、5は土製紡錘車で線刻により「兄」カ「春」カが見える。墨書は2にあり外体部「□人」がある。



第77図 117号住居跡出土遺物

### 117号住居跡

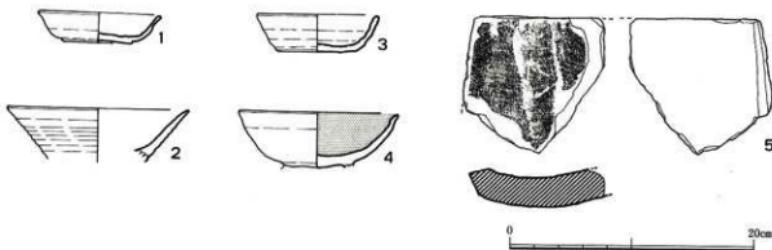
形態方形：規模  $2.90 \times 2.80$ m：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：カマドは北→東に移動する：貯蔵穴なし：壁溝全周：遺物 すべて覆土中の所産である。1は銅鏡「長年大寶」である。径は1.92cmと小さく、裏面には鋳型のズレが見られる。発行年月日は嘉祥元年（848）9月である。その他に坏A片、須恵器壺A片がある。



第78図 119号住居跡出土遺物

### 119号住居跡

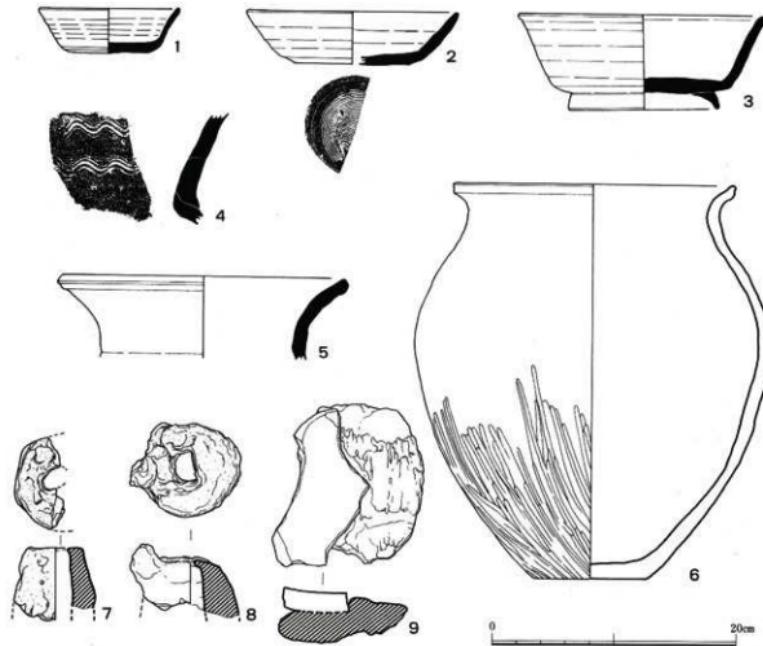
形態方形：規模  $3.0 \alpha \times 4.8 \alpha$ m：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯蔵穴なし：壁溝不明：118号住に切られる：遺物 床着（カマド）は1～3、覆土中は4～9である。1・2は須恵器坏Aである。1の底部は回転ヘラ削り調整で、所謂あたり（二次底部）が残る。2は下端～底部ヘラ削り調整である。共に胎土には海面状骨針を含むところから木葉下窓産と思われる。3は土製紡錘車である。4・5は須恵器坏Aで共に下端～底部ヘラ削り調整である。6は須恵器壺A大型の破片であるが、内面には無文当て具、外面は同心円叩きが施される。6は須恵器横窓である。内面は同心円當て具、外面には平行叩き～カキ目が施される。8は須恵器壺Mである。胴部最大幅と底径の差は余りなく、底部は平たく高台は付かない。口縁部より胴部に亘り自然釉が流れる。口縁部を欠くがほぼ完形での出土である。8は砂岩製砥石で一部鉄鏽が付着する。墨書は3点出土し2は打ち欠かれるが「合」カ、他に「中」カ、墨痕がある。



第79図 123号住居跡出土遺物

123号居跡

形 縱 方 形：規 様  $4.00 \times 4.46m$ ：主柱穴・支柱穴なし：梯子柱穴は南側に 2 本：東カマド：貯藏穴北東隅に位置する：櫛溝南西側：遺 物 床着は 1・2、覆土中は 3～5 である。1 は壺 A で、口径 10cm の小型品である。調整は回転糸切り無調整である。2 は壺 B でロクロ目が強く残る。3 は 1 と形態を除いて法量・調整は同じである。4 は椀 B（内黒）で高台部を欠損する。5 は平瓦で凸面に離れ砂、凹面に桶巻痕が見える。



第80図 127号住居跡出土遺物

## 127号住居跡

形態 方形：規模 3.20×4.20m：主柱穴・支柱穴・梯子柱穴なし：北カマド：貯藏穴なし：壁溝全周：遺物 すべて覆土よりの出土である。1・2は須恵器壺Aである。1は底部の調整回転ヘラ削り、2は回転糸切りの下端回転ヘラ削りとなり在地周辺（常陸）の技法とは異なる。3は壺（鉢）Bは大振りであり口縁～体部は直線的に開き、高台部は断面三日月状となる事を特徴とする。4・5は壺A大型の頸部・口縁部で、共に雲母を含む。6は壺Aで典型的な常陸型壺である。7・8は輪羽口先端部片であるが周辺の遺構より鉄滓の出土は見られない。9は須恵器窯に使用するスサ粘土を固めた焼き台である。焼き台には須恵器大壺Aの破片が付着し、内面は無文當て具痕が見られる。

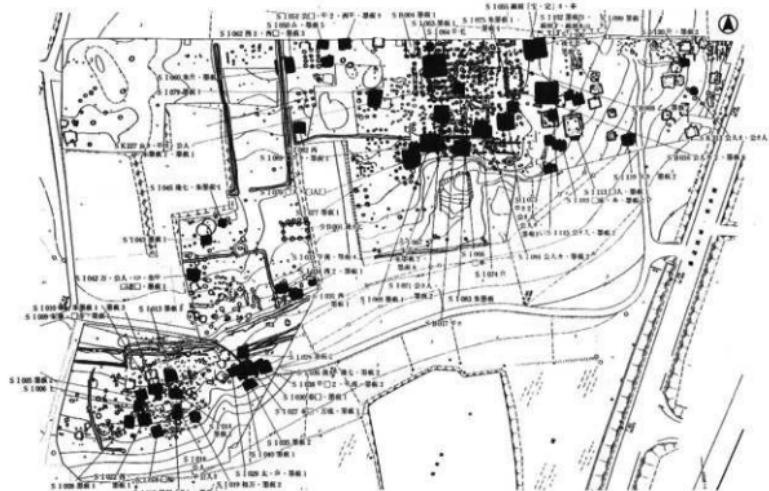
## 墨書き器

文字資料は、遺構・表探資料を含めて墨書き・線刻が250点出土している。

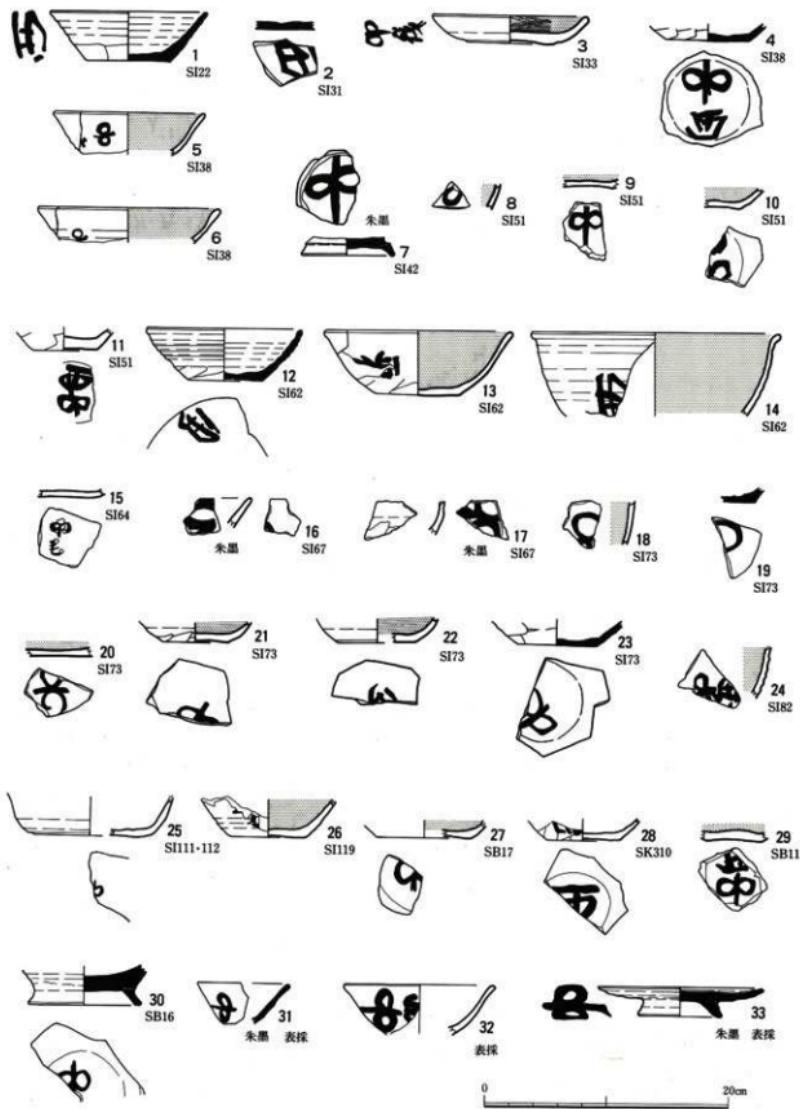
掲載した文字資料は、遺構図版中の遺物実測図は遺構の廃棄年代を知るために完形遺物を主体としたため、すべてに亘って網羅できなかった。ここでは細片に至るまで集成して文字別・遺構別・時期別に分類を試みようと思っている。

墨書き資料には、「西」「中」「中西」「西中」「中後」「中毛」「公人」「中公人」「本」「口奉」「㊀」「後七」「口寺口」「万福」「福万」「万成」「口達口」「夫」「口車」「口床」「口佛申口」「ム」「允」「会」「口」の25種類が判読可能であった。線刻文字は「井」「定・宝」を「又」「乙」「×」「大」「才」「水山」「R」の7種類があるが、「又」「乙」「×」は窯印あるいはヘラ記号と思われる。

以下、各々の墨書きについて上記の分類にしたがって述べる。



第81図 墨書き器出土分布図



第82図 墓書土器集成図（1）

「西」は1・2・12・22・28・135・186の8点である。文字位置は1の外体部横位を除いて2・12・22・28・136・137は外底部である。13（外体部横位）・14（外体部横位）は「西が□」である。

「西中」は11・24・29・32の4点である。文字位置は24・32が外体部横位、11・29が外底部である。

「中西」は4（外底部）の1点である。

「中」は7・9・20・21・23・25・27・30の11点である。文字位置は外体部横位が17・31・33である。内底部は7、外底部は9・20・21・23・25・27・30である。中でも7・31・33は朱墨である。26は外体部横位に位置するが剥離が激しく「中」とした。また204も同様と思われる。

「中後」は3（外体部横位）床着よりの出土で1点のみである。

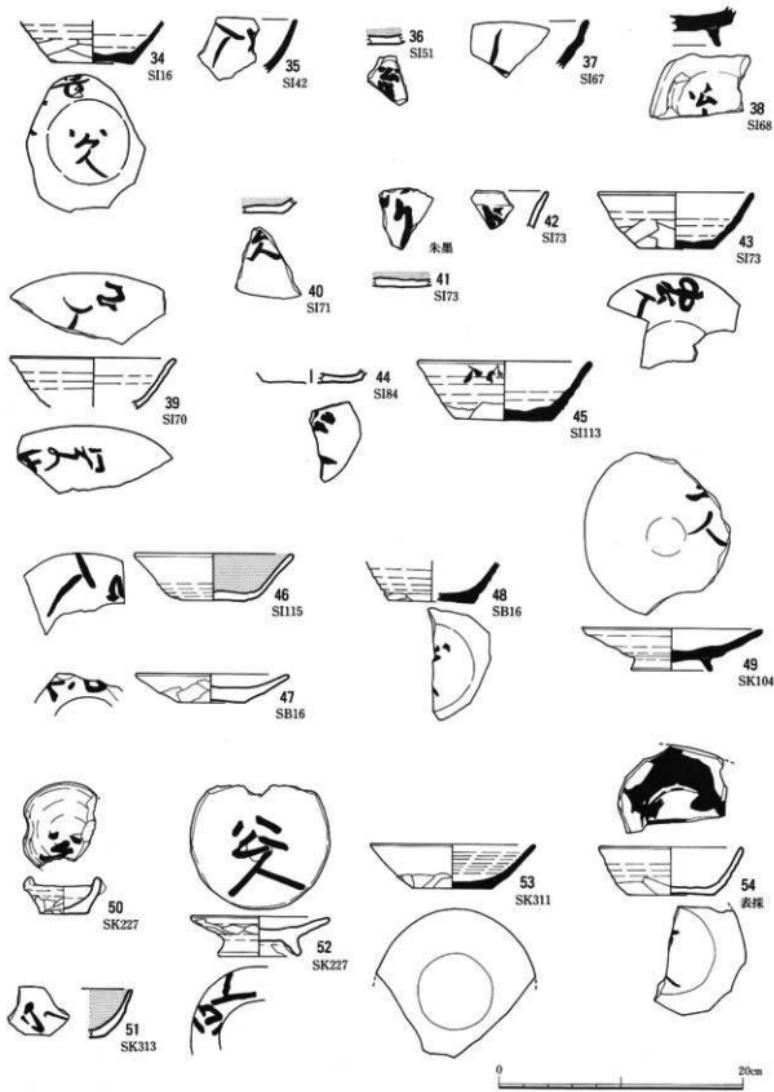
「中毛」は非ロクロ坏（外底部）に書かれたもので本遺跡において、出現期に関わる墨書である。

「公人」は34・39・50・52の4点である。文字位置は39・50が内底部、34が外底部、52は内・外両底部にある。特に34には外体部に「中公人」が加わる。また39の外体部には「□人□」がある。他に可能性があるものでは35（外体部横位）・40（外底部）・39（内体部横位）・46（外体部横位）・49（内底部）・51（外体部横位）・53（外底部）・54（外底部）の8点は「□人」、38（外底部）・41（内底部）・44（外底部）45（外体部横位）・48（外底部）の4点は「公□」であり、これらを加えると16点となる。41は内黒に朱墨で書かれ、54は土師器であるが内底部に墨痕が顕著であり硯として使用されている。

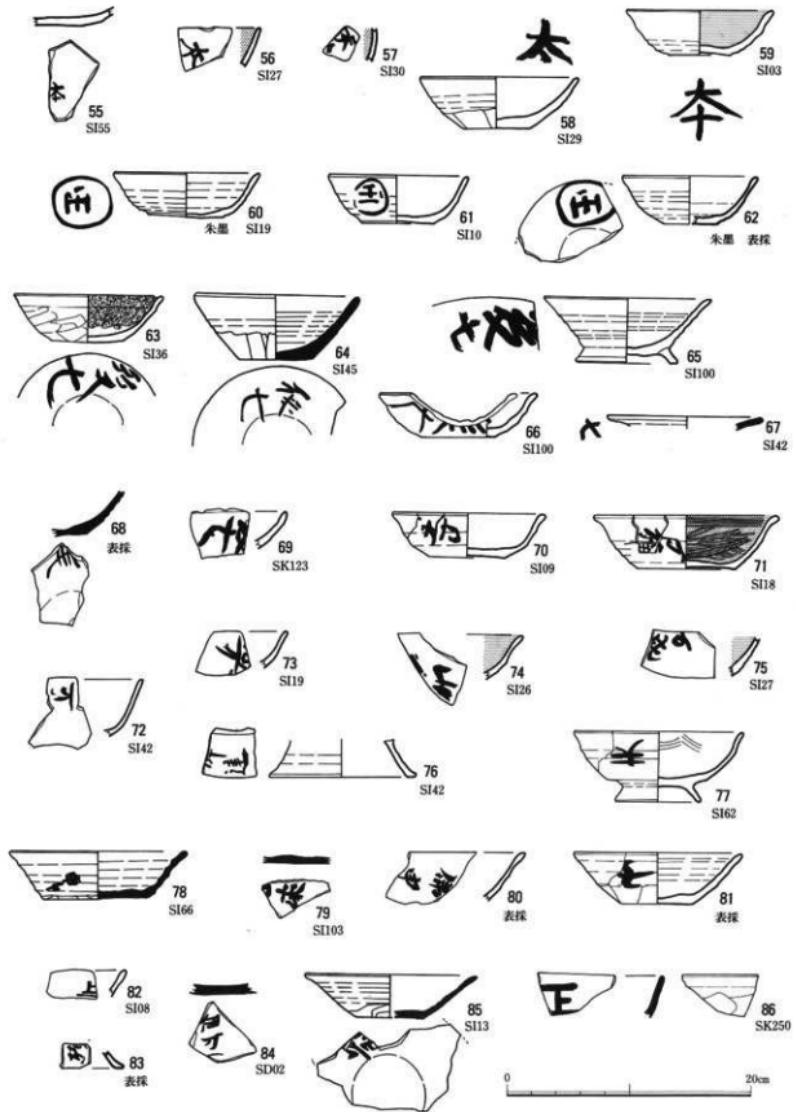
「中公人」は34・43の2点である。34は外体部横位が「中公人」、また外底部にも「公人」が見られる。43は外体部横位である。

「本」は55・56・59の3点である。文字位置は55・59が外底部、56が外体部横位である。55は非ロクロ坏で8世紀前～中葉に比定される。57は外体部横位「□奉」、58は内・外体部正位「太」がある。「㊀」は60～62の3点ある。60・62は朱墨で外体部横位に、61は外体部正位である。「後七」は63～66の4点で、すべて外体部横位である。66は「後七」の位置を故意に打ち欠いている。可能性のあるものとして67～69がある。67は「□七」、68は「後か」、69は「□七」で共に外体部横位である。70は外体部横位「□寺□」、71は外体部横位「万福」、72は外体部横位「萬□」、73は外体部横位「□万」、75は外体部横位「万成」、76は脚部横位「□達□」、77は外体部倒位「夫」、78は外体部横位「□車」で8世紀後葉である。79は外底部「□床」、80は外体部横位「□佛申□」、81は「弔」であるが「中」の可能性もある。82・83・85・86は墨痕、84は外底部「伊万□」である。87は外体部「△」、「命」は88・92・94・97の4点である。いずれも外体部に位置し、92は打ち欠いた状況である。114は「命」の可能性がある。「允」は89～91・93の4点である。89・90は外底部、91・93は外体部に位置する。102は外体部「□」である。95・96・98・99は墨痕である。98は「□南□」100は外体部の下位に、均等に縱位で縞状に墨痕がある。101は外体部に「二」の縱位となるものである。109は非ロクロ坏である。111は「乙」、103～110・112・113・115～134・138～238は墨痕で、特に119・145・159・177・201・227・236は朱墨痕となる。

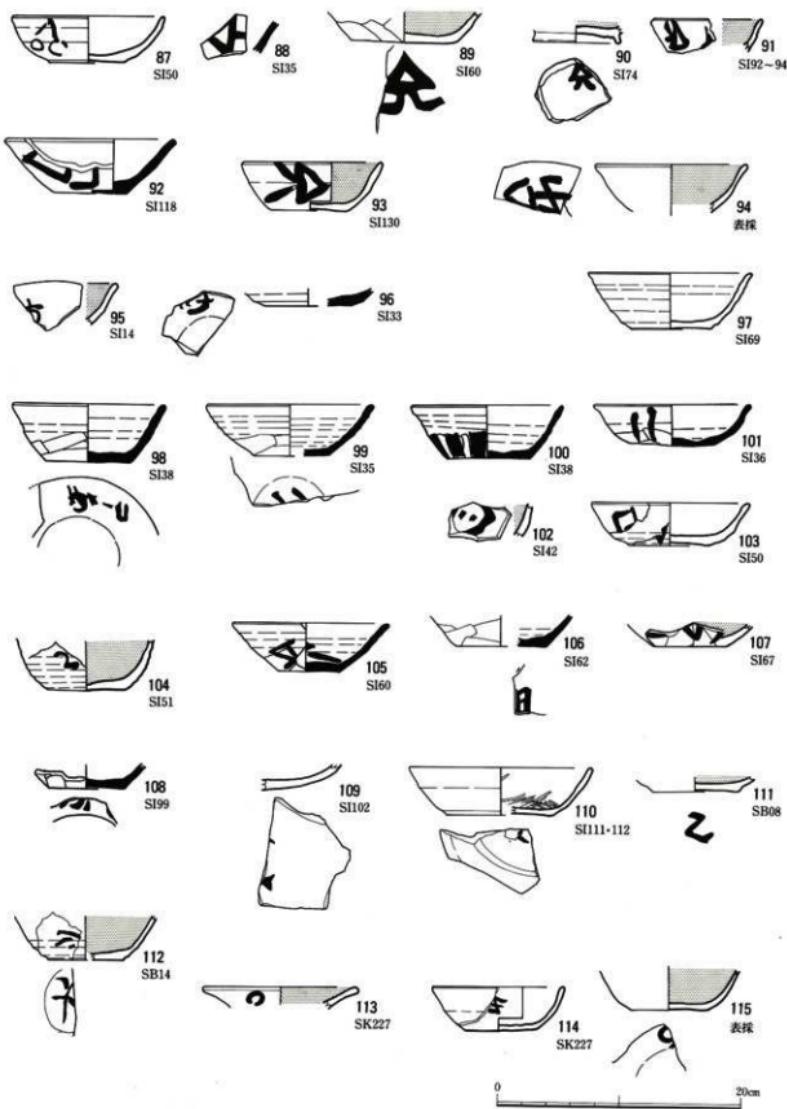
線刻文字・ヘラ記号は12点出土している。そのうち線刻文字は7点、ヘラ記号は3点見られる。239は「井」で外底部に位置する。「井」の下位に高台部が抉れているのは偶然なのであろうか。240「X」、241は外底部に位置し、下位が欠損するため明確でないが「定・宝」か、242は外側部「X」、243は外底部「又」、244は外底部「X」、245は外底部「乙」、246は外底部「X」、247は外底部「大」、248は非ロクロ坏で外底部に「才」、249は皿Aで外底部に「水か山か」、250は非ロクロ坏で外底部には「R」に類似する文字あるいは記号が見える。



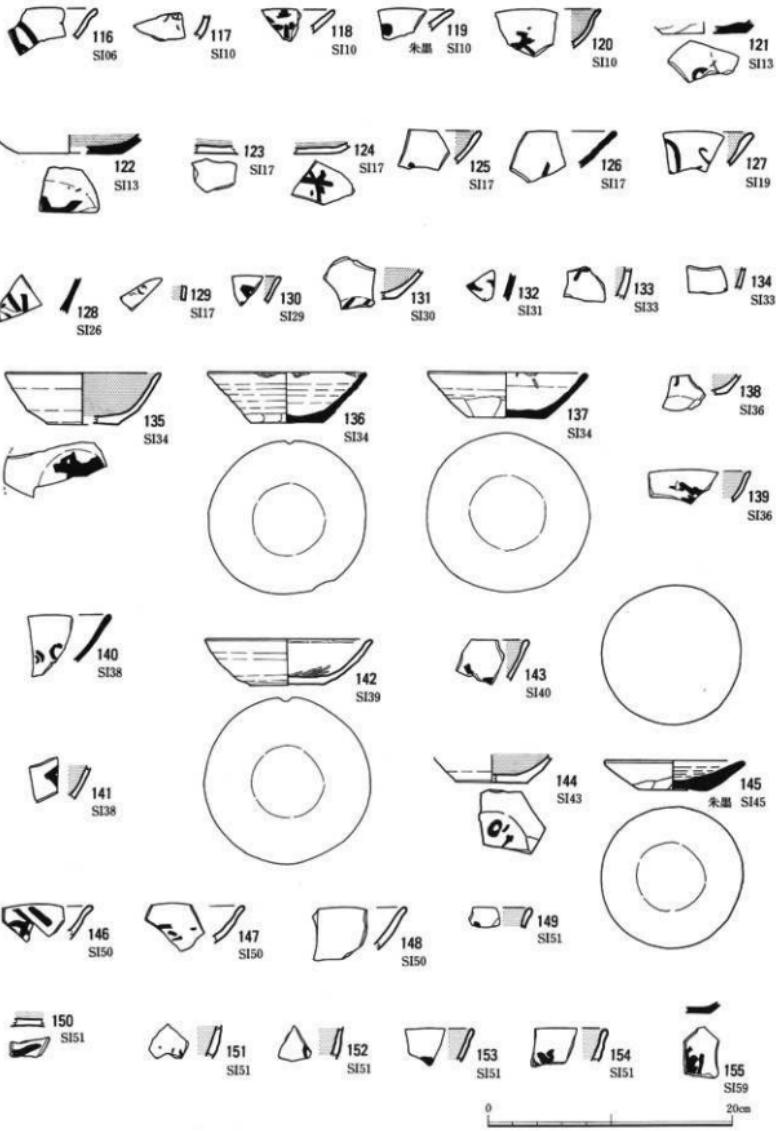
第83図 墓書土器集成図（2）



第84図 墓書土器集成図（3）



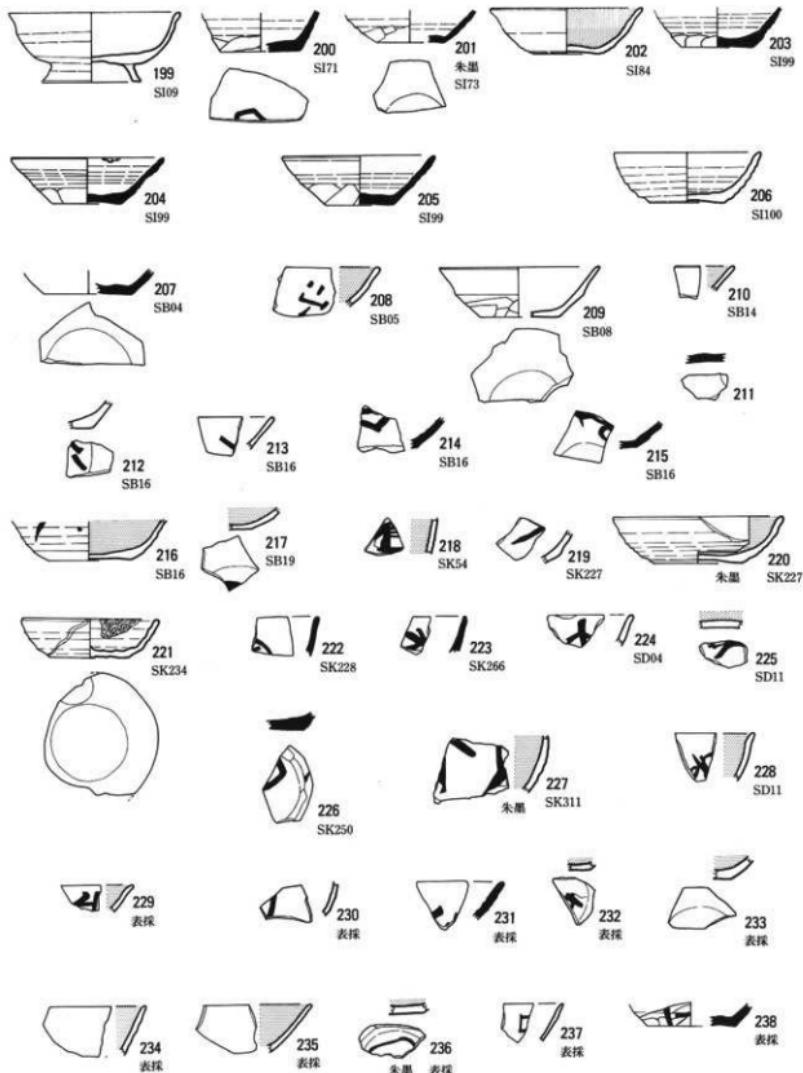
第85図 墓書土器集成図（4）



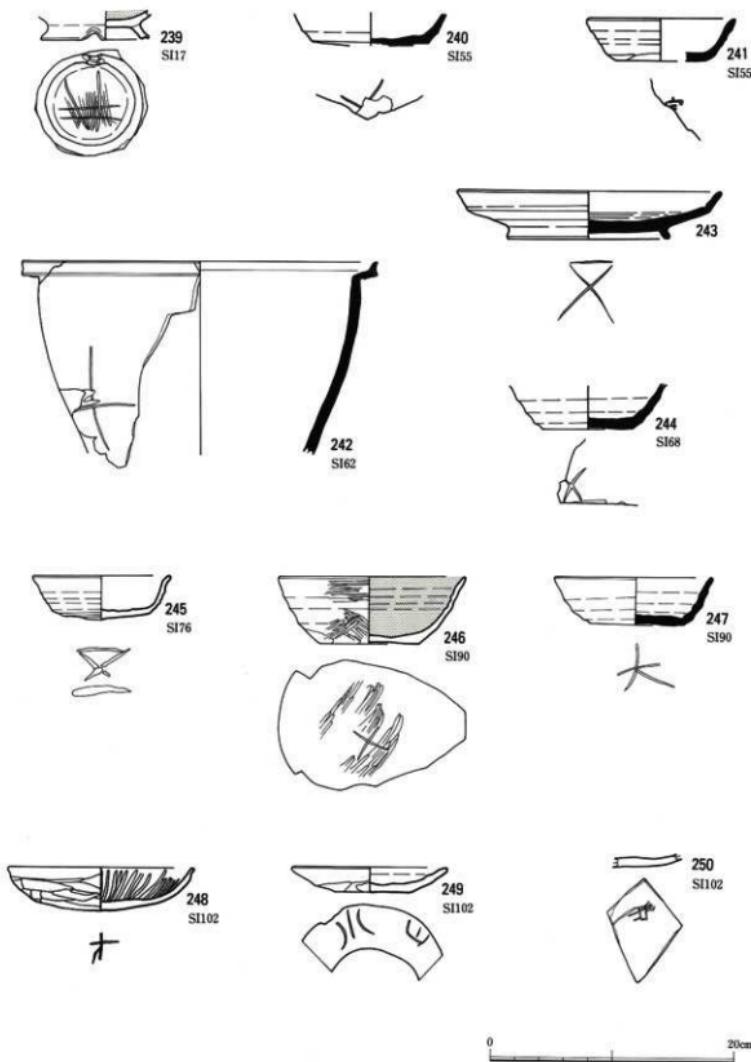
第86図 墓書土器集成図（5）



第876図 墓書土器集成図（6）



第88図 墓書土器集成図（7）



第89図 墓書土器集成図（8）